

Raptured (歓喜)

終わりのラッパとともに、一瞬のうちに私たちは変えられるのです。
(コリント人への手紙、第一 15 : 52)



作者、アーネスト、エンジェリー牧師

第1章

それは、冬の寒さが完全に去っていない厳しい寒さのある春の始めの朝でした、丘の上に顔を出したばかりの太陽が、この古い大地に陽気におはようと言っているような空気も春の香りで満ちて、鳥たちもまるで春を喜んでいるかのように大きな声で歌っている、それはいつものように多くの人々が朝起きる時間にアラバマ市に起きたことでした。

突然に何百人という人たちが空の中に消えてしまったのです、もし皆が一つの場所から消えてしまったのなら、そんなに混乱することもなかったでしょう、しかし、市内のいろいろな場所から人々が消えてしまったのです、非常に恐ろしい悲劇的な事が彼らの町に起こったことに対して残された人々はぞっとした。

多くの人々は家族や愛する人々とともに眠りについたのに、朝起きてみると彼または彼女の夫や妻、そして小さな子供たちが何も持たずに消えてしまったのです、ほとんどの家族が直接的または直接的でなくても、このことに関わりをもちました、すべての赤ちゃん、そして幼児が町の中から消えてしまいひとりも残されていなかったのです、ある家では夫が消えてしまい妻が残され、ほかの家では妻が消えてしまい夫が残されてしまったのです。

それらの事は全くの混乱状態を巻き起こしました、人々は車を運転している最中にその車を止める時間もなく運転手が突然消えてしまい、自動車も突然に運転手がいなくなり脱線してしまい、飛行機も突然にパイロットを失い、地上に墜落し、地上に残された人々は啞然としながらあてもなく行方不明になってしまった家族を探し求めました、人々は気が狂ったように道を走りながら人々を探し回り混乱状態で泣き叫んでいました、特別ニュースでは説明のしようのないままテレビやラジオでアナウンサーがこの信じがたい出来事を伝えていました。

「何千人もの人が今日の朝 6時ごろに突然消えてしまった、政府も全く説明ができないような歴史上最も信じがたいミステリアスな事件」、電話があらゆる所から他の町そして他の都市、また他の国からも次々と鳴り始めました、それらのリポートはみな同じように動揺した表現で多くの人々が空中で消えてしまったといろいろな場所で伝えられていました、人々は突然にいなくなってしまう、それも何の足跡も残さず生きているのか死んでいるのかもわからない状態でした、一体この全世界に何が起こったのか！ 多くの人々の口から出た質問は一体何が起こったのか！そして、あの消えてしまった人々は一体どこに行ってしまったのか！という質問でした、

またこれらに関して普通では考えられないような説明または弁明も伝わってきました。

それはただ昨日のことでした、母コリントは、彼女が好きだった教会で牧師が「ラプチャー」と呼ばれる主の2度目の来臨のことについて話している説教に聴き入っていました、彼女は教会の席で姿勢正しく注意深く、牧師の語っていることばを一つも聞きのがすことのないように牧師の顔から目を一時もはなしませんでした。

この説教は母コリントの息子ジムと同じくらいの年齢の若い牧師によって告げられていたのです、彼女、すなわち母コリントは息子ジムのことを思うたびに涙が彼女の顔から彼女の着ているブラウスへと流れました、彼女は主の愛に包まれていたのです、主である神は彼女の夫ジムフォードがある寒い夜、突然にこの世を去ったのち何年もの間、彼女に神の愛によっての恵みを与えてきたことをいつも彼女に証していました、夫に死なれてしまった当時、彼女はもう生きている価値がないとさえ思い込んでしまっていたのです、そのようなときに彼女の3歳になる息子の心配そうな顔を見た時に彼女は生きる望みを彼女の息子ジムに見いだしたのです、その小さなジミーは彼女とジムフォードとの間にできた子供です、彼ジムは彼女たちの間にできた彼らの血であり彼らの肉だったのです、あのころの暗い思い出はすでに過ぎ去って、いま彼女は光まぶしい朝にふさわしいすばらしいメッセージ、主イエスキリストの2度目の来臨について聴き入っていたのです。

そうです、この教会でのこの若い牧師、レオマスペロという人は学者のように自信を持った話し方によって、彼の声はまさしく神の力が宿り、霊と一緒に教会の中に響いていました、彼は語りつづけます。「旧約聖書において、ユダヤ人が聖なる地に戻ってくることを神は約束されています、1921年以來神の約束されたとおり、ユダヤ人たちは世界中のあらゆる所から聖なる地に戻って来ているのです、そのうち、1948年にユダヤ人はまた再び一つの民族に立ち返りました、今日、現在のユダヤ人は世界中に散らされていた時よりももっと神の約束された聖なる地について真剣になっています、ですからここでよく考えて下さい、どのようにユダヤ人が戦ってこの聖なる地、イスラエルに戻ってきたかを考えてみると、確かに神の子、イエス・キリストが来られることがどれだけ近いかを認識されてきます、私達が神の子イエスと空中で出会うことを考えていると同じように、すなわち主イエスキリストの2度目の来臨のことを真剣に考えていると同じように、現在のユダヤ人たちはイスラエルのための贖い主がこの世に来られ、この地上に彼の王国を築きあげられることを待ち望んでいます。

しかしながら、彼らユダヤ人たちの救い主であり、贖い主であるイエスキリストはおよそ2000年前にこの地上に姿を現わしておられるのです、その当時のユダヤの民は彼イエスを神の子としては認めず、にせ者であり詐欺師として取り扱いました。

昔の預言者たち、モーセ、そしてイザヤ、その他の預言者たちが主の来臨のことについて救い主が来られることを語っていたのですから、彼らにとってそれは全く期待していなかったことではなく、主イエスの来臨があまりにもへりくだった形で来られたのが原因で彼らにとっては信じることができなかつたのです、それは彼らにとって彼らの王であるべき人が馬小屋にある、わらの上で生まれたということ、彼らの自尊心を傷つけたのは言うまでもありません、そのために「彼イエスを十字

架につけろ、そして、彼の血が私たちにまた私たちの子供にかかっても言いとどのの
したのです」彼らユダヤ人はそのように無知のために彼らの王であり最も高い地
位にある人を十字架にかけたのです。

今日、ユダヤ人たちは今でも彼らのメシヤ、ユダヤ人の王が彼らのために来るこ
とを待ち望んでいます、しかし、滅びの子すなわち不法の人、または、にせのキリ
ストが彼らのために姿を現わします、彼はユダヤ人たちが期待し待ち望んでいるメ
シヤとして的人格をすべて持ち合わせ、彼がその姿を現わすときユダヤ人は彼を彼
らの救い主キリストとして受け入れます。

母コリントズがその話を聞いている時、彼女は今日、中近東で起こっている問題の
出来事を新聞で読んだことを思い出していました、彼女の心は弱り果てていました、
それは彼女が主の来臨のときに主に会う準備ができていなかったのでもなく、主を
愛していなかったのでもなく、ただただ、彼女の一人息子ジミーが主に会う準備が
できていなかったからです、もし彼が主に空中で会うことができず、地上に取り残
され拷問を受け仕方なしに獣である反キリストのマーク 666 を受けてしまったら！
彼女はそれを考えるだけで心で「いけない、それだけは絶対にダメ！ 私の息子の魂
は絶対に救われなくてはならない」とつぶやくのでした。

若い牧師は語りつづけます、黙示録の6章の中にヨハネが「私は見た小羊が一つ
の封印を解いた時、白い馬に乗っている者は弓を持っていた、彼は冠を与えられ勝
利の上にさらに勝利を得ようとして出て行った。」とあります、人々の中には白い
馬に乗っているから、これがキリストだと考えておられる方がいますが、これはキ
リストではあり得ないのです、なぜなら小羊であるキリストが封印を解く人だから
です。

そこであなたは白い色は平和のシンボルを現わす色ではないのでしょうか？と尋
ねるかもしれません、その通りです、反キリスト、にせのキリストが来る時、彼は
平和の王としてくるのです、預言者ダニエルのことばを覚えておられますか！ 反
キリストは平和の名によって多くの人々を滅ぼすと書いています、私達が語ってい
る {Rapture} ラプチャーとは神の子が空中で御姿を現わされる時、教会であるキリス
トの花嫁が彼と一緒にいるために空中へ消えていくことです、「人々の中にはこの
反キリストがいつ来るのか！と考えるみたり、知りたがったりしています、しかし、
ダニエル書の9章の中にはダニエルが神に祈りをささげ自分の民であるユダヤ人に
何が起きるのか！ 悟りを求めた時、彼は断食をして祈りをささげ、神に彼らの罪を
告白した後に天からあなたの民については七十週が定められている」という答えが
与えられたのです。

私たちはこの七十週が普通の週ではなく、1週を7年として数えることを知ってい
ます、六十九週という年数はキリストを十字架につけることを実現するまでの年数
であり、その時までがユダヤ人のための時であり、それから異邦人の時が始まるの
です、ユダヤ人のためにはもう1週間という時、または7年間が残されていて、そ
の後にユダヤ人のための七十週が完全に成就するとダニエル書に書かれています、
ユダヤの残された1週間は異邦人の時が終わるまで始まることはありません、ラブ
チャー（歓喜）と呼ばれるキリストの花嫁がこの世から取り去られる瞬間に異邦人
の時が終わり、最後のユダヤ人の1週間が始まるのです。“あなたはキリストの花

嫁、すなわち教会は 7 年間の苦難の時の半分まではこの世にとどまるはずではないのですか？というかも知れませんが、しかしそれは聖書によると事実ではありません。イザヤ書 26 章 20 節” さあ、わが民よ、あなたの部屋に入り、うしろの戸を閉じよ。憤りの過ぎるまで、ほんのしばらく、身を隠せ。“とあります。聖書の最後にある黙示録の中には、七つの教会の中の一つの教会に対して、はっきりとこの世のすべての肉に対して下されるべきさばきの時にその苦難の時から救い出すと約束されています。

ですから、キリストの花嫁がその苦難の時にこの世に取り残されることは論理的に理屈に合っていません、もしそれが事実であるとするならば、私たちはその 7 年間の半分の時、すなわち、反キリストが現れるまでの 3 年半の時まで待つことができただけでしょう、そしてそのことにより、私たちは 3 年半という時をもって、そのうちに歓喜（ラブチャー）の時を必然的に知ることになります、しかしそれは再び聖書に基づくものではありません、イエスは言われました、” 誰もその時を知りません、天にいる御使いたちもその時を知りません、人の子がいつ来るのか！ 誰も知らないのです “と書かれています。

反キリストの霊はすでにこの世に来ています、しかし彼は教会であるキリストの花嫁が取り去られるまで彼自身の存在を明らかにすることはできません、私は教会すなわちキリストの花嫁のことを水を止めているダムにたとえて考えてみる必要があります、水を止めているダムのように教会であるキリストの花嫁の存在は反キリストの現われを止めているのです。教会であるキリストの花嫁がこの世から取り去られる時に反キリストは大急ぎで自分の姿を現わし、ユダヤの民と 7 年間の契約を結びます。

すべてのことは歓喜（ラブチャー）すなわち、キリストの花嫁がこの世から取り去られる前に成就しなくてはなりません、例えば、世界中に散らばっていたユダヤ人がその約束の地であるイスラエルに帰って来ること、その通り、それはすでに現実には起きているのです。

教会の中で説教に聞き入っていた母コリンズの目は涙でいっぱいになっていた、太陽の光は教会のステンドグラスを光り輝かせ、鳥は楽しそうにさえずっているこのような日に教会で素晴らしいメッセージを聞けるとは！ ただ彼女の息子ジム、ジムの妻ルシールの魂が彼女と同じように救われていたならばと悩んでいました、そして、彼女の思いはジムが子供であった時に戻っていましたが、彼はその金髪の頭を下げ、いつも寝る前にこのような祈りをしていたのです、” 神様、私は今、床につきます、私の魂をお守りください、もし私が起きる前に死ぬようなことがあるならば私の魂を天に導いて下さい、私のお母さん、ジニーおばさん、そしておじさんビル、それからすべての人にあなたの祝福がありますように。”

このようなすばらしい思いを巡らしながら、彼女の心は、この子は一体大きくなってどのような人になるのだろうか！ ひょっとしたら、牧師になるのではないかも考えました、彼女の家族の中にはひとりも牧師になった人はいませんが、しかしひょっとすると神は彼を牧師として使うかも知れないと考えていました、多くの方は家族の中に流れている才能や血筋のことを思って家族の血筋の中にそのような才能を見いだす人も多くありません、しかし、神の仕事に関して言うならば、神はだ

れであれ、神ご自身が選ぶ者を選ばれ、選ぶ者を使われます、これが神のやり方です、ジムがもし、そのようにして神に使われるならば、これ以上の喜びはありません、神に選ばれ、神に油を注がれ神の偉大な真理を人々に伝える。

母コリントはこのような思いを一度だけカーランド夫人に子供たちが大きくなってどのような人間になるのかと話しあっていた時に漏らしたことがあります、その時にカーランド夫人は母コリントに向かってあきれ果てたような顔をして“牧師！”と言いました、それから彼女は母コリントに“スージーコリント、あなたがそのような二流クラスの退屈な人生を自分の子供に望むとは思ってはいませんでした、私は違います、私は自分の子供に世界中が崇拝するような有名人になってもらいたいのです、牧師なんてとんでもない！”と彼女を鼻であしらった、“そういえば、あなたは古風でかたい考えの人でしたねえ！ともあれ私はあなたが好きですから、もしジムが牧師になることがあなたにとって幸せならば、私はあなたのためにジムが牧師になるように私も期待しましょう。”

母コリントがこのような会話を思い出していると、ジムが子供であった時が昨日のように思えてきました、ジムは牧師になることを選びませんでしたし、彼は宗教に興味がなく神の子どもともなりませんでしたが、しかし彼は法律に興味を示し、それが彼の人生にとって最も重要なものとなりました。

さて若い牧師は引き続いて語った、“主の来臨はすでにととても近いように見えます、そのことに関しての聖書のしるしはことごとく成就しているし、そのことが今日、現実にも起きて聖書の預言に対して過ちを見いだせません、それは今日、現実にも起きるかもしれないのです。”

母コリントは聖書の中の黙示録とダニエル書を読んだことがあります、反キリストがこの世に現実に来ることは彼女にとってとても興味深いことでした、この若い牧師はそれらのことを彼女が今までに聞いたことがないほどにわかりやすく説き明かしていたのです、彼はイエスキリストの来られる時がとても近いことを感じていて、この教会の中で彼の説教を聞いているすべての罪人の人がこの説教が終わる前に悔い改めなくてはならないように話していました。

この牧師の緊急に迫った説教は続きます、“反キリストは彼自身の姿を現わします、そして、ユダヤの民と契約を結びます、ユダヤの民はとても喜び、音楽を奏でるバンドとともに行進をして喜ぶことは間違いありません、覚えていますか！ユダヤの民はこのことを長い間待っていたのです、彼らはイスラエルに宮を建て、彼らたちの先祖がしたように神にいけにえをささげるでしょう。

私の聞いたところによると彼らはすでにメシヤが来られる時のために石を切り開いて宮を立てる準備をしていると聞きました、ですから彼らは短い間に彼らの宮を立て彼らのいけにえを用意するでしょう。

私たちはこの反キリストを小さな角または邪悪な者、獣、地獄の子、その他いろいろな名前呼びますが、みな同じ人のことを言っています、聖書の中ではさまざまな呼び方をしています。

ダニエル書の中でダニエルは彼の手のわざによって栄えたと書いています、その意味は工場など、すべての産業が栄えることを意味しています、反キリストは今まで先祖がしたことのないことをします、彼は自分が得たものを人々に分け与えるの

です、それによって彼は自分が神の子であることを人々に信じさせようとするのです。

昔、ヒットラーが素晴らしい力を現わした時、人々は彼が反キリストではないかと考えていたことがあります、しかしヒットラーはユダヤの民のメシヤとなることは考えられません、なぜなら彼はユダヤの民から好意を受けていなかったからです、反キリストが来る時、彼は必ずユダヤの民からすべてのほかの人以上に好意をうけるようになるはずだからです、ヒットラーは百万というユダヤ人を殺しました。

苦難の時が来る最初の3年半は平安な時が来るはずですが、しかし、その3年半の過ぎた次の日にユダヤの民は神に捧げものをしようとします、そしてユダヤの民は宮に上って礼拝しようとしますが、その時に彼らは反キリストが宮を汚しているだけでなく自分自身を神としていることを見い出すのです、ユダヤの民の人々は反キリストを神としてではなく神の子として受け入れ、信じているので彼らの目はここで開き、彼らは反キリストにだまされていたことを悟ります。

ユダヤの民の人々の中のいくらかの人は神が前もって用意していた場所へ逃げて行きます。

（黙示録13：1，2）”また私は見た、海から一匹の獣が上ってきた、これには十本の角と七つの頭があった、その角には十の冠があり、その頭には神をけがす名があった、そして私の見た獣はひょうに似ており足は熊の足のようで口はししの口のものであった、竜はこの獣に自分の力と位と権威とを与えた。“ことばを変えて言えば、ヨハネはこのように言っています、「ひとりの人がこの世の中の民族から出てきて行政的な力とともに偉大な力を現わします、そしてすべての民族、世界がこの獣に注目します、彼らはこの獣を礼拝し始めます、ヨハネは引き続いて、この獣に力を与えた竜または悪魔を彼らは礼拝するようになる」と語っています。

この同じ13章の中で私たちはもう一つの獣が出てくるのを見ると書かれています、彼は小羊のような二本の角があり、竜のようにものを言ったと述べています、そして彼は人々の前で火を天から地に降らせるようなしるしを行なったと述べています。

神の真実の3位一体の存在には、父である神とひとり子イエス、キリストそして聖霊が存在します、しかし、にせの神の存在には悪魔がにせの神であり、反キリストが獣、そしてキリストに対して敵対している霊、反キリストの霊、それがにせの預言者です。

今の私たちの時代は聖霊が働いている時で聖霊はキリストのために働きます、聖霊は自分の栄光を求めず神である父とキリストのために働きます、そしてその時には反キリストの霊は反キリストと悪魔のために働きます、彼は人々を不思議なわざと奇跡をもって欺き、彼に引き寄せられる人々を使って獣の像を作るようにします。

（黙示録13：15，16）”それから、その獣の像に息を吹き込んで獣の像がものを言うことさえできるようにし、またその獣を拝まない者をみな殺させた、また小さい者にも大きい者にも富んでいる者にも貧しい者にも自由人にも奴隷にもすべての人々にその右手かその額（ひたい）に刻印を受けさせた。”

私はあなたにあなたが主に会う準備をするように忠告しましょう、主は次の日の出の前に御姿を現わされるかもしれないのです。（マタイの福音 25：13）”だから目を覚ましていなさい、あなた方はその日その時を知らないからです。”

人々の中には誰ひとりとして音を立てる人もいなく、死人のように静かにその言葉に聴き入っていました、牧師が聖書を閉じると、聖歌隊は「明日は皆に別れを告げる日」という題名の歌を歌い始め、牧師は主が2度目に来られる前にこの祈りは最後になるかもしれないと言った言葉とともに人々は罪の意識によって大声で泣いている人もいました、母コリントは彼女がいるこの場所が神の霊に包まれているのを感じていました、多くの人は祈りを始め、他の人々はこの時点では神を求めないことを決心したらしく、うしろの方で立っていました、彼らはそのための準備にはまだ時があると思っていたのですが、この日は違っていました。

最後に主を受け入れた人々のあかしが終わって、教会は終わりを告げ人々は去って行きました、人々は多くの方が今日、神に導かれたことを喜びながら、すぐにも主の来臨が起きるかもしれないことを語っていました。

母コリントは元気そうにその場所を立ち去り、遠くから見ている人には彼女がとても60歳を超えているようには見えませんでした、しかし、彼女の顔には長い人生のしわとその苦難がきざみ込まれていたのです。

この日、ヘスターベルウイソンという人が母コリントに話をするために近づいてきた、彼女はいつもはゆっくりと歩く人ですが、今日は急ぎ足で彼女に近づき、母コリントにどうして人は教会で長い時間を過ごすのが好きなのか！そして、なぜ彼らはそれを楽しんでいるか！彼女はそれが理解できず、なぜ他に刺激のあるところに行かないのかとたずねていました。

彼女にとってはそのような場所の方が興味があったからです、しかし、もちろん彼女はそのような所はクリスチャンの行くべき所ではないことは聞かされてきました、キリスト教にあまり関心のない彼女でも人々に不信者だとは思われなくなかったのです。

クルクルとカールしている黒髪を風にゆらしながら頬を赤くしている彼女を見ていた母コリントの目は光り輝いていました。

「誰かに追っかけられているの！」と彼女は冗談ながら言った、「全くこんなすばらしい天気の良い日にあなたのような若い人が急いで家に帰るなって、どうしたの？」

ヘスターベルは母コリントに歩調をそろえ、どうしたら自分のほんとうの気持ちを隠して彼女と話ができるかを考えていた、もし嘘をつくことができたなら、嘘もついたでしょう。

「私が早く家に帰りたくて急いでいるのではないことを知っているのに、はっきりと言いましょ、母コリント、もし私があなたと親しい仲でなかったら、あなたを追い越して歩いていたことでしょう、まあそれはいいとして、あなたにどうしても聞きたいことがあるのです、今日の朝のぞっとするような説教をどう思いますか？ 私は私の人生の中で1時間足らずであんなに鳥肌が立ったのは初めて、彼の言ったことは本当なの！主イエスが近いうちに来るなんて！そんなことを聞いて私はもう怖くなって、このまま彼の話を聞いているべきか！それとも逃げ出そうか！

本当に迷ってしまいました、たとえ牧師の言ったことが本当でなくても私の人生に恐怖を感じるようになりまして、もっと人々が楽しめる内容の話はなかったのかしら！どこからあんな恐ろしい話を手に入れたのかしら！」

母コリンズはヘスターベルが興奮して話している状態に対して非難することもなく静かに聞いていた、突然、ヘスターベルは話をやめて母コリンズを見ると彼女がとても落ち着いた表情でいるのでまごついた、「コリンズさん、あなたは彼の言ったことがすべて事実なんて思っていないでしょう！」

母コリンズは穏やかに、しかし説得力のある話し方で語り始めた、「あなたには悪いけど、その通りです、今朝私たちが聞いたことは初めてではなくて前にも何度も聞いているし、何年もの間、イエスが再び来ることを待ち望んでいます。」

「ということは、私たちが今、こうして話しをしている間にも、そのことが起きるかもしれないということですか！」とヘスターベルは問いかけた、「まさにそのとおりです、」ヘスターはそれを聞いて、また背中に寒気を感じ鳥肌が立った、「あなたはすべての人が、そのように一瞬のうちに変えられて、しかも墓の中から死人がよみがえることを信じているというのですか！」残念ながら、すべての人がそのことを信じているわけじゃないけど、それが起きた時、この世に残される人々のことを考えると心がとても痛みます。」

ヘスターベルは、あっけにとられた表情で、どうして彼女は母コリンズの後を追いかけて来たのだらうと考えていた、主の来臨のことを話している牧師のことを始めはそんな馬鹿げた話をして信じる人がいるなんて考えてもいなかったけど、

「もしあなたがそのような考えを信じたいならば、それでいいけど、誰も私にそんな嘘を信じさせることはできない、私は何も知らない昨日生まれたばかりの赤ちゃんじゃないんですから」ヘスターは強気に出てそんな話に動揺させられていないことを示そうとしたが、彼女の声の中に震えがあることを隠すことはできなかった。

「例えば、136キロもある、あのグレッタハルマンさんが空中に上げられるというのですか！そんなことがあり得るわけがないでしょう！」ヘスターベルは大きな笑い声でごまかそうとしたが、その笑い声の中にも何となく緊張感があつた、同時に母コリンズの落ち着いた表情を見ると彼女は何かのどにつまるものを感じた、このラブチャー（主の来臨）のことを耳にするたびにぞっとするものがあり、それを聞けば聞くほど体中に鳥肌がもっと立つのでした、ああいやだ！いやだ！と彼女は思った、なぜ、せつかくの日曜日をこんなことで無駄にしなくちゃならないのだらう！

母コリンズは光り輝いた目をして「ヘスターベル、考えても見て、もし皆がこの主の来臨を信じ待ち望んでいたら、この世界はまったく違っていたことでしょう！汚れた悪い映画もなく、酒や麻薬もなく、離婚もなく、刑務所もなく、殺人者もなく、自殺者もない学校でのいじめもなく悲しい出来事のないすばらしい世界に変えられることができたでしょう。」

その話を注意深く聞いていたヘスターが、「あなたにとってはいいかもしれないけど、私にとっては何もよくありません」とぶっきらぼうに言った、「そんなひどい話を聞いているとぞっとしてくる、誰が何と言おうと私はそんな話は絶対に信じません、そんな話を信じたら恐ろしくて何もできなくなってしまう、眠るのも恐

ろしいし、眠らなくても恐ろしい、どこに出かけるにも恐ろしいし、家にいるのも恐ろしい、本当にもうどうしていいか分からなくなる！私はそれでなくても神と言われるといつも恐れているのですから、」

母コリンズは話しを始め「かわいそうに、神を恐れる必要は何もないですよ、神は私たちが愛しておられて、事実、神は私たちが愛しているがために神のひとり子をこの世に送られ、私たちが生まれ変わりすべての罪を彼の流された血によって洗い流されるのです、あなたは何も怖がることはないですよ、もしあなたにその準備ができていれば、」

「もしあなたに世界中で一番愛している人から手紙が届いて、彼がもどってきてあなたをとて素晴らしい所、もう悲しみもなく心の痛みもなく、あなたの望んでいるものは与えられ、その町は道が金でつくられ、門は真珠でできていて、あなたのためにはマンションが用意されているんです、そしてそのほわりには川が流れていて、その水を飲むことができ永遠に生きるとしたら、あなたにとって死を恐れることは何もなくなくなります、すべての人があなたを愛し、あなたも皆を愛します、そしてもっと素晴らしいことはあなたのもっとも愛しているその人があなたとともにその街に住むのです、何も恐れることはありません、あなたのその愛している人がいつ来るかわからないからと言って心配したりすることはありません、あなたはその愛する人がいつ来てもいいように毎日心待ちにしてその日を待つのです。」

ヘスターは、ためらうことなく答えて言いました。「もし、そんな友達がいたら、その人が来ることを心から喜びます、もちろん恐れることなどしません、でも神のひとり子が来ることについては別です、私は彼を知りません。」彼女は素直に答えた、母コリンズは明るくそれに答えた。

「あなたはまだ私の主を知らないし、あなたの救い主として心に受け入れていないから、それが理由であなたは怖がっているですよ、もしあなたが彼を心に救い主として受け入れるなら、その恐れもなくなってしまいます、私が話している私の最も愛している人とはイエスキリストのことです、彼はこの世から去られ天にのぼられました、また再び帰って来て私たちが迎えにもう一度来ると言われました、あなたの愛する人が来られて、この苦しい人生から救い出し、すばらしい幸せでいっぱいな場所へ私たちが迎え入れて下さるのです。」

ちょうどヘスターベルが永遠に終わりのない世界をわかり始めたときに、白い塀に囲まれた部屋が六つもある母コリンズの家に着いた、窓にはすてきなカーテンがかかっていて庭もきれいに手入れがしてあるすてきな家です、このようなすばらしい庭と家を見たヘスターは心で“こんなに素晴らしい家に住んでる人がどこか他の所に行きたいと思うかしら！”とっていた。

「さあ私の家に来ました、もしよかったら、寄って行きませんか！」「ああでも私、家に帰らなくては私の母が心配するといけなから」ヘスターは彼女の母が彼女を待っていないことを知っていたながらそう言ったのです、ただ母コリンズから逃げ出したかったからです。

「そう言わないで、ちょっと寄って行かない！昨日焼いたばかりのクッキーがあるからミルクと一緒にどうぞ、ジムが私の孫娘スーを連れてくると思ったから焼いておいたの、彼女が来るといつも“クッキーちょうだい”と言って、、、彼女は本当

にいい子なんです、彼女も日曜学校に行けばいいのにと思っているんです。」

「さあヘスター、どうぞ、どうぞ、中に入って」

「いえ結構です、また次の機会におじゃまします」と言いながら、ヘスターは素早く歩き始めたがおいしそうなクッキーのことはちょっと残念に思った、彼女がそのクッキーを食べることができなかったのは、すべてあの牧師が神のひとり子がこの世に帰ってきて人々を連れ去ってしまうという鳥肌が立つような恐ろしい話をしたから――でも、もしそんなことが起きたらこの世はどうなってしまうのだろうか？とも考えていた、しかしこれ以上、人々が空中で消えてしまう話なんか、聞きたくないとも思いました、あのクッキーがどんなにおいしいクッキーでも彼女の家に立ち寄るなんて絶対にいや！ヘスターは走りながらでも空を見上げる時、それが起きるのではないかと心で恐れた、彼女はやっと自分の家に着いた。

「お母さん、家にいるの？」と大声で言った、しかし彼女はすでに彼女の母親が家にいることを知っていたのです、それは遊び仲間が来て彼女の母とともにトランプをする時間が近かったからです、ヘスターは救われてはいなかったけど、彼女には善悪の観念があったので、そのパーティーなどには参加しなかったのです、特に神をほめたたえる日曜日にそんなことは彼女にはできなかったのです、善悪の観念が強かったヘスターには悪をしてはいけないことを知っていると同時に母コリンズや日曜学校の先生のように人にやさしくすることも知っていたし、母コリンズや日曜学校の先生が信じていることにも少し同意していたのです。

ヘスターは台所にいた彼女の母に向かって突然に「ねえお母さん、主がすぐに来るってほんと？」

するとスーザンウイルソンは、この子は突然に何を言い出すのかという顔で「まったく誰がそんなナンセンスな話をあなたの頭の中に入れたの？」全く、今の時代は子供がどこで何を聞いてくるかわからないから、どこにも行かせられない恐ろしい世の中になったものねえ」と言った、

「でも、この話は私もお母さん、そしてお父さんも聞くべき話で内緒にしておく話しではないと牧師さんが言っていました、」ヘスターは牧師の言っていた事に対して怒りを感じていたのに、いつの間にか彼の言葉を語っていたのです。

「マスペロ牧師の言うには、主が来る日はすごく近く、聖書によると今すぐ来ても不思議ではないと言っていました、私たちが光である神のことばに従って歩んでいる神の子でなかったら取り残されてしまうそうです。」

「お母さん、聞いてる！取り残された人は言葉では言い表すことができないほどひどく恐ろしいことを経験することになるのよ、」ヘスターは知らないうちに牧師の言っていた話を述べ伝えていたのです、もしここに牧師が立っていたら喜んでヘスターの話を聞いていたでしょう。

ヘスターは彼女の母の顔に恐れを見て、彼女の想像を話しの中に加え始めた、今日の朝、この話しを牧師から聞かされ鳥肌がたつほど恐ろしい思いをしたヘスターは教会に行かないお母さんにも同じ恐怖感を母親にもと思いながら話しをつづけた。

ヘスターが息つきをするために話しをやめた瞬間に彼女の母親が「何をそんなばかげた話しをしているの、私はそんな事、全く信じませんよ、そんなことは何年も前から人々は言っているけど何も起こっていないし、そんな事はただのだましごと

を信じている人のまったくの作り話、ついこの前も、どこかで読んだことがあるけど、大きな教会の牧師宗派の名前は忘れちゃったけど、彼の言うには少人数ではあるが人々はいつもいつも主の来臨の事を語っていて主の来るしるしを探し、主を待ち望んでいるが、彼の宗派はもっと違うことを教え、人々は知的なことを学んでいて主の来臨なんて全くナンセンスでばかげているって言った、それに頭の良い人たちはそんなくだらない話は信用しませんとも言っていました。」

「そうだ！」とヘスターが急に言い出した、そして主の来臨を信じている牧師のことをノアの時代の人のようにたとえて再び語り始めた、「彼らはこの地上が水によって滅びることを信じないで、逃げる準備をしていなかったのだから8人以外の人はずべて死んでしまった。」と得意げに話した。

その時からスーザンウィルソンの顔色は変わり深く考え込んでいる様子を見せた、そして彼女は苦笑いをしながらヘスターに「もうこんなバカみたいな話はたくさん、これ以上話しをしたくありません」と言った、「ヘスターもうあっちに行ってちょうだい、もうこのような会話を2度とするような事がないように、そして2度とそんな教会に行くことがないように、分かったわね、あなたが今日の朝に教会で聞いたようなことはあなたにとって何の良いことがないばかりか、あなたの神経にもとても悪いのよ。」

ヘスターは言った、「お母さん、主の来臨のことをそんなふうにするべきじゃないわ、そんな言い方は神を汚しているのと同じなのよ、何千人という人々は主を待ち望んでいるのよ、その人たちが全員、だまされていると思う？」

ヘスターは彼女の母親を見つめた、スーザンウィルソンのこの話題に対する怒りは天に届くほど大きく、もう話しをすることもできなかったが、どうしてもヘスターや他の人の話を認める事もできなかった。

ヘスターは彼女の母に背を向け自分の部屋に行き、教会用のすてきな洋服からふだん着に着かえた。

スーザンウィルソンは昼食の支度をしながらヘスターの言った言葉に対して考えこんでいた、昔、彼女の母親が言っていたことを思い出していたのです、それは彼女にとってはずいぶん昔に思えたが、やはりスーザンの母親も神に感謝の気持ちをささげながら主の来臨のことを話していたことを思い出していたのです。

ここ3年ぐらいスーザンは主の来臨のことなど考えもしなかったし、この前、いつ教会に行ったのか覚えていないほど教会に行っていないし、まして神からのメッセージなんて何年も聞いていなかったのです、もし、主が来たらどうしよう？ 牧師は主の来臨は人が思っているよりも間近であると言っていた、スーザンにとって、いまだに主が来て人々を連れ去っていくことを信じ待ち望んでいる人々がいるということ自体に驚いていた、現在この近代化したこの世の中でそのようなことを信じているような人がいるわけがないと信じていたのです。

ヘスターが台所に戻ってきたと同時に彼女はポテトの皮をむいていたナイフを落としてしまった、「おどろかさないで！お願いだからもっと気をつけてちょうだい。」

ヘスターは「ごめんなさいお母さん」と誤った、「怖がらせるつもりはなかったんだけど、どうしたのお母さん、今日は気分があまり良くない日なの？」

「そうね、全然よくないと思う」と言いながら、ドアの方へ歩いて行った。

昼食がテーブルの上においてあった、ヘスターの父親は土曜日の夜には必ず出かけて酒を飲み、ばか騒ぎをし次の日には気分が悪く、話もしたくない状態であることがほとんどなのです、でもヘスターの母親はそんな夫に対してわざと話しかけるのでした。

ヘスターは彼女が坐っている椅子を後ろに押しながら「全くこの家族はどうなっちゃうのかしら！」とささやいた、「だれも何も話しをしたがらないんだから、ナンシーの家に行ったら、こんな風じゃなくて、だれかいつも会話をしているから、ナンシーの家に行こう」と言った。

スーザンは恐ろしい顔をしてヘスターの方を見て、「ヘスターベルウイilson、あなたには私たちに対して全然思いやりがない、」と怒鳴った。

ヘスターのお母さんがヘスターのことをヘスターベルウイilson！と呼ぶ時はとても彼女が怒っている時、彼女は主の来臨のことに対してはげしい不安を感じていて、それをヘスターに八つ当たりしていたのです、彼女にしてみたらヘスターが主の来臨の話を家に持ってきて何の問題もなかった彼女の脳にまるで爆弾でも落とすように彼女の心を揺り動かしたからです。

スーザンはヘスターに「あなたは今すぐ台所に行って皿を洗ってちょうだい、午後には私の友達が来るからアイスの中にもレモンを入れておいてちょうだい、ナンシーの家に行きたいんだったら、さあ働いて、働いて、、、私も女友達だけで楽しみたいからあなたとあなたのお父さんが家にいない方が都合がいいわ」とヘスターの父親の方に向って強く言った。

「でもね、お母さん」とヘスターは言い返した、「もし、この午後お母さんがトランプで遊んでいる時に主が来られたら、ねえどうするの？」

スーザンは何か困ったような顔をしながら「ヘスター、もうそんなナンセンスな話をこの家の中でするのはやめてちょうだい、主なんか絶対に来るわけがないんだから、もし来たとしても、それがどうだって言うの！」と答えた、「私にとってはまったく関心のないことです。」とも言い加えた、口ではどうでもいいことのように言っているスーザンの心に隠しきれない不安があった。

ヘスターは皿が割れてしまうのではないかと思うほど早く皿洗いをしていて、ヘスターにとっては何がこわれても関係がなかったのです、なぜなら、彼女は親がしたくないことはすべて子供にやらせるのは大人だと思っていたからです。

彼女は朝、教会で聖歌隊が歌っていた「私たちの主は来られる」という歌を歌い始めた、なぜか、その曲が彼女の耳から離れなかったのです。

ヘスターの母スーザンはトランプのパーティーのために自分の部屋で着替えをしていた、ヘスターの歌っている歌がスーザンの背中に何か冷たいものを感じさせた、「ヘスター、そんなところで歌ばかり歌っていないで、早くナンシーのところへ行きなさい、」と言った「台所はお母さんが片付けるから、そしたらこの家も少し静かになって安らぎを得られるかもしれないわ、」ヘスターは皿洗いに飽き飽きしていたので、それを聞くと喜んで台所から出ていき、髪の毛をなおすと同時にナンシーの家に向って出かけて行った、実はヘスターは一刻でも早く主の来臨のことをナンシーに伝えたかったのです。

そして、母コリンズが彼女の家の中に入るために玄関の前の階段を上っているとヘスターが風が吹くように走って行くのを見て「私もあの子のように元気に走れるようなエネルギーがあれば、、、」と言いながら、エネルギーがいっぱいあった自分の若い時を思い出していた、彼女のまわりには誰もいなく、ただ彼女の愛犬、ブチがまるで彼女の言っていることがわかるかのようにしっぽをふっていた、まして母コリンズに頭をなでられブチは大喜び、自分はこの世界で一番すばらしい犬だと思込んでいるようだった。

母コリンズの家はそんなに大きな家ではないが彼女ひとりが住んでいくには十分な大きさであった、リビングルームがあって、食事をする部屋、彼女がいつもくつろいでいる台所、寝室が二つにトイレとお風呂場が一つずつ、リビングルームにある椅子の上には彼女がとても大切にしている古い古い本が置いてあった、神の真理を探し求めていた彼女にとって神の真理は彼女のすべてになっており、素晴らしい日々を過ごしていた、神の真理を知れば知るほど神に引き寄せられていった、その通り、その本はどんな本よりもすばらしい神の恵みと希望を与えて下さった本、そして彼女が毎週、日曜日に教会へ持って行っている本。

彼女が昼食を作っているときにも今日の朝、教会で聞いた説教が何度も彼女の脳に思い出された、なんと素晴らしいメッセージ、真理！真理！真理！あのメッセージは真理以外に何ものでもない、彼女は神のみことばを何度も何度も読みながら、なぜ人々にはこのみことばが見えないのだろう、なぜ人々は主の来臨のために準備をしないのだろう？と思っていた。

ジムは彼女の一人息子、もちろん彼が小さい時から主の来臨のことを聞かせ、その時のための準備をしながら育ててきた、ジムが主の来臨のことを覚えていないはずがない、母コリンズは何度、ジムのために祈りをしたのか！それでもジムは主に心を開くことをしなかった、そればかりカルシールと結婚をしてから教会には5年も行っていかなかった、昔はジムもいい子だったので母コリンズは神のために働き生きる子になるのではと心のどこかで信じていた、もし、この子のお父さんが生きてくれたらジムもこんなふうにはならなかったかもしれない、でも神はいつも私たちのすべてをご存じだから、ただただ神を信じて生きなくてはと考えていた。

銀行強盗にピストルで撃たれて死んでしまったジムのお父さんジムフォード、母コリンズは夫の冷たくなった顔を見て泣きながら「ジム、天国でまた会いましょう」と言ったことを思い出していた、彼女の夫が真実の神の子であったことこそがどんなことよりも彼女の慰めであった、夫が死んでしまった後、彼女ははじめて誰も居ない自分の家に帰ってきたとき、家中がとても静かでその家の中で彼女は自分の夫を探しながら、すべてがただの悪夢であってほしいと心の中で願った、そして彼女はいつものように彼女の夫ジムが「ハニーどうしたの？悪い夢でも見たの？僕がここにいるから何の心配もいらないよ」と言ってくれる夫の声を期待していた。

彼女の夫ジムは彼女に大きな家と不自由なく暮らしていけるための収入を残して行った、夫が死んだ後、ふたりの生きがいだった一人息子のジミーに対しての責任、ジミーを育てることだけが楽しみだった彼女にも年月が経つうちに彼女の生きがいは主の来臨によってふたたび夫、ジムに会うことに変わっていった。

多くの男性が母コリンズに関心を持っていたが彼女には彼女の息子ジミーを幸せに育てること以外には関心がなかった、夫ジムが生きていたら、どんなに喜んだらうかと思いつつジミーの小学一年生の姿に見とれていた、それと同時に彼女と彼女の息子ジミーが1日でも早くジムに天国で会えるようにとも考えていた、彼女は息子ジミーを毎週、教会の日曜学校に連れて行き、夜には一緒に祈りをして聖書を毎晩読んであげていた、神の正しい道を教え、神に対して逆らってはいけないこと、神の裁きは正しいことを教え続けてきた。

息子のジミー、すなわちジムが高校を卒業し大学へ行くために家を出た時には、とてもさびしい心でいっぱいだったがジムが一人の人間として成功していくことに必要なことだと信じ、かわいい一人息子を手放したのだった、ジムが大学三年生の時に彼が求めていたタイプのルシールという女の子に出会った、母コリンズはいつもジムに誰かすてきな彼女が見つかるかと思っていましたが、ルシールを見た時には疑問と不安でいっぱいになった、なぜなら、ルシールはクリスチャンではなく、彼女が息子ジムに教えてきた人生の歩み方とは異なった人生を歩いているのが見えたからです、それに彼女は神を信じていない家庭に育っていました、そんなわけで母コリンズはジムにキリスト信者ではない人と結婚をしても、うまくいかなければと言いつつ聞かせたがジムはやはり若いので愛さえあればどんなことでも一緒に頑張っていけると母コリンズの言うことは聞こうとしなかった。

「ジミー、神様にお祈りをして、あなたの人生のために正しい導きを祈ってみたら、神様は絶対にあなたにふさわしいすてきなキリスト信者の女の子をどこかに用意されていらっしゃるはずとお母さんは思うんだけど！」とジミーに語った。

「もう僕のことなら大丈夫、お母さんの心配、全く無必要、だってその時が来れば主のために生きるようにするし、それに妻は夫に従うものだから、その時にはルシールも僕といっしょに主のために生きるようになるし、そうなったらお母さんも僕がルシールと結婚したことをよかったと絶対に思うようになるよ」そんなことを言っているジミーに母コリンズは言葉がなく彼の明るい未来に笑顔でほほえみ返した。

ジミーとルシールは結婚をした、そしてその二人の幸せのために何が出来るか考え、何十年も住んだ彼女の家をジミーとルシールの結婚祝いのために二人に与えた、彼女ひとりにはあの家は大きすぎた理由もあり近くの小さな家に移ったのである。

しかしジミーが言っていたように主のために生きるどころか、ジミー自身が教会に来ることもなかったし、ジミーとルシールは華やかな生活に気を取られ、教会に行くことはあまり重要視されなくなっていった、しかし母コリンズにとっては教会へ行くことはもっとも重要なことであった。

ルシールはジミーのお母さんの行っている教会に2回ぐらい行ったがばかにするだけばかにしてもう二度とあんな教会に連れて行かないようにジミーに言い渡した、ルシールは神の力を信じていなかった、ジミーはルシールなしで日曜学校に行ったり、日曜の夜の集会のために教会に行ったこともあったがそれも長続きせず、すぐにやめてしまった。

母コリンズは彼女の孫娘が生まれたのちには孫娘スーのためにかわいらしい洋服を作り始めた、母コリンズにとって初孫であるスーが生まれると同時に彼女の人生は明るくなったがジミーとルシールが今だに主を見いだしていないということが彼

女にとって重荷となっていた。

孫娘スーが3歳になったというのに母コリンズが2度か3度日曜学校に連れて行った以外は日曜学校には行くことはなかった、小さなスーは日曜学校がとても大好きで特に塗り絵はとても楽しんでいて、母コリンズは彼女がはじめて小さなスーの手をつないで日曜学校へ行ったことを思い出していた。

母コリンズは目に涙をいっぱいためながら、「神様！どうか私の孫娘スーの両親の魂を救ってください、そしてあの小さなスーが日曜学校に毎週行くことができ、主であるあなたの事を学ぶことができますように、今、あなたの来臨を間近に感じます、ジムとルシールがあなたの来臨の日のために準備ができますように彼らをお導き下さい」と祈った。

母コリンズは夕食を終えて台所を片づけいつものように何一つ散らかっていないようにしてテレビのある部屋に行き彼女の一番気に入っている椅子に坐り窓から入ってくるそよ風で涼んでいた、湖からの風はとても快適だった、そして、ハチが忙しそうに蜂蜜を作っている音が聞こえ、忙しそうに働いている様子を見て、私たちもこのハチのように主のために十分働いているかしら！主の来臨のことは人々に話しているけど、、、と思っていた、そこで彼女は明日の朝早く、再びジミーとルシールのところへ行って主の来臨が近づいていることを話すことに決めた、ルシールは主の話聞くことをいやがるのはわかっていたが、とにかく主の来臨が近づいていることだけはもう一度知らせておきたかったのです。

彼女は主の御前に頭をさげ、主のみこころによって話ができますように祈った、彼女の祈りと主の霊によってひとりぼっちで住んでいる家もいつの間にか暖かみのある家に変わっていた。

母コリンズが次の日の教会の後にジミーとルシールの家を訪ねるとルシールはまだ昼食の支度もしてなく、11時ごろにならないと起きてこない様子でした。

「こんにちは、皆、元気ですか！」と言いながら、彼らの家に入るとジムが出てきて「僕は元気だけど、ルシールは頭が痛いらしい」とあくびをしながら言った、「多分、眠り過ぎだと思う」母コリンズが来るのを見たスーは手をたたきながら母コリンズ（おばあちゃん）を迎えた、それを見た母コリンズは笑顔で彼女を抱っこしながら「今日の教会での説教は本当に素晴らしいメッセージであなたたちにも聞いてほしかったわ」と母コリンズはジムとルシールに向かって言った。

それに対してルシールは変な顔をしながら、「そんな聞こえのいい話なんか本を読めば書いてあるし、その分眠っていた方がよほどいい」と言った。

ジムはルシールに対してそんなこと言うなよとばかりの顔で彼女を見つめた、母コリンズは何事もなかったように彼女の話をつづけ「それはもうとてもすばらしく、まるで主が今にでも姿を現わしてくださるような状態だったの」母コリンズは主の話ルシールに邪魔をされながらも気にせず話しつづけた、それによってルシールの機嫌が悪くなり、母コリンズが話しをすませたとき、彼女は大笑いで彼女の話をおぼかにした。

ジムが「そんな大笑いしたらバカみたいだからやめなさい」とルシールに言うと彼女はもっと大きな声で笑った。

ジムはルシールの体を大きくゆすりながら彼女の笑いを止めた。

ルシールは母コリンズの顔を憎むように見つめながら「そんな想像もつかないような話をして私を怖がらせようと思っても無駄、私には全く興味がありません、あなたが行っているような狂った教会には行きません、絶対に行きません、そうです、あなたの生きている限り、私はそんな教会には行きたくありません、あなたはあの牧師にだまされているのよ、私の夫のお母さんだからもうちょっと頭がいいと思っていたけど、私が間違っていたみたいね」

ジムはルシールに向かって「君は僕の母親に対して何と失礼なことを言っているんだ、この家で僕の母親に対しての侮辱は絶対にゆるさない」と怒鳴って言った。

そこで母コリンズは優しい声でジムに「もういいから、彼女に怒鳴るのはやめて、彼女は私たちのように神の真理に触れたことがないから聖書の中に書いてあるみことばがどれだけ私たちにとって大切なものか知らないのよ、これだけ彼女も彼女の思いを吐き出したのだから、これでちょっとは気分も良くなるかもしれないわよ」と言うとルシールが「その通り」またけんか腰に話し始めた。

「何ですって私はあなたたちみたいな育ち方はしていないって、言っておきますけど私の両親はまともな人で学歴もあり、よっぽどあなたよりも頭もいいのよ、たとえこの世の人全員がいなくなって私一人が残され、新聞に大きく“主の来臨、ラブチャー”と書かれてあってもあなたの言っている事なんか信じないわ」

母コリンズはルシールの言っていることを聞きながら、神のことばを信じない両親に育てられるスーをかわいそうに思った、彼女はどうかしてこの人たちの不信仰を信仰へと変えようとしたが無理だった、ほかに何ができるか考えたがもうこのほかには何もなかった。

「神の話はもう2度としないでちょうだい」とルシールは命令するように言った、主の来臨の話なんか2度と私にしないでちょうだい、分かった！」あなたが信じているようなバカげた信仰を人に話すのはやめてちょうだい、私の義理の母がこんなばかげた信仰を信じているなんて私の友達に知られたら、みんな私のことを何と思うかと考えたら、ぞっとするわ、あなたには私の家に来るなどは言わないけど、この家に入る前にあなたのばかげた信仰の話は一切あなた自身の中にしまっておいて私には一切、神や聖書の話はしないでちょうだい、そうすれば私はあなたとの仲もうまくいくのよ。」

そんなことを聞いている母コリンズのほほには涙が流れていた、それから少し経ってから母コリンズはジムと孫娘のスーに見送られながら家を出た。

「ごめんねお母さん、ルシールがひどいことを言って、ルシールは本当に神の教会の話が嫌いなんだ」とジムが言うと母コリンズは「わかっているよジム」と言った、その声の弱さにジムは自分の母親の年を感じた。

そして母コリンズは「もう2度とルシールには神のことは言わないようにするわ、でも彼女のためのお祈りだけは毎日しているからね、でも彼女に影響されては駄目よ、本当に主が来られる日は近づいているのよ、多く人はルシールみたいに聖書に書いてあることを信じようとしなくて、主が来る証拠なんてどこにあるの？」と言っているけど、ある朝起きたら、あなたの愛する娘スーはいなくなっているし、私の家に来ても私もいなくなって、あなたはラブチャーを見逃してこの世に取り残されるのよ」とジムにささやいた、「お母さん、もういいからお母さんが僕のこと

を正しい導きによって育ててくれたのはよく知っているし、僕もこれからはまた教会に行くようにして神に心を捧げることを真剣に考えるから心配しないで」とジムは言った。

母コリンズはその言葉に対してジムに「分かった、ジムそうになったらあなたがルーシーを納得させることができるかもしれないわね」と言いながら、孫娘のルーシーを抱き上げお別れのキスをした。

母コリンズが去ったのちにジムとルシールは少しの間、口げんかをしたがジムが新聞を読み始めたことによって口げんかも終わり、ルシールはベッドルームでジムに聞えないように涙を流していた、母コリンズは家に帰りながら、まだ主の来臨のことを知らない多くの家族の人や友人のために主の民として働き主のためにすべての人に主の来臨を知ってもらわなければ、と考えていた。

第2章

ヘスターはナンシーの家に走りながら行く途中「彼が今日来るかもしれない、彼が今日来るかもしれない」と何度も何度もつぶやいていた、彼女がそのことを言えば言うほど本当に主の来臨が近づいているように聞こえた。

彼女がヘンリーソイヤーの家を通り過ぎたときには別人のようで、ヘンリーは何事がヘスターに起きたのだろうと思いながら彼女を見ていた。

ヘスターがナンシーの家に着いたとき彼女はお邪魔しますも言わないでドアを開けていきなり「主が来られる」と叫んだ。

「ヘスター ベル ウイルソン、あなたどうしたの、何を言っているの」とナンシーがヘスターに聞いているとヘスターは感情をむき出しにして主の来臨のことをナンシーに話し始めた。

皿を洗っていたナンシーは、そのことで思わず皿をわってしまった、ヘスターが話し終った時にはナンシーの顔に涙が流れていた、そして「ヘスターちょっと待ってよ、私はまだ主の来臨のための準備ができていないのよ。」と言った、ヘスターは彼女が主の来臨に関して知っていることをすべてナンシーに話し、今晚ヘスターといっしょに教会へ行くようにすすめた。

またヘスターの母スーザンはお昼を食べた後に出かけて行ったが、ヘスターの言ったことにいまだに恐怖感を感じていた、でも主の来臨の話は昔から聞いていていまだに何も起こっていないことを理由にその話を忘れようと自分に言い聞かせ努力したがうまくいかず、思わず泣き出してしまった、やっと彼女の感情がおさまり彼女自身も彼女の顔を洗いお化粧を直し始めた、ドアのベルが鳴り最初のゲストが現れた、彼女が招いた友人にはどんなことがあっても楽しい時を過ごしてもらいたいと思っていたのです。

皆がそろったので早速、トランプを始めたがどうしてもラブチャーの話のことで動揺している感情は隠すことができないスーザンだった、動揺しているスーザンを見て友達らはたばこをすすめたり、酒をすすめたがスーザンは何か心配そうな顔をして外を見ながらそれを断った。

「お酒もたばこもいらなんて、あなた何かの宗教でも始めたの！」と友人のジョイスが言った、それでもまだスーザンは深く考えこんでいた。

ヘスターがスーザンに話したラブチャーの話のためにつまらない集まりになってしまった、ヘスターが教会に行き聞いて来たラブチャーの話は昔、スーザンのお母さんがよく彼女に言っていた主の来臨のことを思い出させ、今までにない恐怖を感じていた、それと同時にヘスターが「ねえお母さん、主が来られるのよ、主の来臨が本当に起きるのよ！」と言った言葉がどうしても彼女の頭から離れず気が狂いそうだった。

ひとりの友人が「ねえ、あなた顔色が悪いけどお水でも飲んだら」とスーザンに言ってお水をわたそうとしたがスーザンは「お水なんかいらぬのよ、たばこもお酒も飲まないからって死人扱いしないでよ、私はどこも悪くありませんから、もうひとりにさせて」と言ったスーザンの声には震えがあった、「全く、ただ私はあなたのことを心配して親切にしてあげたのに、何その態度は！」「まあまあ、そんな

言い争いをやめてスーザンも気をしずめてカードのゲームで楽しく過ごしましょう」とミルドレッドがふたりをなだめた。

それでもまだスーザンは「もうカードのゲームをする気にはならないわ、私に何が起こったのか知りたいのなら、教えてあげるけど、それを言ったら皆で私のことを笑うにちがいないから、ねえウィルマ、あなたを怒らせるようなことをしてしまってごめんなさい、言い訳になるかもしれないけど、いま私の頭の中にある事が気になって他のことが何もまともに考えられないのよ、忘れようとしてもどうしても忘れられないの、」と言った、そんなスーザンの話を聞いたみんなはどんな話が出てくるのか！ 興味深くスーザンを取り囲んだ。

ミルドレッドがそのようなスーザンに向かって「心配しないですべてを私たちに話したらいいよ、私たちは皆、スーザンの友達なんだから安心して話して、」と言うとウィルマが「そうよ」とスーザンにやさしく語った。

「実は、うちのヘスターが教会から帰って来た時に」そこまでスーザンが話し始めるとウイリーメイが口をはさんで「ヘスターだったのね、今どきの子供たちはまったく問題児が多いんだから」と言った。

「そうじゃないの、ヘスターは何も悪いことはしていないのよ」とスーザンが言った、そして再び話をつづけた、「私が昼食の支度をしていると教会から帰って来たばかりのヘスターがいきなり、ねえ、主が来られるのを知ってる？ と言い出して、それからその言葉が頭から離れないのよ、もちろんヘスターにはそんなばかげた話なんか聞きたくないと言ったんだけど、彼女の頭の中には朝、教会で聞いてきた説教でいっぱいになっていて黙らせることができなかつたのよ、もちろん、そんなことを初めて聞いたヘスターはもう興奮しちゃってすべてを私に話したかったのね、その話をみんなにも聞いてもらいたいけど、全くその話を聞いていると今すぐにでもそのことが現実になりそうで、だから覚えている限りの話を教えてあげる。」とスーザンは言った。

スーザンは皆に主の来臨の話の短くまとめて話をするすると皆はそれぞれ顔を見合せながら、ある人はまったく珍しい話として受け入れ、ある人には夢物語として、またある人には昔、自分が子供のころに神のこぼしを信じ、神を信じなさいとしつけられた事を思い出していた、それと同時に不思議な不安感を感じていた。

そして、「昔、神がユダヤ人に神が彼らに与えた聖なる土地にユダヤ人を再び連れ戻すと言われたことが実現した。」とスーザンが言うるとすべての人が黙ってしまった、その静けさの中で柱時計のふりこの音が主が来られる、主が来られると言っているように聞こえ始めた。

「ねえ、私！ 気が狂ってしまったのかしら、どうしてもこの事が私の頭から離れないの、もうひとりでいられないほど怖いよ、」

そんなことを話している時に突然、スーザンの主人が部屋の中に入ってきて皆を驚かせた、そして彼は「何だか、死人が生き返ったのを見たような顔をしてみんなどうしたの？」と言った。

それに対してスーザンは「何でもない、ただあなたが急に戸を開けて入って来たからびっくりしただけ、あなたがこんなに早く帰って来るなんて知らなかったし、これからはもっと静かに入って来てね！」と言っている間にスーザンの主人フラン

クは彼の寝室に行ってしまった。

今度はウイルマがスーザンに話し始めた、「ねえ、スーザン考えていたんだけど、いまあなたが私たちにした話、全然信じていないの、そんなの本当の話じゃないからこそあなたはそんなにおびえているのよ、私も怖いテレビを見るたびに気が重くなって恐怖感を感じるの、それと同じなのよ、」とスーザンを元気づけようとした、それからパーティーが終わり、皆が皆、気分を明るくしようとしたが誰もが重い気分だった。

最後のひとが帰ったのち、スーザンはフランクの部屋に行ったが彼は眠ってしまった、そこで彼女は机の奥の方に入れてあった聖書を取り出し、昔、彼女の母親が読んでいた主の来臨が書いてある箇所を読み始めた、神が彼女のために動いていたために彼女が聖書を読めば読むほど気が重くなった、黙示録を読みはじめたころには恐怖でいっぱいだった、主の来臨の話が本当に起こりキリストの花嫁が取り去られる、そんなことを思うと本当に恐れた。

「これは夢物語なんかじゃないわ」と大声でスーザンは言った、「ウイルマが何と言ってもいい、これはたしかに神自身のことばなのよ。」

聖書の黙示録をめくりながら、私も主のために生きるべきと考えていたスーザンは自分の母親が自分にキリストのことを知らないということに対して恐れを感じさせたようにヘスターにもキリストを知らないで生きる恐ろしさを知らせるべきだったと後悔した、そこで近いうちに教会に行き始めようと心に決めた。

6時30分になってヘスターが家に帰ってきた、彼女の顔はいまだに光り輝いていた、すべては朝、彼女が行ったフェアビュー教会で聞いてきたみことばがいまだに彼女の中で生きていたからであった、でも多くの人たちはこの教会を古臭い説教ばかりで、いやがっていた、そればかりか 聖なる血、イエスの血だけが人を救うことができると言っていることで人気がなかった、そのほかにも血のことばかり言っているとバカにする牧師もいた。

昔はみことばと聖なる血を教えていた教会がたくさんあったが、今ではほとんどなくなってしまった、彼らはこの世の道徳に力を入れ神のみことばから徐々に離れてしまった。

フェアビュー教会は多くの人々から責められていたが神からは多くの恵みをいただいていた、神のことばに従って聖い生き方をしている人々に対して気ちがい扱いしている人たちもいた、しかし、神のために生きることをしないで神のために働くことをしない人々にはおそらく、神のことばに従って生きる美しさはわからなかったのでしょう。

ヘスターはフェアビュー教会の神のことばに従って語られている説教をとても気に入って、誰であれこの教会のことを悪く言う人がいたらすぐに言い返すほどだったが彼女はまだフェアビュー教会のメンバーではなかった、でもいつかは会員になりたいと思っていた。

「お母さん、今晚私と一緒に教会に牧師さんの説教を聞きに行かない！」とヘスターがスーザンに聞くとスーザンは「ああ！そうね、行くわよ」と答えた。

でもスーザンの心の中で何かに対して暗い影を見せ、スーザンに“いいえ、あなたは教会には今晚行きません、またいつか行けばいいでしょう”と頭の中に話

しかけていた、スーザンには軽い頭痛があり、それを理由に行かないと言うこともできたのである。

スーザンはあわてて「やっぱり行くのやめよう！」と答えた、「だけどあなたが教会から帰って来た時に教会で起こった事すべてを私に話して」とも言った、するとヘスターは「だけど昼食のときに教会の話は2度としないでちょうだいとお母さん、言ったじゃないの」と言ったがスーザンは「気が変わったのよ、私だって気が変わることもあるのよ」と言った。

ヘスターは教会へ行く支度ができ。ナンシーは本当に教会へ私と一緒に行くのだろうか心配しているとナンシーが戸をあけて家の中に入ってくる音が聞えた。

「ヘスター行きましょう！ もう準備できた！」「はい、行きましょう、早く行かないと座れなくなっちゃうからね」スーザンはヘスターとナンシーが教会へと向かっている姿を見て自分も教会へ行けばよかったという気持ちが心を走った。

ヘスターとナンシーが教会へ着いたときには教会はもう人でいっぱいになっていた、ナンシーの行っている教会は日曜日の朝のサービスだけで夕方のサービスは牧師が日曜日の夕方は家族と一緒に過ごすことが当然と信じているために夕方のサービスがないので多くの人々がヘスターの教会の夕方のサービスに集まっているのを見て驚いていた。

「ねえ、いつもこんなにこんでいるの！」「そんな事よりも早く席を探さないと座るところがなくなっちゃうわ、立って聞いている人もたくさんいるんだから」

ナンシーはここに集まっている人々を見ながら自分の行っている教会もこんなだったらいいのにと思っていた、それに人々がとても優しく親しみを持っていることに対しても気に入っていた、空いている席は一つもなく日曜学校から椅子が運ばれてきた。

聖歌隊の歌が始まると自分の行っている教会にはない心に響くすばらしい歌声をナンシーは感じていた、その歌声はまるで天国からの歌声のように聞えてきて歌をうたっている人たちの顔もとても聖く見えた、すべては神の栄光からのものであるが本当の神の栄光を知らないナンシーにとってはすべてが聖く思え、聖歌隊が歌った「まるで天国のようだ」という曲の意味も初めて心で感じ取ることができた気がした。

歌が終わるとレオマスペロ牧師の説教が始まり、タイトルは“主の来臨の後に来る苦難”その題名を聞いた時からヘスターとナンシーは椅子に釘づけになったようにその説教に聞き入っていた、すべての話は聖書の黙示録からの話でラブチャーに取り残された人々がどのような苦難に会うかという話であった、ナンシーの行っている教会の牧師からは今までで聞いたことのないことばかりで黙示録の中に書いてある話ばかりか、ラブチャーのことなんか聞いた事がなかった。

そのうちに私の行っている教会の牧師はほんとうに救われているのだろうか！ほんとうに生まれ変わりの経験を持っているのだろうかとナンシーは思い始めた、ヘスターの言う通り、教会の牧師や会員と友達になるために教会に行っても人の魂を救うこともできないし、生まれ変わりの経験も受けることはできない、とにかく今回のマスペロ牧師の説教も、もし彼が聖書の中から説明しなかったらナンシーにとってはただのおとぎ話になっていたでしょう。

説教が終わるころには多くの人が泣きながら祭壇に向かって行った、牧師の説教によって恐怖を感じたのです、ナンシーは自分にはまだ主の来臨に対して準備ができていないことを感じ取り動揺するばかりだった。

そんな動揺しているナンシーの心に“主の助けを求めながら祭壇に行きなさい”という小さな声が聞えた、ナンシーは思わずヘスターに目を向けるとヘスターは銅像のように固く立っていた。

「ねえ、祭壇に行こうよ」と小声でヘスターに言った。

それでもまだヘスターは何かとても恐ろしいものを見たように立ったまま動こうともしなかった、ナンシーの言ったことははっきりと聞いていたが恐ろしさよりも自分の人生を変えることに準備ができず今度の機会にと考えていたのです。

ヘスターのことを待ち疲れたナンシーはすべての自分の考えや気分を断ち切って両手をまっすぐ伸ばして彼女の心をすべて神にゆだねるために祭壇へと走って行った。

ナンシーを教会へ誘ったヘスターはナンシーのあとを追って祭壇へと思ったが彼女にはどうしても今日じゃなくて次の時という考えが頭から離れず祭壇に行けなかった。

それとは反対に祭壇に向かったナンシーは涙が止まることなく流れ神にすべての罪の悔い改めをしていた、罪から自由になった彼女は喜びと幸せで満たされ魂を救ってくださった神を心からほめたたえ生まれてから今までに一度も経験したことのない魂の喜びを感じていた。

ヘスターとナンシーは一緒に教会を出て家に向かったがふたりは無言で歩いていた、ヘスターは神に心を開くことができず、神に心を開き神を受け入れればよかったと後悔していた、ところがナンシーの方は、もう雲の上を歩いているように魂の喜び、そして主の聖さと幸せに満ちあふれていてだれも彼女に話しかけなくても全然気にしなかった、今までに経験したことのないこの喜びと聖さを保つために主を求めている彼女は誰とも話しをする気分ではなかった。

ヘスターの家でふたりは別れた、一人は天国に行く気分、そしてもう一人は何か取り残されたような気分だった。

ヘスターは家の中からナンシーがまるでスケートをしているように軽やかに歩いて行くのを見ていた、明日には何事が起ろうとしているのか！このふたりにはまったく予想もつかなかった、またヘスターが死ぬ前に今日の出来事が彼女の頭の中に何千回も思い出されることも、その時は知る余地もなかった。

ヘスターが家の中に入っていくとヘスターの頭の中にはメリーコンウェイの顔が彼女の気持ちをととても重くした、メリーはヘスターが教会を知るずっと前に教会のメンバーとして彼女の両親とともに教会に行っていた人である、メリーの両親は神の民として聖く生きていた人でヘスターも彼女の両親が自分の両親であったら自分もきっと主のために人生を送っていただろうと思いを巡らしていた。

ただメリーもこの日ヘスターと同じように後ろの席に座っていて祭壇には行かず、また次の日があると思っていた人であった。

ヘスターはその夜、床についた時、なかなか眠りにつくことができなかった、そして、頭の中で何度も主の来られる前に自分の魂を救わなくてはならないと考えて

いた、そうしているうちに彼女は眠ってしまった、その安らかな眠りもこの世で最後のものとなったのである。

第3章

ルシールは夜になると具合が悪くなり、ベイブーは泣きやまなかった、ジムも横にはなっていたが眠ることができず、痛みで苦しんでいるルシールに対して看病しながらベイブーの様子も見ていた。

長い長い夜だったがその夜も終わり、朝の6時になっていた、ベイブーもやっと泣きやみジムもルシールの看病が大変で赤ちゃんの様子を見る暇はなかったが鳴き声が聞こえなくなったのでそのままにしていた。

ルシールの痛みが激しくなった、ルシールは病気になるたびにジムの母親に助けを求めたがるが日曜日の午後にルシールがジムの母親（母コリンズ）にあんなひどい言い方をしたので夜ではなく朝になるまで待とうとした。

「ジム、今、何時！」

「もう少しで 7時」

「ねえ、お願いだからお母さんをお母さんと呼んで来て、痛くて痛くてもうがまんできない」と小声でルシールが言った。

「わかった、わかった今すぐ行くから」と言いながら帽子をかぶった。

「早く、早くもう我慢できない、お母さんだったら私を助けてくれるかもしれないから」

ルシールにそんなことを言われたジムはあわててベイブーの様子も見ないで外へ出ていった、もうとにかく1分でも早くお母さんをお母さんと呼んで来なくてはと思っているジムには新聞を売っている子が言っている言葉にも耳を貸そうともしないで母親の家へと向かった。

母親の家に着くとその家からただよってくる素晴らしい平安の空気に包まれていたジム、そんな母親に感謝だった。

でも家の中には母親の姿は見えず「お母さん、お母さん」とまるで小さい子供が母親を探るように呼び始めた、でも何の音も聞えなかった、ジムは家じゅう「お母さんどこにいるの！」と言いながら歩き回った。

台所にもいないし庭にもいない、そこでジムはもしかしたら、病気で寝ているのかも知れないと思い母親のベッドルームに行ってみたがそこにも母親の姿は見えなかった。

そこでお母さんが昨日、「もし私の家に来て私が見つからなかったら」と言ったことを思い出しながら神様お願いです、そんなことはない、絶対にそんなこと、違う！違う！と言いながら気持ちを落ち着かせようとした、「これはただの睡眠不足による神経衰弱だ」と心に言い聞かせ、まだ主の来臨が起こったということに対して信じようとしなかった、そんなことよりもこんなことばかり考えていたら気が狂ってしまうかもしれないと考えている時、ジムは母親のベッドの横に彼女の洋服とメガネがまだ床の上にあるのを見て、まるで死を経験したように体の中からすべての力が抜けてしまった。

「違うんだ！違うんだ！僕は絶対に信じない、僕のお母さんが僕を残していなくなるはずがない、神様お願いです、まだ主の来臨が起きていなかったら、あなたにすべての罪を悔い改め、あなたのために生きることを誓います、」ジムは泣きながら神に土下座をして何度も祈った、「もし主の来臨がまだだったら次のサービスに

は絶対に教会に行き、僕の人生すべてをあなたのためにささげます。」

その時、何かはジムを母のリビングルームに引き寄せた、そこには母の聖書がテーブルの上に置いてあった、そして開いてあった聖書の箇所には線が引いてあった、(マタイの福音書24章の44節) “だから、あなたがたも用心していなさい、なぜなら、人の子は思いがけない時に来るのですから。”

その箇所を読んだジムの額には冷汗がにじみ出ていた、ジムは泣きながら「主の来臨は現実起きてしまった、主は本当に来られた、神様！神様！ 私はラブチャーに取り残されてしまった、私のお母さんは主とともに天国へ行ってしまった。」と叫びながら床に泣きくずれた、ジムは時間を忘れるほど泣き崩れて祈っていた。

ジムの母の犬が外でほえているのでジムはその犬を抱きかかえて家の中に連れてきて犬にほほずりをしながら、「お母さんがいなくなったんだよ、お母さんはもういないんだ。」と話しかけた。

犬の(ブッチ)はまるでジムの言っていることが分かるかのように自分の冷たい鼻をジムの顔にこすりつけた、するとジムは突然に何かを思い出したように彼の家の方へと走り出した。

その途中ジムは神に向かって「神様お願いです、僕の娘スーだけは連れて行かないでください、彼女は僕の娘、彼女を僕から取らないで下さい。」と祈りながら神に話しをしていた。

ジムは走ってもなかなか家にたどりつくことができず、すべてのことがまるで夢のようだった、悪夢の中で走っても走っても速く走れないように、今思えば朝の6時からスーの鳴き声を聞いていないのに気がついたジムであった。

家に着いたとたん、病気であるルシールの様子も見ることがせず、まず最初に子供部屋の戸を開けてみると子供のベッドの中には娘スーの姿は見えなかった、彼は無言でその子供のベットを見つめていた、口を動かそうとしても動かず声が出ず、子供のベッドのそばまで行く力もなくしてしまったほど途方に暮れていた、そんな時ルシールの叫び声が聞こえたが、今のジムにはそんな叫び声など全く聞こえなかった、お母さんどころか自分の大切な娘スーまで失ってしまったジムは、自分のすべてを与えるからすべてのことが夢であってほしい、そしてこの悪夢から目をさまさせてほしいと願った、主の来臨は本当に起きてしまった！

神様、なぜ、なぜ僕は母の言う事を聞かなかったんだろう、なぜ、あなたに会う準備をしなかったんだろう、なんとバカだったんだろう、僕はバカだ！バカだ！

そんな時にもルシールはジムを呼びつづけた、ジムがあまりあわただしく家の中に入って来たのでルシールは何事が起こったのかと疑問に思ったからである。

どんな痛みがあっても娘スーのことを考える度に元気を取り戻したルシールは激しい痛みを我慢して一步一步子供部屋へとスーの顔を見ようとして彼女の持っているすべての力を使って歩いて行き、戸を開けてみるとそこにはジムが立ちつくしていた。

「ジム、何しているの！」と体中の力を使って怒鳴るように言った、ジムがまるで悪霊でも見ているかのように青白い顔で振り向くとルシールはどうしたの！何があったの！と思いながら「どうかしたの、ジム！」と怒りをぶつけるような感じで言った。

「いなくなっちゃったんだ、いなくなっちゃったんだよ」と言ったとたんにもまた涙がジムの目から流れ出た、病気のルシールにはもう少し時間をおいて知らせようとしていたが、彼女が知ってしまった以上、彼にはもう言葉が出なくなり、ただただ泣きくずれていた。

「だれがいなくなったの！ねえジム、教えてよ！どうでもいいから少し落ち着いてちょうだい、こんなに興奮しているあなたなんか、今まで見たことがないわ、」

「僕たちの娘スーがいなくなっちゃったんだ、僕たちのかわいいかわいい娘スーがいなくなっちゃったんだ、私が言っていることがわかるか！」とルシールに説明をし始めた。

気分が悪いため、いすに座っていたルシールもそのショックのために立ち上がった、ルシールは泣きながら「いなくなっちゃった？どういう意味なの、ジム、どこに行ってしまったの！警察に電話してよ、早く警察に電話して私達の娘スーが何者かにさらわれたって伝えてちょうだい、だからひとりで寝かしておくのは危ないとあんなに言ったのに、あなたがひとりで寝かす方が子供のためにいいと言って私の言う事を聞かないから、こんなことになっちゃったのよ。」

ジムはルシールに一言も言わずに黙って立っていた。

「ねえ、早く警察に電話して！」と泣きながら言っているルシール、ジムはそれに対して動こうともしなかった、頭の中も心も体全体が気を失うほど動揺をしていたジムが全力で気を落ち着かせ、ルシールに話し始めた。

「主の2度目の来臨が、つまりラブチャーが起きたんだよ」不安でいっぱいなルシールは泣きながら、「あなた何を言っているの！」と言い返した。

「まだ分からないのか！主が来られたんだ、僕のお母さんもいなくなっちゃったし、僕たちのかわいい娘スーもいなくなっちゃったんだ、そして何千人という人がいなくなっちゃったんだ、」と言った、ジムは声が出なくなるほど動揺してしまっていた、そして「きみがぼくのお母さんにラブチャーのことなんか2度と言わないでちょうだいと言ったのを覚えているか！全くその通りになったよ、お母さんは2度ときみに話しをすることはしないよ、」と泣き声でルシールに言った。

「僕のお母さんがいなくなっとうれしいか！お母さんもスーも主とともに天にのぼったんだ、僕が言っていることがわかるかい！君はラブチャーなんか絶対に信じないと言っていたけど実際に起きてしまったんだ、僕の愛するお母さんと娘スーはいなくなっちゃったんだ、」

それを聞いたルシールは目の前が真っ暗になりジムの足の前に倒れてしまった、そんなルシールを助けることもできないほどジムは動揺して、そこに立ったままだった。

そんな時にジムの家のうしろに住んでる人が「だれか助けて、私の子供たちがいなくなったの、私の子供たちに何か起こったに違いない、誰かお願いだから助けて！」と叫んでいた。

でもそんな声を聞いてもジムには何もする気力もなく動くこともできなかった、「僕だってラブチャーに行くことができたんだ、そのチャンスはいくらでもあったんだ」と大声で叫んだ、「神にすべての罪を悔い改めて神のために生きるチャンスはいくらでもあったのに、いつもいつもこの次でいいと自分に言い聞かせ、神の御

前に行かなかった僕はもっと時間があると思っていたんだ。」

ジムの足元にいるルシールを見つめながら自分の母親から何度も、この世に惑わされていないで神のところへ帰って来るように言われていた自分をふり返って見ていた、それもつい昨日言われたばかりだったのに、彼はいつもその話に耳を貸そうともしないで、また今度と言っていた、でももうその今度は絶対に来なくなってしまっていた、彼にとってラブチャーはもっともっと先の話でジムの世代には起こらないと思っていた、ところが起きてしまいジムとルシールは取り残されてしまったのである。

ルシールがうなり始めたのでジムは洗面所に行って水とぬれたタオルを持ってルシールを抱きかかえ、彼女をぬれたタオルで冷やしてあげ、水も少し飲ませた、そして彼女を抱いてベットまで運びベットに寝かせた。

するとルシールがまた、「スーに会いたい、ねえお願い私のスーを探してきて」と言って泣き出した。

「スーとお母さんは主とともに天に上ったんだ。」と言っているジムの声に全く聞く耳を持たないルシールだった。

ジムはルシールのために病院に電話をしたがだれも出ず、仕方がないので医者の方に電話を試みたが、それでもだれも電話には出なかった。

神経衰弱になっているルーシーをこのままにしておけないのでジムは薬局で薬を買うことにした、自分の母親と娘スーを失ってしまったジムにはもう生きる理由がなくなり、死ぬことすら考えるようになっていた。

台所で流れていたラジオの音楽が急に鋭い響きのある人の声に変わった、” 緊急ニュースを申し上げます、今日の朝6時ごろ何千人という人がこの地上からいなくなってしまうました、今もすでに新しい知らせがあちらこちらから入っています。”

ジムは黙ってそのラジオからのニュースを聞いていた、“ある男の人が言うには朝5時には全く変化はなく5時30分にはいつものように彼の妻が神に祈りをささげていて6時には彼の朝食を作り始め、妻が彼にコーヒーをついでいるときに何かそよ風のようなものが彼に触れたと同時に彼の妻がいなくなってしまうと言う、彼は彼の眼を疑った、1分前にいた人が次の瞬間になくなってしまったと語り、彼は自分の目をこすりもう一度見たがやはり彼の妻はいなくなっていた、そんなに早く外に行くこともできないし、まるでマジックのようだといろいろ考えながら妻の名を呼び家じゅう探し回った、そしてこれは妻のしている悪い冗談とも思ったと語っていました。

引き続いて彼はこのようにも言っていました、” まばたきした瞬間に起きた出来事、神の子、主イエスキリストが来て彼の花嫁である神の子どもたちを連れて行ってしまった。”

そのほかにもラジオでは同じような話をしていたがジムはともあれ薬局へと急いだ、薬局へ行く途中ジムは自分の家の玄関にある新聞を開いてみると” 何千という人が不思議な形で消えた。“と大きく書いてあった、それを読んだジムは心の中で叫びたくなるような何かを感じた、ジムには不思議に思えるほど何もなかったように鳥がさえずり太陽が輝いていたがジムの心の中には何の喜びも感じる事ができ

なかった、それどころかジムの頭の中、そして心の中は全くの空っぽになってしまっていた、なぜ鳥が歌っているのか、また太陽が輝いているのかも考えることはできずにいた、そのような時に、向かいの家に住んでいるアルマウィルコックスがすごい状態で家から出てきてジムに自分の孫である双子の男の子がいなくなってしまうことを訴えた。

「私の家に泊りに来ていて、朝の5時ごろ見たら何事もなくすやすやと眠っていたのに今は二人ともいなくなってしまったの、家じゅう捜したのに何の足跡もないの、ドアにはカギがかかっていたし、、、でも不思議なことにあの子たちのパジャマは部屋に残っていたんです、警察に電話しても話し中だし、ねえお願いジムさん、私を助けてください。」

しかし、ジムはその話を聞いているのかいないのか！ただそこにぼう然と立ったままだった、次の瞬間、彼はアルマがなぜ、ラブチャーに行かなかったのか不思議に思えた。

実は彼女もジムのお母さんが行っていた教会に行っていたのですがアルマはジムのお母さんと違って神にすべての心を捧げず中途半端なクリスチャンだったのでラブチャーに行くことができなかったのである。

「おばさん、本当に何が起こったのか知らないの！ 主が来られたんだよ」

アルマはショックでそのことばにふるえた、「何を言っているの、そんなの嘘よ、私をからかわないで！」と言って泣き出した、「なぜ私はまだここにいるの？ 私はどうして主とともに行かなかったの？」そんなことを言っているアルマにジムはさっき自分が読んでいた新聞の一部を彼女にも見せた、”何千という人が不思議な形で消えた“

その時「神様、ラブチャーはほんとうだったんですね、」という言葉でジムは彼女の口から出たのを聞いた。

それから彼女は今まで彼女がしたことがないほど心を開いて神に祈り話し始めた、「神様、私はバカでした、私のすべての心をあなたに与えず、それでも良いという悪魔の声を信じ生きていた中途半端なクリスチャンでした、主の来臨は起きてしまった、そして私は取り残されてしまいました、ああ！私は何と愚かだったのだろう、私は本当に取り残されてしまいました。」

それから突然、彼女は気でも狂ったかのように”もしかするとすべての事は本当ではないのかもしれない！”と思い始め、神のために生きていた人たちを探し始めた、彼女にとっては真実の神の子たちがなくなったのを確かめるまでは現実に信じることはできなかったのである。

そこで彼女は近所に住んでいるリリーという神の信者の家に行きドアをたたいてリリーがドアを開けてくれるのを待っていたが家の中は静かでだれもドアを開けてくれなかった、リリーの家の中にある柱時計の音がまるで”あなたは取り残された、あなたは取り残された、”と言っているように外まで聞えて来た、リリーは確かにいなくなっていた。

アルマの目は涙がいっぱいで何も見ることはできないほどになっていた、彼女はおそろおそろリリーの家から離れ、自分の家に戻って行った。

するとジムがまだ同じ場所で動かずに立ったままでいた、彼女がジムの様子をよ

く見てみると昨日見たジムよりも急に老けこんで15年も年をとってしまったように見えた。

彼女はジムに近寄り小声で「今、リリーの家に行って来たんだけど、彼女は家にいなかったの、きっとどこかへ買い物に出かけたんだわ」

しかし、そう言っている彼女の眼には涙がいっぱいにじみ出ていた、またジムはそんな話はまるで聞いてもいないように同じ所で立ちすくんでいた。

アルマは次にゼルマプリックの家に行き ドアをノックしていた、知人を探しているアルマの姿、そして何が起こったのかも知らず、大声で騒いでいる人、このようなことを見て聴いているジムにはだんだんとラブチャーの現実性が徐々に現実のものとして感じられてきた、彼にとってすべてはラブチャーの話の中で聞いていたことばかり、一つ一つの魂が主の来臨を知り自分を取り残されたことを徐々に知っていくのだった。

ジムの顔は今だに無表情だったが何か冷たい風といっしょに氷のかたまりのようなものが彼の額にふれたのを感じていた、アルマと今は彼女とともにいるゼルマの顔は恐怖でいっぱいだった。

まだ寝ているがために何も知らない人々の家を通りすぎる時に、ジムはその人々が起きた時に知る悲惨な出来事を彼らがどのように受け入れるかを考えるともっと彼自身の心は重くなった。

そんなことを思っているジムは女の人にぶつかってしまった、ジムがその女の人目を見るとまるで地獄へ行って帰ってきたような魂の苦しみが見えた、

「すみません、私の夫と赤ん坊を見かけませんでしたか？」と言いながら泣き崩れた、「私が起きた時にはもうふたりともいなくなっていたんです、私の息子はとても良い子で勝手にいなくなったり絶対にしない子なんです、きっと何か起きたにちがいないんです。」

彼女がどれだけ苦しんでいるかを知っているジムは彼女に本当のこと、ラブチャーのことを教えてあげようとしたが口が開こうともせず声も出てこなかった、そこで彼は彼女に新聞を見せた、彼女は何度も何度もその新聞のヘッドラインを読み、その内容が彼女の頭に入った時には大声で叫び彼女の唇は震え気が狂ったように歩きだしていた。

ラブチャーが起きた後には動揺した人々で町じゅうが大騒ぎになると聞かされていたがこんなひどい状態になるとは想像もしていなかったし、ことばでは言い表せないほどであった。

ジムはアルマとゼルマが急ぎ足でジムのお母さんが行っていたフェアビュー教会の牧師ヒラリーの家のところまで来てドアが壊れるほどたたいているのを見た、ジムはヒラリー牧師が家にいたらラブチャーはまだ起きていないかもしれないと思いながらドアが開くのを待ち望んでいた、その待つ時間がとても長く感じられたこと、それはまるで一生待っているように感じられたが、ついにジムはあきらめてまた歩き出した、ヒラリー牧師は確かにいなくなっていたのである。

ジムはやっとのことで薬局にたどり着いた、店の中には薬剤師のビルしかいなかった。

ビルが元気な声で「おはようジム、今日の気分はいかがですか！」と言った、

「最悪だよ」とジムは答えた、ジムはこんな時にビルはなんでそんなことを聞いているんだろう！と思っていた。

ビルがジムの落ち込んだ顔を見て「おいおいジムコリンズさん、そんなに落ち込んだ顔をして一体何が起こったんだ、今にでも倒れてしまいそうな感じですよ」と言った。

「僕の母親と娘がいなくなってしまったんだ」とジムが言った、ビルが目を丸くして言った。

「えっ、何ですって、あなたのお母さんと娘さんがどうしたって！」

ジムはまたあの新聞のヘッドラインをビルに見せた、ビルはそれを読むとすごい勢いで動揺して持っていた薬の瓶を床に落としてしまった。

「まさか、あなたのお母さんと娘さんがこの新聞に書いてある何千人の中に入っているというんですか？」

「そうなんだ、そのとおりなんだ、でも今は僕の妻ルシールの病がひどく彼女のための睡眠薬を買いたいんだ、」

ビルは動揺しながらも睡眠薬をジムに渡し、ジムのお母さんのことを思い出していた。

そうです、ビルもジムのお母さんのことを知っていて特に彼女の一番好きな聖書の箇所を覚えていたのです。

それは（コリント人への第一の手紙15：51－55）”ここで、あなたがたに奥義を告げよう。私たちすべては、眠り続けるのではない。終わりのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変えられる。というのは、ラッパが響いて、死人は朽ちない者によみがえらせられ、私たちは変えられるのである。なぜなら、この朽ちるものは必ず朽ちないものを着、この死ぬものは必ず死なないものを着ることになるからである。この朽ちるものが朽ちないものを着、この死ぬものが死なないものを着るとき、聖書に書いてある言葉が成就するのである。「死は勝利にのまれてしまった。死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。死よ、おまえのとげは、どこにあるか」。

その時、ビルはもし自分がそのことを知っていたら、自分のお母さんの魂が新しい体とともに再び結びつき、墓からお母さんが起き上がり、主とともに天に上られるところを見ることができたのにも思った、と同時に彼はもし彼自身が準備ができていたら母のよみがえりとともに空中で会うことができたのにも思った。

ビルは泣きながら「神様、私は母の教えにも耳を傾けず、この世に感化され、ほかの人と同じよう主が来られることを信じませんでした。」と言いながら、店のこともかまわず外へ飛び出して行った。

“人々がなくなった”という言葉が今までに感じたことがないほど心に突き刺さった、ビルは一生懸命になって神に祈りをしようとしたがもう何年も神に対して祈りをしていないので彼はどのように祈りをしているのか、わからなかった！、その時、悪魔はビルがラブチャーに行けなかったことを理由に彼の隣りに立ってあざ笑っているようであった、ビルはいろいろと工夫をして祈りをしようとしたが、それでも彼は祈りをすることができずあきらめてしまった。

ノアの箱舟の時代に箱舟に入ることを断った人々は神のさばきにあったが今もま

たノアの時代と同じように神の救いを無視してラブチャーに取り残された人々には恐ろしい試練が待っているのです。

ビルが走って彼の母親が眠っている、お墓まで行ってみると彼のお母さんの墓は開いていて墓はからっぽになっていた、彼のお母さんは神の約束通りよみがえり、ビルはお母さんとの約束を果たせなかったのである。

ビルは町に帰る途中でいろいろな人とすれちがって、その中には知人も多くいたが声をかける気力もなかった、誰も何も言わずただ街をさまよい歩いていたのである、人々はまるで気が狂ったような状態になっていた、神に祈りをささげようとしている人もいれば、ぼそぼそと口の中で「神が本当に来るとは信じられなかった」とつぶやいている人もいたが今ではだれも主の来臨を否定することができなくなっていた、なぜなら、それが現実起きたからである、多くの人は愛する人々を失っていた、何かをするためにいなくなったにしては数が多すぎた特別な事件が起きたのです。

車を運転している人はクラクションを鳴らしたり、皆すごく急いでいるみたいだが、だれもどこにもたどりついていなかった、仕事の心配は！そのことはだれも考える余地がなかった、家族のために自分のためにみんな一生懸命働いてお金に困らない楽な生活をしようとして頑張ってきた事すべてが今日この出来事で壊されてしまい無駄になってしまった、それは自分の愛する人が突然になくなってしまったのに良い生活を考える余地がなくなってしまっていたからです、何もいらないから自分の愛する人を返してほしいと思う気持ちでいっぱいになってきた。

ビルは全く自分の店のことを忘れていたが今の彼にとってはラブチャーに取り残されたという事実しか頭になかった、ラブチャーに取り残された後にこんな状態でこのようになってしまうとはビルにも予想がつかなかった。

街角で女の人が警察官に自分の夫を探してくれないかと頼んでいた、それを見たビルは自分にはこのような愛する人がいないだけでもよかったと思った、仕事から疲れて家に帰った時には何度も自分にも愛する妻がいてくれたらと思ったが今ではもし自分の愛する人がなくなってしまったら、どんなに心を痛めるかと思うといなくてよかったなあと思った。

ビルは親しい友人を探し始めたが、どこもかしこも愛する人を失った人たちばかりで近寄って「あなたの愛する人はすぐに戻ってくるから安心していなさい」と慰めてあげたい気持ちでいっぱいだったビルだったが、真実を知っているからにはそれがもうできなかった、なぜなら、いなくなってしまった人々は主とともに天に上り永遠に戻ってこないからである。

第4章

自分の息子と嫁を主の正しい道へと導くことができなかつた母コリNZは心を痛めながらジムとルシールの家を出た、彼女の心はいつもよりももっと重く感じられた日曜日の午後だった。

「神様、私のどこが間違っているのでしょうか！ どうして私にはこのふたりを導く力がないのでしょうか！ どうか私に見せてください、どのようにしたらよいか、ルシールはあなたに対して苦い心を持っていますが彼女は何も知らないのです、あなたを知らないという彼女の罪をお赦しください、主イエスキリストというあなたのひとり子であり、私たちのすばらしいたったひとりの救い主を全く知らないので、あのような愚かな行動をしているのです、神様お願いです、彼女をあなたの正しい道へと導くことのできるみことばを私に下さい、そして私の息子ジムが敵（悪魔）に対してあなたの力を通して戦うことができますように彼を導いて助けてくださるようお祈りします。

母コリNZは自分が生きてきた人生を見直して、主を知り主の愛に満たされて生きている自分に対してすべて主に感謝をささげた。

そんな時、子供たちの声が聞こえて、子供たちは元気よく「母コリNZさん、こんにちには」とあいさつして通って行った。

そんな子供たちの声を聞きながらこの日曜日にもジムとルシールが神の御前に来てくれたらもっとすばらしい日になっていたのにと考えていた。

彼女の帰りを待ち望んでいた犬のブッチがしっぽを大きくふってうれしそうに彼女を見つめていた、そんなブッチを見た母コリNZ、その日は特別に頭をなでてかわいがっていた。

もう夕食の時間になっていたが彼女は食欲がなく朝の教会でのメッセージを思い出しながら聖書を読み始めた。

“「兄弟たちよ、眠っている人々については無知でいてもらいたくない。望みをもたない外の人々のようにあなたがたが悲しむことのないためである。私たちが信じているように、イエスが死んで復活されたからには、同様に神はイエスにあって眠っている人々をも、イエスと一緒に導き出して下さるであろう。すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っている私たちが、彼らとともに雲につつまれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主とともにいるであろう。だから、あなたがたは、これらの言葉をもって互いに慰め合いなさい。」（テサロニケ人への第一の手紙 4章の13, 14, 16-18）

主が神の子どもたちである人々のために来られるのを知っていることはなんと素晴らしいことなんだろうと思いつつ、主の来臨が間近になっていることを感じていた彼女でした。

“「しかし兄弟たちよ、あなた方は暗やみの中にいないのだから、その日が盗人のようにあなたを不意におそうことはないであろう、あなた方はみな光の子であり昼の子なのである。私たちが夜の者でもやみの者でもない。」”

（テサロニケ人への第一の手紙 5章の4, 5、）

その通りです、しっかりと目を覚まして 主の来臨を待ち望むように、それは彼女がいつも心掛けていること、しかし近い将来に主が来られ、もう主を待つこともなく主とともにいつもいることができるのではないかと感じていた。

彼女は聖書を閉じる前にルカの福音書 21章の36節を開いて読んだ。

“これらの起ころうとしているすべての事からのがれて人の子の前に立つことができるように絶えず目をさまして祈っていなさい”

このような主のみことばを心に留めながらジムとルシールが1日も早く主の御前に来て正しくふたりの魂が救われるように神に願った、そんな事をしているうちに夕方のサービスの時間が近いのに気がつき、急いで髪を整え教会のためのすてきなドレスに着替え出かけようとしていた彼女だったが、それが彼女にとって主が来られる前の最後のサービスになるとは知る余地もなかった。

教会の中に入ろうとした時に誰かが彼女を呼び寄せ話しをしようとしたが彼女は「ごめんなさい、ちょっと急いでいるので」と言いながら教会の中にある祈りの部屋に入って祈りはじめた、というのもこの教会の牧師が夕方のサービスの前には祈りの部屋に入りお祈りをするようにと勧められていたからである、祈りの部屋の中では中途半端に祈りをささげている人もいれば、心から主に祈り、主と話しをしている人もいた、彼女にとっては主の霊をいただいているが失われた魂のことも考えずに中途半端な気分で見られるのが不思議なくらいだった、そんな彼女はこれから始まるサービスが 聖霊に導かれるサービスでありますようにと祈っていた。

教会の始まる時が来て、聖歌隊がステージの上にあがり、これがラブチャーの起きる前の最後の歌だとは知らずに歌を歌う準備をしていた。

母コリントは今までになく主の来臨を間近に感じるようになっていた、教会の中は神をほめたたえている人たちでいっぱいになり朝のサービスの時に聞いた説教（神のみことば）に対して多くの人々が神の御前で神をほめたたえていた。

レオマスペロ牧師の説教の前に聖歌隊が歌った、“主は再び私たちのところにお見えになる”という歌の一言一言が天使によって歌われているように彼女の頭の中でエコーとして響いていた。

歌が終わると牧師は黙示録16章の15節を説明しはじめた、「見よ、私は盗人のようにくる裸のまま歩かないように、また裸の恥を見られないように目をさまして着物を身につけている者は幸いである。」そして彼はラブチャーはもういつ起きても不思議ではないほど近づいているので常に目を覚まして十字架から目を離さないで生きているようにと忠告した。

その日その同じ時に他の町の他の教会でモーヘッド牧師という人が全く異なった見方でラブチャーの説明をしていたが、この教会はフェアビュー教会とは少し違って、教会に来る人々も異なっていた、牧師の言葉の中には神のみことばはなく神の霊も彼の説教の中には漂っていなかった、日曜日の夕方には家族と共に過ごすのが当然のように考えていたこの教会のメンバーの人たちもなぜか今日の夕方のサービスには顔を出していた。

それは、レオマスペロ牧師が主の2度目の来臨(ラブチャー)について語ることを大きくこの町で宣伝していたからである、そのためモーヘッド師は教会のメンバー

からこのラブチャーについてどのように思っているか！ 質問を受けていたのです、彼モーヘッド師はこれまでラブチャーについて語ったこともなく、教会の人々もそのことについて聞かされたこともありませんでした、そのため彼らはいつもは家族と共に過ごしたり、映画やダンスをして楽しんでいた日曜の夜を返上してまでもこのラブチャーについて聞きたかったのです、彼らはフェアビュー教会でのラブチャーについての朝の説教がとても多くの人々に受け入れられたことについておどろかされていたからである。

この教会もフェアビュー教会のように聖歌隊の歌によって始まりますがその歌には心がこもっていない感じで聞いている人たちも早くこの歌が終わればいいのにと思いながら聞いている様子だった。

それというのも多くの人々はモーヘッド師がラブチャーについてどのように語るかを聞きたかったからである、人々の中にはただ興味があって来ている人もあれば、どこかで神の霊に問いかけられている人々もいた、この日のサービスはトーマス牧師という人からモーヘッド師が20年前にこの教会を受け継いで以来のとても緊張したものでした、この教会はもともとはトーマス牧師という人のものだったが彼が死んだ後にモーヘッド師が引き取ったのです、トーマス牧師はいい人だったのですが人を見る目に欠けていてモーヘッド師にこの教会を引き渡してしまいました、彼が引き取ったのちにはたくさんの人が彼の説教を嫌いフェアビュー教会に移って行ったが彼は狭い考え方をして愚かな教えをもとめる人々はどこの教会にでも行けばいいという態度であった、さて彼がラブチャーのことを話しはじめるとほとんどの人が彼の話している意味がわからず、気をあちらこちらに散らせていた。

最後に彼は「フェアビュー教会の牧師がラブチャーの事をどのように説明しているか知らないが、その教えはにせの教えであり、そんな主の2度目の来臨などあり得ない」と断言した、黙って真剣に聞いていた人々の中には安心を見せていたり、やっぱりそんな事はただの作り話だったと自分自身で納得している人がいたり、またモーヘッド師はやはり知恵のある人だと感心する人もいた、人々の中には心の中で、もしモーヘッド師が主の2度目の来臨はあり得ると言ったのであれば心を変えることのできる人もいた、彼らはそのチャンスを持っていたのです、しかしモーヘッド師はそのようなことは考えてもいませんでした。

このモーヘッド師は続いて語り、「私は今日、良識あるあなた方の前でこのように語れることを光栄に思っています、主の2度目の来臨はにせの教えです、私は神がこのように神の子供たちに正しく語れるチャンスをくださったことを感謝しています、神は彼の子供たちに必要のない心配は望んでいません、そのように聖書は教えていないのです、聖書はにせの預言者が来ると言っています、その教会は、私たちのいるこの場所から遠く離れてはいないのです。」

「それであなた方は聖書に書かれている主の来臨とは一体、何のことを語っているのですかと質問されるかも知れません、」

「多くの人はこのことを悟っていません、聖書のことばは霊の人のためのものであって、書かれていることをそのまま受け入れてはいけません、真実をあなたがたに伝えましょう、ほとんどの聖書のことばはユダヤ人のために書かれているものであって、私たち異邦人はそのことに関して心配する必要はないのです、正直に言っ

て私たち多くの牧師も昔はこの教えを信じていました、あの当時はそれらに関して知識も教育も充分ではなく、そういうこともありました、しかし今の私たちの時代は悟りのある時代です、暗やみの中にとどまる必要はありません。」

「さて、あなた方はどう思いますか！あなた方は神があなた方をいつも悲しい気持ちでいることを望んでいると思われませんか！もし私が主がいつ来るかわからないという教えを信じるとしたら、おそらく私は幸せにはなれないでしょう、私は大変な恐れをいつも抱えてしまうことになります、知恵のある賢い人々はそのようなことは信じません、ただ意志の弱い人々だけなのです。」とほほ笑みを浮かべて語った。

その時、モーヘッド師はそれを聞いている人々の中にベンスという人を視野の中に入れていた、彼はベンスという人が主の来臨を信じているということを知っていたのです。

ベンスと彼の妻は教会の一番前にすわっていて、このメッセージを聞いていたが彼らはモーヘッド師が語っていることをそのまま受け入れてはいませんでした、モーヘッド師が言っているようにラプチャーを信じる事は意志の弱い人でも知識のない人でも古い考え方を持つ人でもなくすべてのことが聖書の中に全部書かれていることを知っていたからです、そして聖書のことも神のことも知らないモーヘッド師に対して情けなく思っていたのです。

この教会はベンスとその妻の母親たちが通っていた教会で彼女たちはこの教会が建てられた時から教会のメンバーであり、ベンスの思いは亡くなられた彼らの牧師トーマスが主の来臨の事をいつも語っていたことを懐かしく思い起こしていました。

トーマス牧師は主の来臨のことをいつも語っていたのです、トーマス牧師が亡くなられる直前にも彼ベンスは牧師のすぐそばで主の来臨についての聖書の言葉を繰り返すトーマス牧師を尊敬していました。

“すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っている私たちが、彼らとともに雲につつまれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主とともにいるであろう。”

(テサロニケ人への第一の手紙 4章の16, 17) この聖書の箇所がこのときの彼の魂を喜ばせていた。

この日、ベンスは初めてなぜ今まで彼はモーヘッド師の主の2度目の来臨を否定するにせの教えに対して納得できなかったのかかわかったような気がした、ベンスはモーヘッド師を非難しなかった、なぜなら彼はこのことに関して人々に熱狂信者と思われなくなかったからである。

ベンスはなぜモーヘッド師が主の真実の教えを否定してまでも彼の妻そして子供たちにこのにせの教えを教えているのだろうと思ひ廻らしていた、彼の母は主の来られることを心から喜んで亡くなられたのに、なぜだろう！しかしそのことは真実で主であるイエスは彼の聖者のために再び来られるのです。

モーヘッド師の言葉は聖霊をけがしていると思われるほど今の彼にとっては衝撃のものとなった、その説教に耐えられなくなったベンスと彼の妻は時が来て主のために立ち上がる時が来たと感じていた、彼らは席を立てて教会の出口へと歩き始め

た、説教の途中で席を立つことなど一度もしたことのないこの夫婦を見てほとんどすべての教会の人々はどうしたんだろうという顔をして教会から出ていくふたりを見てお互いの顔を見つめ合っていた。

それを見たモーヘッド師は動揺して次に何を言おうとしたのか忘れてしまったほどである、そのほかにも5,6人のひとがベンス夫婦のあとを追って教会を出て行った、彼らはベンスと彼の妻がフェアビュー教会へ行くのを知っていたからである。

モーヘッド師は何とかしてこのサービスを終わりまでもちこたえたが、その動揺は隠すことができなかつた、説教のはじめには人々を納得させられたと自信を持っていた彼も、このことで自分自身のコントロールまでも失ってしまったからである、何とかしてサービスは終わったが多くの人々に不安感を残してしまつた。

ベンスと彼の妻はフェアビュー教会へたどり着き、讃美歌を歌う人々の神をほめたたえる歌声によって心の安らぎを取り戻し、神の霊に触れる魂の喜びを感じていた、この教会は彼らが前に通っていたトーマス牧師の教会と同じように神の恵みでいっぱいであつた、ベンスはフェアビュー教会の牧師の話聞きながらトーマス牧師の事を思い出していた。

レオマスペロ牧師はこのように言つた、「主が間近に来られることを皆さんに伝えられることはとてもうれしいことです、主の来臨は皆さんが考えている以上に近いのです、主はもうそこまで来られているのです。でも残念なことに多くの人はこのことを知りません、人々の中にはキリスト信者と自称していながら主の来臨を信じていない人もいます、しかし聖書はこのように言っています。」“見よ、私は盗人のように来る。裸のまま歩かないように、また、裸の恥を見られないように、目をさまし着物を身につけている者は、幸いである。”（黙示録 16章15節）

「多くの人には神に対する恐れを心に持たず、この世の多くの快樂と楽しみのために人生を過ごし、この世の人生のことだけを考え、天上に宝物をたくわえること、次に来る世のことを考えていません。」

「私はクリスチャンの人々にもっと神と共に神の御前に正しく生きてもらいたいと思ひ、この数日の間、聖書の中にあるダニエル書と黙示録に従つてメッセージを伝えてきました、一言一言のすべては神からいただいたものです、つまり私の皆さんに伝えているすべては聖書からの神のみことばです。」

レオマスペロ牧師は”これらの起ろうとしているすべての事から逃れて人の子の前に立つことができるように絶えず目を覚まして祈つていなさい。“ というルカの福音書21章36節でこの日の教会のサービスを終わらせました。

その後、何年も祭壇に行つていなかったベンスは彼の魂が主の御前に引き寄せられていることを感じ祭壇へと向かい主の御前に立つた、彼は主の御前で神への信仰を新たに深め、もう一度、彼の魂の救いを求め確かめた。

主の前にへりくだっているベンスに悪魔がささやいた、”あなたは何をしているんだ！あなたは昔からあの教会のメンバーとしてずっと生きてきたのに、ただあなたは興奮しているだけだ、明日になれば落ち着くにちがいない、それに仕事のこともあるし、あなたの教会のメンバー、そして牧師がどう思うだろう！“しかし、そんな悪夢の声も今の彼には聞こえず、ベンスと彼の妻は祭壇へと急いだ。

このふたりがモーヘッド師の教会に属することを知っていたヘスターは目を丸く

してこのふたりを見ていた、他にも4, 5人彼らの教会の人たちが祭壇へ向かっていくのをヘスターは見た、自分がナンシーや彼らのように祭壇へと向かっていないことに対して罪悪感を感じたがその罪悪感よりも自分の意識が勝ち、まだ明日がある、次の機会にしようと考えていたヘスターだった。

その夜、彼女は布団の中で、きょう教会で学んだことを思い出していた、信者として主の来臨に準備が出来ている人は、何と素晴らしいことだろう！と思う一方、そうでない人は、何とみじめな思いになるのだろう、今日のことを考えれば考えるほど眠れなくなってしまったヘスターは彼女の母親の部屋に行くと彼女の母親も起きていて、主の2度目の来臨について思いを巡らしていたようだった、そこでヘスターが小声で母親を呼びかけたが返事は返ってこなかった、彼女にヘスターの声が聞えなかったのではなく教会の話聞くのがつらかったのだった、となりでは彼女の夫が気持ちよさそうに眠っていた、主のことを何も知らない彼女の夫の眠っている様子を見ながら彼女は次の日曜日には絶対に教会に行く決心をした、この次の日曜日の前に主が来られることはないだろうと信じていたのである。

第5章

ヘスターは一晩中、悪夢にうなされてやっと起きた、その日はとても静かで朝日がとてもきれいな朝だった、しかし、その夢の中では底知れぬ穴が開かれ恐ろしい動物がそこから出てきた、顔は人間の顔のようであり、女の髪の毛のようなものがあり、歯はししの歯のようであった、それはまさしく教会で牧師さんが説明していた生き物で醜いなごのような動物がヘスターを襲おうとしているところで彼女は目を覚ました、まだ少し寝ぼけている彼女はあの恐ろしいことが夢であったことを朝の鳥の鳴き声を聞きながら神に感謝していた。

彼女がベッドに横になったまま、すべてのことが夢であったことを心静かに感謝している最中に突然！ 雷に頭を打たれたように彼女の耳にラジオで流されていたニュースが入ってきた、「突然に何千人という人がいなくなってしまう、街中がいなくなってしまった家族の人を探している人たちで大混乱しています。」

ヘスターは気を失いそうになった、ベッドはぐるぐるとまわっているような感じになり、部屋はどんどんと暗くなっていくような気がした、彼女は気を失わないように全力を尽くした、主の2度目の来臨は確かに起きてしまったのだ、夢なんかじゃない！ 私はラブチャーに取り残されてしまったんだ。

「おお神様！ 私がラブチャーに取り残されるなんて！ 私がナンシーと教会へ行ったのはただ昨日のことです、」彼女の思いにナンシーがとった教会での行動が思い出され彼女の心臓は止まりそうになった、「ナンシーは主とともに天国に行ってしまったんだらうか？ まさかそんなことが！」 ナンシーはヘスターにとってとても近い友だちで毎日一緒に学校に行っていたのにそんな仲良しの私をおいて主とともにラブチャーに行くなんて、と思いを巡らしながら、そんなことは決してあり得ないと考えていた。

彼女はラジオから流れてくるニュースキャスターの声もほとんど聞こえないほどの状態であった、彼女は今、現在起きていることが夢ではないのかと思いながら自分の頬をたたいてすべてのことが夢であることを願いながら、もし、このことが夢であったら彼女の心、そして彼女のすべてを主にささげること、そしてナンシーと一緒に母コリンズの家に行つて主を見つける手助けをしてもらうことを決心していた、なぜなら、母コリンズこそがまさしく主を知っている人だからです。

ヘスターはやっとベッドから起き上がって知らないうちにもう着替えをしていた、大きな声で泣き出したい彼女だったがショックで泣くこともできなかった、手は動いていても、その手が彼女の手であることも感じ取れないほどであった。

彼女は彼女の両親の部屋に行き、すごい勢いで戸をあけた、ヘスターの様子がいつもと違っているばかりか彼女の体中が震えていて恐怖におびえているので家の中に火事が起きたのかと思ったり、その他いろいろな悪いことを想像したがふたりには見当もつかなかった、ヘスターはとてつもなく動揺していたがやっとの思いで言葉が出てきた。

「起きたの！ 起きちゃったの！ 主の2度目の来臨が起きてしまったの！ 何千人という人がこの世から突然にいなくなってしまったの！ ねえ、聞いている？ ラブチャーが本当に起きてしまったの！」

ヘスターの母スーザンは自分の娘をなだめようとして、微笑もうとしたが彼女の

顔が隠せない恐怖のために固くなってほほ笑むこともできなかった、また彼女の夫フランクはまだ娘が悪い夢でも見てそれを大げさに取り乱しているのだと思っていた。

ついに彼は「ヘスター、一体何が起こったのか知らないが悪い冗談でお父さんとお母さんを驚かすようなことはやめなさい、これはすべてあなたがあのフェアビュー教会に行くようになってからだ、もう2度とあの教会に行くことを許しません」と彼女に対して大変な怒りを示した。

それに対してスーザンは「あなた、そんな言い方をしなくてもヘスターだって悪気があってしたわけではないし、主イエスが来られることは知らされているけど、だれもいつそれが起きるのか知らないんですよ、ヘスターはきっと悪い夢でも見たに違いないと思う、彼女が教会に行って主の2度目の来臨の話を私にした時には私も驚き、寒気がしたけど今ではそんなに気にはしていないんです、だってそんな話はずっと先の時代の話だから」と言った。

そしてヘスターに向かって「今日は学校のある日でしょ、早く学校へ行く支度をしなさい」と何事も起きていないかのように話をした、ヘスターはラブチャーが起きたことに対して彼女の両親たちの大きな驚きは期待していなかったにしても父親の言葉に怒りを感じた。

そこで彼女のすべての力をふりしぼり「本当に起きてしまったの、ラブチャーが起きてしまったの、私はそれをはっきりとラジオで聞いたんだから、私たちは本当に取り残されてしまったのよ！」と言ったとたんに彼女の眼から涙があふれ出て彼女はショックのあまり立ちすくんだ。

そんな娘を見た母親スーザンは取り乱して夫フランクに「ねえ、まだあの子の言っていることが本当だと思わないの！」と言うとフランクは彼女に「やめなさい、君までがそんなことを言い始めるのか、もうじき7時のニュースをラジオで流すから、二人とも落ち着いてここに坐ってニュースを聞くんだ。」

フランクがラジオをつけると聞こえてきたニュースは「特別ニュースをお伝えします、今日の朝6時ごろ、何千という人が突然に行方不明になりました、今までにこのような出来事は聞かされたことも見たこともありません、すべての幼い子供たちはいなくなり、ある家では父親だけ、母親だけ、娘、息子だけがいなくなったり、また違う家では家族全員がいなくなったりしています、今までにない悲劇です、ある人は主であるイエスが来られ信者である人々を主とともに天国へ導かれたと言っていますが、まったく本当のことは今の時点では何もわかっていません、また何か分かり次第、すぐにお知らせします。」

フランクはこのニュースが終わるまで身動きできなかった、スーザンもニュースが終わるまでじっとしていたがあふれ出てくる涙に顔を枕にうずめていた。

フランクはベッドから起き上がり生まれて初めて祈りを始めた、神に対してどのように祈ったらいいのか知らなかった彼がいまでは問題なく祈っていた。

“神様、神様お願いです、私たちをここに取り残さないでください、今まで私は罪を犯した事もあったし、あなたの正しい道を歩んだこともありませんが、もし私たちを救ってくださるのならあなたのために何でもします、ですからお願いです、私たちをあわれんで下さい、私たちにもう一度チャンスをください、お願いします、

おお神様！”

神を信じることのできなかつたフランクは神に祈りをささげることなど一度もしたことはなかつたが、いま彼は心から神に祈りをささげていた。

今だにショックで体の身動きが自由にできないヘスターにとって彼女の父親が泣きながら神に祈りをささげている姿は彼女の状態をもっと悪くした、そして自分の父親が神に対してこのような祈りをささげられるような信仰を持っていたら、この家族の人生も全く変わっていただろうし、家族全員が主の来臨とともに後に来るこの世への苦難から逃れることができたかもしれないと思った、でも今では手遅れ！彼女はただただ後悔の気持ちでいっぱいだった、なぜ準備をしておかなかつたらう、ほんとうに取り残されてしまったんだ、準備ができていたら今ここにいることはなかつたのに、なんて馬鹿だったんだらう、今から始まる苦難の人生から逃げ出す道は閉ざされてしまった。

神様は私に最後のチャンスを昨夜教会でくださったのに私はこのチャンスがどれだけ私にとって重要なチャンスなのか知らずに断ってしまった、もう私にはチャンスもないし、逃げ出す道もなくなってしまった、私に真理を伝えていた牧師さんはもちろん、母コリンズもいなくなってしまった、そしてほかの聖者たちも主とともに天に上げられてしまったにちがいない、彼女は二度とあの教会に行くことがないだろうと思っていた、彼女はもう二度とあの人々に希望を与える主の恵みであるみことばを聞くこともできなくなってしまったと思った。

心から主を愛して生きて来た彼女の友達がもうこの地上にいらなくなってしまったことを思うと彼女の心は痛み体中が何も感じなくなっていた、そのような友達とフェアビュー教会に通っていた人々を失ったヘスターは始めて、この人たちが彼女にとってどれだけ大切な人だったか今はじめて感じていた、ましてナンシーまでこの人たちと一緒にいらなくなったと思った。

だけど本当にナンシーも行ってしまったんだらうか？と心に疑問を持ったヘスターは、もしナンシーがまだ残っていたら少しは気が楽になるだろうと思いヘスターはナンシーがいなくなっているかどうか、確かめたくて急いでナンシーの家に向かった、ナンシーの家に向かう途中にいつも彼女が楽しんでいたきれいな花やすばらしい木などにはまったく目も向けず、彼女はただひたすらにナンシーの家へと走った。

ナンシーの家にとどろくとナンシーのお母さんが台所にいた、いつもだったらお手伝いのハナさんが台所で料理を作っているのに今日に限ってコリンおばさんが台所にいた。

そこでヘスターは彼女にこんにちはも言わずに震えた声で「ナンシーはどこ？」と彼女に聞くとナンシーの母親コリンは「そんなに顔色を悪くして、一体どうしたの！こんなに顔色を悪くして動揺しているあなたを見たことがないけど、何事が起きたの！ナンシーだったら、まだ寝ているわよ。」とヘスターに言うとヘスターは自分を何とか落ち着かせてついに出てきた言葉が「コリンおばさん、もしかして何も聞いていないんですか！今日の朝6時ごろ主イエスが来られて主の民とともに天に昇られたということです、」ナンシーの母親コリンはヘスターが家の中にはいつて来た時に彼女の恐怖と困難におののいた様子を見て何か普通じゃないと思ったが、

それを聞いた彼女の心にもひどい恐怖感がおとずれた、そして今思ってみれば、いつも休んだり遅れて来るときには必ず連絡をしてくるお手伝いのハナさんから何の連絡もない事に気がついた。

ハナさんはいつも主に対して深い信仰をもった人で時々コリンさんに主イエスの話をする事があったがコリンさんはそれに対して聞く耳を持とうとしなかった、でもハナさんはいつも「奥さん、主であるイエスはいつ来られるか！わからないのですから準備しておいた方がいいですよ、」と言っていたのでした。

もうこれ以上、時間を無駄にしたくなかったヘスターは急いで2階にあるナンシーの部屋に行きドアをたたいた、彼女は心の中でどうかナンシーのあの寝ぼけた「はい」という声が聞こえてきますようにと心の中で祈っていた。

するとヘスターにナンシーのは母親が階段の下から「ドアをそっと開けてみたらどう！」と言ったのでナンシーはそっとドアを開けてみた。

しかしベッドにはナンシーの姿はなかった、コリン夫人はヘスターの動揺した姿を見てナンシーが彼女の部屋には眠っていなかったことをすぐに感じとったが、信じる事ができなかった、ナンシーの母親は震えながら「そんなはずがない、ヘスターがここにいるのになぜ！主イエスはナンシーを連れて行ってしまったのだらう、」と思った。

そして「ヘスター、ナンシーはどこにいるの？ナンシーはいつも良い子でこんなことを一度も母親である私にしたことがなかったのに、一体何が起きたの！」と震えながらヘスターに語った。

ヘスターは混乱しているナンシーの母親に向って答えた「ナンシーは今、主とともにどこかにいるんです、私たちには見つけられない場所に、実は私たちは昨日の夜にいっしょに教会に行ってナンシーは主イエスを心に受け入れたのに私は次の機会があると思い、そのとき主イエスを心に受け入れなかったんです、だから私はまだここにいるんです、私は取り残されてしまったんです！」

するとナンシーの母親は「どういう意味なの、教えてヘスター、私にはあなたの言っている意味がよくわからない」と力のない声でヘスターに聞いてきた。

ヘスターはナンシーが教会から帰って来た時にはもう夜遅くなっていて彼女の母親に何も話すことができず寝床についてしまったことに気づき、ナンシーの母親にそのことを説明し始めた。

「コリンおばさん、ナンシーは昨夜、主の愛に触れてその愛に彼女の心をすべて開き、彼女はすべてを主イエスにゆだねたのです、私もそのとき彼女と一緒にいたんですけど、なぜか私には引き止めるものがあって、心の中でこの次にとまってしまったんです、あの時に私もナンシーのようにすべての心を開いて主にすべてをゆだねていたら、私も主とともに天国へ一瞬のうちにいくことができたのに、もう遅いんです、朝のあのニュースを聞いた時には何もかもが終わってしまったと思いました。」

それでナンシーの母親はラジオをつけ、ニュースを初めて聞いた。「今日の朝、何千人という人が突然にいなくなってしまった。」ナンシーの母親、ケイト、コリンはカーテンを開き、日差しの美しさを楽しむ余裕もないほどに動揺していたがす

べてを失ったような気分になっていた、彼女は泣くこともできないほどに心が動揺していた、それどころか彼女の頭の中では主イエスが来られナンシーは主とともに行ってしまったという言葉が何度も何度も走り回っていた。

「私は何と馬鹿だったんだろう！ハナさんが何度も聖書を開き私に主イエスの愛がどのようなものか、そして主の2度目の来臨のことを説明しようとしていたのに、その話を聞かされるたびに彼女は無教育な人だから聖書を間違って理解していると自分に言い聞かせてきた、しかしそのハナさんも主とともに行ってしまった。」

ハナさんの人生はとても苦しい人生でいつも彼女を見るたびにかわいそうな人だと思っていたが今では私の方がみじめな人になってしまった、彼女は心の中で「ハナさんが私の代わりにこの地上に残ってくれたら、彼女に私の全財産をあげてもいい」と思うことができるほど何が現実には起きているのか、理解できていなかった。

景色だけを見ていると花が咲いていて鳥が鳴き、本当に美しい景色だが、それはただ嵐の前の静けさだった。

ナンシーの母親は教会に行くチャンスは何度もあったがいつも忙しくて行かなかったことを言葉に表すことのできない心の痛みによって思い出していた。

ヘスターはナンシーの母親ケイト、コリンに話を続けようとしたがもうお手伝いさんのハナさんまでもいなくなったこんな家には長くとどまることはできないと思い、話をやめて外に出た。

外のどこを見ても何も変わってはいなかった、果たしてヘスターにはラブチャーが起きたことを忘れることのできる日が来るのだろうか！

第6章

ジムはルシールの眠り薬を買いに行く前に娘スーの部屋に行って空っぽの寝床を見つめながら、つい昨日の夜までここで眠っていたのにと思いながら涙を目に浮かべ、その寝床を見つめていた、娘スーのおもちやが部屋の中のあちらこちらにあり、ぬいぐるみのクマがないと眠れないスーのぬいぐるみが枕の横にいまだに置きっぱなしになっていた。

「主よ、なぜ僕とルシールには準備ができなかったのでしょうか！もし出来ていたら、親子3人で一緒にラブチャーに行けたのに」と思いながら、娘スーの部屋の戸を閉めた。

この朝の出来事は今までに彼が経験したことがないほどの痛みが彼の心をおそった、ジムは自分の妻であるルシールのうなり声を聞いてこの心の痛みをおさえて、とにかくルシールに薬を買って来なければと思った、そんなジムの心も知らずジムを見るたびに「私の娘スーはどこ！」と言ってジムを困らせるルシールであった、ジムが何を彼女に言っても、どんなに優しくしても効果はなかった、もちろんジムも娘スーを取り戻してルシールのもとに返すことができれば何と素晴らしいだろうと思っていた、しかし主イエスとともに天に昇ってしまった娘スーを主から取り返すことはもちろん誰にもできなかった。

やっと眠りについたルシールだったが友達の電話の音で再び起きてしまった、その電話も腹立たしいものでジムの心をもっと痛めた、死ぬ思いで苦しんでいる人がいるのに、なぜ他の人々はその苦しみをわかろうとしないのだろうと思った、

次から次へと電話がかかってきたがルシールは心配と混乱に疲れ果てて眠りについた、泣きながら寝てしまったルシールのほほには涙がそのまま流れていて、それを見たジムは彼の母が私たちのために流した涙を思い出した、ジムたちのことで心を痛めていた日々の母の忠告を聞かなかった彼はラブチャーに取り残されて悲劇の人生を送らなければならない結果を生んでしまいました。

ジムはルシールを起こさないように静かにテレビをつけた、すべての番組はラブチャーのことばかりだった、いつも母親から聞かされていたラブチャーのことを今ではテレビの番組を通して見ている彼にはそれがまるで夢のような気がした、ある番組では突然にパイロットや運転手がいなくなってしまう大惨事を起こしたことをテレビで見せていた。

ジムはテレビを消してルシールを起こさないように静かに薬を買うために外に出た、人々は今だに何を求めているのか、どこへ行ったらいいのか、分からないまま歩きまわって泣きながら途方に暮れていた、ある人々は自分の苦痛を抑え苦しんでいる人々を慰めようと一生懸命だった。

そのような時に少人数の人が叫びながら、このように言っているのが聞えた、「牧師たちの中ではフェアビュー教会の牧師だけがなくなってしまったんだ、皆でフェアビュー教会へ行ってみよう、そうだモーヘッド牧師をそこに連れて来て何が起こったのか、彼に説明してもらおうじゃないか！」と言っていた。

しかし、ジムには全くそれに関して興味がなかった、なぜなら彼には何が起こったのか痛いほどわかっていたからでした、ラブチャーという主の2度目の来臨を正しい形で教えられていながら主イエスに心を開くことをせず、主イエスとともに歩

くことをしなかった人たちが取り残されてしまったことは仕方がないが、ラブチャーのことを間違っって教えられていて、それを信じたばかりにラブチャーに行けなかった人たちがどのように思っているのか、またモーヘッド牧師がどのような弁解をするのか興味があった、ジムは彼らの跡をついて行くことにした、モーヘッド牧師はラブチャーを信じていなかったからである。

母に連れられて何度も来たことのあるフェアビュー教会についてのジムは彼の母がいつも坐っていた椅子に知らない人が座っているのを見た、その時ジムはラブチャーの現実性を実感して大変な恐怖感が彼をおそった。

教会の中にはジムの顔見知りもいれば、全然知らない人々もいた、この中にいる多くの人はこの教会の悪口を他の人びとに言いふらし、フェアビュー教会の牧師や会員の心を痛めていた人々だが、今ではすべての人がまるで死刑を宣告されたような恐怖感でいっぱいな感じだった。

ついにモーヘッド牧師が皆の前に現れた、彼の顔もまるで死人が歩いているように青白く眼だけが真っ赤で、それはまるで酒に酔いつぶれた男が何もわからずただ皆の前に出されているようだった、彼の信じていたことが全く間違っって本当にラブチャーが起きてしまったことに混乱してただけでなく、モーヘッド自身の子供がいなくなってしまうことを知った彼はそのために目が赤くなるほどに泣いていたのである。

モーヘッド牧師の妻は朝8時ごろ、子供がいなくなったことを知ったが、同時に子供がラブチャーのためになくなった事を信じることができず、警察に電話をして自分の子供がいなくなってしまうことを訴えました、しかし事実は事実、主の2度目の来臨は本当に起きてしまったのです。

前回、教会の中ではっきりと「ラブチャーとは聖書を熱狂的に信じていた人が作り出した夢物語で現実に主であるイエスは地上に再び来られるという意味ではない」と言ったモーヘッド牧師、しかしながら今では彼自身の子供はもちろん、彼と彼の言葉を信じていたすべての人々を取り残されてしまったのです。

彼を見る人々の目は怒りで燃えあがり、その激しい怒りによって彼は大変な恐れを感じていた、そのような状態の中でモーヘッド牧師は話をしようとしたが声が出ず、ただただ涙が出てくる状態でした、モーヘッド牧師はすべての力を使って皆に対して告白を始めた。

「皆さん、私は愚かでした、私は実に真理に対して愚か者で盲人でした、聖書に書かれている通り、盲人が盲人を導くとふたりとも溝の中に落ちてしまうと書いてありますが、私は今日までこの本当の意味が分かりませんでした、私がこのような過ちをしなかったら、あなた方はこのような地獄の苦しみを味わうことはなかったでしょう、あなた方を私の友と呼ばせてもらいます。」

そこでジェーン、スローンという人がスピーカーに向かって大きな声で語り始めた、「あなたは私たちを友と呼ぶのですか、多くのうそを私たちに語っておきながら、あなたは私達を導くべき霊の人としての指導者であるべきだった人なのです、私たちはあなたのことばに頼りました、あなたは主の道を私たちに解き明かすべき人であるべきだったのに、私たちはあなたが主の2度目の来臨はすぐには起きないし、ナンセンスだと説き明かしたから、あなたのことばを信じたのです、しかしラ

プチャーは確かに起きてしまったのです。」彼女は大声で激しい怒りを持ちながら「私たちの子供たちはいなくなってしまう、私たちは取り残されたのです、あなたは詐欺師です、そしてあなたは神をけがす者です、おそらくあなたは私たちの魂を地獄の苦しみに落として満足しているのでしょう、あなたは私たちの友ではありません、あなたは私たちの魂を奪うために悪魔に使われた悪魔の手先です。」

誰かがジェーンの腕を取って彼女が次の言葉を口にする前に彼女を椅子にすわらせた、もしモーヘッド牧師が彼女の言ったことは真実ではないと人々に言うことができるならば状況は変わっていたでしょう、しかし残念ながら、彼女は彼の教会のメンバーであり、彼は彼女を確かに誤って導いていたのです、彼女はこれに対して真実を語っていたのです。

「神様、あなたのあわれみを求めます」と言いながら彼は泣きくずれた、「彼女が言ったことはすべて真実です、今私はすべてを悟ることができます、私があなたがたに伝えた間違った教えをたった今、正しい教えに変えることができ、あなた方の魂を救うことができるならと、私の命に変えても、それをしようとしている私を信じて下さい、私にはラブチャーのことを正しく信じていた素晴らしいキリスト信者の母がいました、ただ私が大学へ行っていたころ、私はにせの教えに耳を傾けるようになり、聖書そのものに対する不信感と処女から生まれたキリストを信じない考え方が当然のように思えてきて、私は今日、取り残されたのです、私はそれらのにせの教えが論理的であり、洗練された教養のある教えのような気がして、私は家に帰って自分自身に対して私自身の方がは私の母よりも聖書の真理をより深く知っているような気になっていたのです、私は私の母に彼女の考え方はもう古いんだと何度も言い聞かせようとしたのですが、彼女は一度も私の言葉に耳を貸そうともしなかったのです、それで私は彼女の家に行くことをやめました、なぜなら私は彼女のことを良識がなく恥ずかしく思っていたからです、今考えれば彼女が私の話を聞かなかったことは良かった事です、彼女は主とともに天に昇り、私はこの世に取り残されました。」

そのような話をしている彼の眼には涙がいっぱいになり、どうする事も出来ない気持ちになってしまうようでした、しかしもっと多くのことを伝えなくてはならなかったのです。

「ベンスという人が私の教会の会員としていましたが、昨夜私の主の来臨は起こらないという説教を聞いて教会を出て行きました、今日の朝、私が自分の子供がいなくなったことに気づいた時、私は彼の家に行って自分の過ちを確かめようと思ったのです、そして私は彼と彼の妻がいなくなっていることを知りました。」

「私たちは事実を事実として受け取るべきです、聖書が言っている通り、主であるイエスは来られたのです、多くの人々が一瞬にしていなくなったこの出来事に関して多くのことが語られています、しかしもう誰も心を欺く必要はありません、確かに主であるイエスは彼の子供たちを天に導くために来られたのです。」

「私は悪魔によって自分自身の心に嘘をついてしまいました、主の来臨は本当に起きるのではないかと心配していた時期もあったのですが、私は自分自身にラブチャーの物語は教養のない人々の作り話だと自分に言い聞かせて、大学で教えている人の言う事に間違いがあるはずがないと考え、ついに“主の2度目の来臨は絶対

に起こらない」と思った瞬間に私の心が自由になったのです。」

「今日の朝、この聖書の箇所を思い出しました、

(テサロニケ人への第2の手紙2：11，12

“そこで神は彼らが嘘を信じるように迷わす力を送り、こうして真理を信じないで不義を喜んでいたすべての人をさばくのである。”

「もうどのような人が私に対して語りかけても私は今、聖書が言っていることはそのまま受けるに値することであることを知りました、神様、私はなぜ、悪魔の声にだまされ、自分自身を欺いたのでしょうか。」

多くの教会のメンバーの人々は彼とともに泣いた、そして自分たちが取り残されたのは彼の責任だけではないと感じ始めていた、なぜならこの人々は前の牧師からは主の来臨は本当に起きることを聞かされ知っていたし、今の牧師の説教が間違っていると思ったら他の人がこの教会を去ってフェアビュー教会へ行き始めたように彼ら自身もこの教会にとどまっていなくてフェアビュー教会に移ることができたのです。

しかし、キリストの真理を知らないでこの教会に来て、全くの真理からかけはなれた説教を聞かされ、それが真実だと信じ切っていたばかりに主の来臨に取り残された人々はモーヘッド牧師に対して憎しみの心をいだき始めていた、この町からこのような男は取り除かなくてはならないと感じ始めていた。

モーヘッド牧師は何かを言おうとしたが、もはやどのように言いわけをしてもどうすることもできない状態になっていた、真実の神の子供たち、そして真理を伝えていた真実の牧師たちはもうここにはいない、主とともに天に昇られたのです。

彼が教会の祭壇から降りて去ろうとしていた時には彼の耳に彼ののしる声が聞こえてきた、彼は死人が歩いているのではないかと思われるぐらいつまづきながら外に出ていった、どのようにして家にたどり着いたのか覚えていないほどの彼だったが家に着いたとたん泣きながら神に祈った、「神様、もしも私があなただのみことばを信じていたならば、何千という人は暗やみにとどまる必要はなかったでしょう、しかし私のような牧師がいるために彼らは取り残されてしまいました。」

さてフェアビュー教会には青い眼をしたメリー、コンウェイという17歳ぐらいの女の子が人々の中にいた、彼女にとってこの教会は不思議な場所ではなく、彼女はこの教会にすべての人生を通して通っていた、そして彼女は主の2度目の来臨についても正しい知識を持っていた、しかしこのような状態で今現在、この教会の中にこのように坐っている自分を想像することはできなかった。

メリーの両親は真実の神の聖者としてフェアビュー教会のメンバーとして長い間この教会に通っていた、彼女も赤ちゃんの時から両親に連れられてこの教会に通っていたのである、主の2度目の来臨のことはいつも教えられていたし、彼女もそれを信じていた、しかし若い彼女にとって主の来臨がすぐに来るとは考えられなかった、彼女はそのようにしていつかは主を受け入れるつもりであったが、いつも次の機会、次の機会と時を遅らせていたのである。

昨日の日曜日の夜、この教会にいた彼女はいつもにはない力強い主の霊が彼女を導こうとしていて、もう少しで彼女はその霊に従おうとしたのですが、やはりいつ

ものように「また今度にしよう」という悪魔の声に従ってしまいました、そのためラブチャーに取り残され、彼女は今、この教会に坐っているのです。

周りには彼女の知らない人が多く、中にはフェアビュー教会の知人の顔もいたが、彼女の心は昨夜の教会の出来事であった。

メリーの心は、もし彼女がもう一度昨夜の教会に戻ることができるならば、すべてのことを神にささげたいと考えていた、もしそれができるならば、私はこのようなみじめな状態にいることはなかったのにと思っていたのです。

そんな昨夜の出来事も今の彼女にとっては長い年月のように感じられていた、家族そろっての祈りの時には父親が聖書を読み、祈りの終わりには母親の温かいキスがメリーのほほに触れ、家族全員が主の愛に包まれて幸せだった時期を彼女は思い起こしていました。

月曜日の朝、メリーが目を覚ました時はすでに 8時30分だった、メリーはすぐに「大変、今日は学校がある日なのに寝坊をしてしまった、でもなぜお母さんは私を起してくれなかったんだろう、私ももう高校三年生で1日でも学校を理由なくして休むことはできないことをお母さんもよく知っているはずなのに、」と思いながら服に着替えて母親を探し始めた。

まずは台所に行って「お母さん、どこにいるの！」と叫んだ、メリーのための朝食の用意が途中までしてあったが母親は台所にはいなかった、家中を探し始めたメリーだが、母親の姿はどこにも見当らなかった、そこでメリーは母親が出かける時にいつも置いていくメモを探し始めたがそれも見当たらず、ついには祈りを必要としている人のために両親がともにそろって出かけたのでは！とも思った、彼女の両親は時折、教会の人々のために朝の早い時でも祈りのために呼ばれることがあったからである。

そんな事をしていたメリーはとうとう学校に行くことをあきらめ、彼女のお気に入りのラジオ番組を聴くためにラジオをつけてみると「今日の朝6時ごろに何千人という人が突然いなくなりました、この不思議な出来事に多くの人が大混乱、主が来られ信者とともに天に昇られたという声も上がっています。」というニュースが聞こえてきた。

それはまるで爆弾が彼女の頭の上に落ちてきたように感じるほど彼女にとってはショックなニュースだった、メリーの顔からは色がなくなってまるで死人のようになり呼吸も速くなりときれときれになってしまうほどだった。

そんな彼女の頭の中には「これはただの作り話なの！それとも、本当に何千人という人はいなくなってしまったのだろうか！それとも、、、」と様々な思いが彼女の頭の中を走った、「そんなはずはない！」と彼女は大きな声で叫んでいた、「きっと誰かが作り出した物語に違いない」しかしラジオのニュースキャスターはニュースを語り続け、いなくなった人々の名前を読み始めた、そしてその中に彼女は母コリンズさんの名前を聞いた時、メリーにはこれがただの物語ではないことがはっきりと分かり、彼女はもう少しで気絶するところだった、そのような状態の中で昨夜、教会で主を受け入れなかった自分に対して後悔しながら、頭の中が混乱状態で外に出た、そして外には同じように混乱状態で歩き回っている人、そして気が狂ったように泣いている人、ある人はラジオのアナウンサーのまねをするように「今日

の朝、6時ごろ何千人という人がいなくなってしまった」と叫んでいた。

彼女はやっと自分自身にもどり、自分の両親が見つからないのはふたりとも主とともに天に昇ってしまったんだと気がついた、「主が来られた、主は本当に来られた。」と言いながら泣きはじめた、まるで恐ろしい映画でも見ているようにこの世の中が彼女の眼の前で真っ暗になっていった、すべてのことが事実と知った彼女は泣き叫びながら「神様、ほんとうにあなたが来られた、そしてあなたを受け入れなかった私は取り残されてしまった、神様、私はどうすればいいのか！教えてください、私の両親はふたりともあなたとともに天に昇ってしまいました、ひとりぼっちになってしまった私を助けてください。」と祈った。

つい昨日まで私は神の聖者たちとともにいて、メッセンジャーも主の来臨がとても近いことを語っていたのに、今はそれがすべて過去の出来事になってしまった、何の目的もなく、どこへ行くのか分からないままにさまよい歩いている人々の中にメリーも知らないうちに入っていた、メリーは心の中で何かの間違いではと願いながらフェアビュー教会に通っていた信者たちを探し始めた、中途半端に神を受け入れていた人たちだけが残されたような感じがあり、真実に神を愛した人たちは誰ひとりとして見つからなかった。

メリーの目には涙があふれ出て彼女がどこを歩いているのか分からないほどだった、そのうえ誰かが何かとても重い物を彼女の肩に置いたのではないかと思われるほど彼女の体は重くなり、この恐怖の苦痛から逃れるには死ぬしかないのではないかと思えるほどに心が暗くなっていった。

ある人々はフェアビュー教会へ向かっていたのでメリーもその人たちのあとについて行った、果たしてモーヘッド牧師はメリーに希望を与えることができるだろうか！彼は今だに主の2度目の来臨は真実ではなく、熱狂的信者の誤った考えだとしているのでしょうか、それとも正直に自分の間違いを認め、聖書を正しく語ることもできるのでしょうか！

モーヘッド牧師は昨日までの彼とは全く異なって、自分は神を信じていると言いながら真実の神の民の人々に対して戦ってきたことなどを告白していた、メリーはいつも神の真実の民を苦しませるような人は神自身を悲しませている人だと信じていた。

しかし、この朝、モーヘッド牧師が皆の前で自分は悪魔にだまされ悪魔のことばを信じ、牧師という名を使って悪魔のことばを皆に伝えていたことに対して心からあやまっていた事、そして聖書の中に書いてあるすべてのみことばは神からのもので、すべてが真実であることを告白した彼にメリーはあわれみを感じた、しかしそれらのすべての彼の言葉もメリーを助けることはできないことをメリーはよく知っていた。

メリーが人々の顔を見ると、その人々の眼の中には悲しみと痛みが見えた、そして人々はなぜモーヘッド牧師は私たちに真理を伝えないで私たちに暗やみに取り残したのだろうと彼ら自身に問いかけていた、そんな彼が今になって私たちに赦しを求めるなんて！そこで多くの人々は教会から去って行った。

最後にほとんどの人が教会を去ったのちにメリー自身も教会を出た、彼女にとって生きること自体がむなしくなってきた、彼女は思いの中で、主とともに天にのぼ

った信者たちがこの教会にまだいた時に歌っていた喜びあふれた讃美歌の歌声を思い出していた、そして彼女は、もし彼女にもう一度チャンスが与えられるならば「誰が何を言おうと祭壇に行きイエスを心に救い主として受け入れるのに」と考えていた、しかし今となってはすべてが手遅れだった、それにしても彼女は、両親はもちろん、多くの人々をこのような状態で失ってしまうとは夢にも思っていなかった。

さてジムは重い心で教会を去っていた、彼にとって教会でモーヘッド牧師が語ったことには何も新しいことはなく、彼にとってラブチャーが起きたことは疑いの余地もなく、道を歩きながら彼の思いは彼の母が言っていた通り、「私は天国で死んだ夫に再び会うことができ、そこで私たちは永遠に幸せになるのです」という言葉とともにそのことを現実に頭の中で想像していた。

ジムも彼の両親とともに天国で喜びを分かち合うことができたのに神の導きを受け入れなかったばかりにここに取り残されてしまったのである。

そんなことを考えながら歩いているジムはジョーが経営しているスーパーマーケットの前に来て店が閉まっているのに気がついた、ジョーという人は多くの人知っているほどの神の信者でいつも神のために働いて生きてきた人、もちろん主の来臨には当然のように準備ができていた人、ジョーの働いている姿が見えない店を見ながらジョーが何度もジムの心を神に向けようとジムの魂を助けようとしてくれたことを思い出し涙が目にあふれてきた、ジムのことを心から気にかけていたジョーももう二度とジムに声をかけることはないのです、ジムは泣きながら色々な人から色々な形によって色々な所で神を心に受け入れる導きを示してもらっていたのにそのすべてのチャンスを無にしてしまった自分に対して激しい怒りを感じ始めた。

第7章

ヘスターがナンシーの家から戻ってみると彼女の母親はまるで気が狂ったように泣き叫んでいるし、父親は泣きながら神に祈りをしていて、少し時を置いてヘスターはナンシーのいなくなっていた事を彼女の両親に話をした。

主が来られるその前夜に主を心に受け入れ、魂が救われすべてを神にゆだねたナンシーは何と恵まれた人でしょう！しかし、ヘスターにも同じチャンスがあったのです、ヘスターにも神の霊が導いていたのにそれを受け入れなかったのです。

ヘスターは自分と同じように神の霊の導きを受け入れなかった人々はどうなったんだろうと考えた、神を心に受け入れ魂が救われたにもかかわらず、再び罪に戻っていった人たちはヘスターと同じようにラブチャーに行けなかったことを彼女は知っていた。

私のように神の霊の導きに対して次の機会、次の機会と言ってとうとう取り残されてしまった人が恐怖におびえているのはわかるけど、一度神を受け入れ魂が救われラブチャーの準備ができていた人たちが悪魔の声を聞いたばかり、一時的にも罪に戻り、その瞬間、主の来臨があり取り残されてしまった人たちはきっと口に言い表すこともできないほど自分に対しての怒りと後悔で満ちているだろうと思った、ヘスターはあの時に祭壇に行って神を受け入れていたらと何度も考えたが、もうすでにどうすることも出来なかった、どのように彼女が考えても泣いても、もうどうすることもできなかったのである、教会の牧師がいつも後悔することがないように、常に主の来臨のための準備をしているようにと言っていたのに、現実には彼女の心は後悔よりも恐怖感でいっぱいだった、ラブチャーに取り残されてしまったことがまるで現実の出来事ではないように思っていたヘスターだったが、ナンシーがいなくなってしまう、お手伝いさんのハナさんも仕事に来なかったことがヘスターにとってはそれをもっと現実のものにしていたのである。

ヘスターは急に母コリンズのことを思い出した、それで彼女が本当にいなくなってしまったかどうかを確かめるために母コリンズの家へと急いだ、彼女が母コリンズの家に行く途中には多くの人が途方にくれて歩いていた、その人々の中には彼女の心が痛くなるほど道のすみで泣きくずれている人もいた。

彼女が母コリンズの家に着いた時には、自分では信じられないほどの時がかかったように思えるほどの長い道のりを感じていた彼女だったが、そこには母コリンズがいつもかわいがっていた犬のブッチが彼女を見て嬉しそうにしっぽをふっていた、何がこの地上で起こったのか何も知らない犬のブッチだったがそんな犬の眼の中にも何かを心配している様子がうかがえた。

ドアが開いていたので、もしかするとすべてのことが間違いで母コリンズはまだここにいるのではないかと思いつつ、大声で母コリンズの名前を呼びながら家中を探したが返事もなく、何の音も聞こえなかった、ただ犬のブッチだけが何かを感じ取っているように家の中の母コリンズがいつも坐っていた椅子の上で体をまるめてさびしそうに何かを見つめていた。

ヘスターが母コリンズの家に来てどのくらい時間がたったのか彼女にはわからなかったが突然、犬のブッチが母コリンズの寝室で吠えはじめたのでヘスターは母コリンズは気分が悪くてベッドで横になっているんだと思い込んで母コリンズの寝室

へ走った、全くと言っていいほどの絶望状態だと分かっているにもかかわらず小さなことに対して希望を持とうとする人間の意識とは本当に不思議であると同時に悲しさもそこにあった。

彼女ヘスターがそこで見たものは、あのジムが少し前に見たものと全く同じ状態でラブチャーが起きたことをはっきりと現実化させられるながめだった、それは母コリンズの服、そしてメガネがそのまま彼女のベッドの上に残されていたからである、すべての希望をなくしラブチャーが起きたことを自分の目ではっきり悟った彼女は泣きながら、昨日、母コリンズとふたりで教会の帰りにこの家で楽しい時間を過ごしたことを思い出していた。

そして母コリンズが今日の朝6時ごろに経験した素晴らしい出来事はヘスターには経験することができないことを思いながら心を痛めていた、その朝の出来事はこのようだった、朝5時30分に起きた母コリンズはこれが最後の祈りだとは知らず神に彼女の心を開き、彼女が最も心に気にかけている息子ジムと彼の妻ルーシーのことを祈っていた、そんな彼女はいつもと違って主をとて間近に感じ祈りが終わった後にも賛美の歌を通して昨日の夜の教会のサービスで多くの失われた魂が救われたことを喜び神をほめたたえていたのである。

彼女が自分のベッドをきちんと整えている時、彼女は主がどれだけ失われた魂のために動いていて下さるかを考えながら主に感謝を示して賛美の歌をうたっているその瞬間に彼女は突然に部屋が主の霊に満たされ、大きな声を聞いた「さあ、花嫁だ、迎えに出よ。」彼女の心は喜びと幸せで主をほめたたえた、その瞬間、何かが彼女の体に触れ、彼女は今までに経験したことのない気持ちになった直後、彼女は一瞬にして変えられていた、それはまばたきをするのと同じぐらいの瞬間の出来事であった、彼女は一瞬のうちに空中に上げられたような感じだった、そしてほかの多くの神の聖者たちが同じように空中で神を賛美する声を聞いた、そしてその声は大水が流れるような音で「ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ」と神を賛美していたのである。

他の多くの聖者ととともに彼女は「神の栄光の朝、死よ！お前の勝利はどこにあるのか、死よ、お前のとげはどこにあるのか、死は勝利にのまれた。」と叫びながら主を賛美した、彼らは主とともに永遠に生きるのである。

ヘスターは心に激動を感じ、一刻も早くこの部屋からラブチャーを感じさせるこの部屋から出なくてはならないと思った、それは彼女の残った人生をとてもおびえさせた。

彼女がリビングルームに入った時、テーブルの上に置いてあった聖書に気がつき、その聖書を手に取り読みはじめた、それは不思議にもジムが読んだ箇所と全く同じマタイの福音 24章44節であった、“だから、あなた方も用意をしていなさい、思いがけない時に人の子が来るからである。”彼女がそのみことばを読んでいる時、体中に冷や汗のようなものが体中に流れた、なぜなら、それは神が直接に人々に警告しているみことばだったからである、しかしそれはすでにもう起きてしまった、彼女と同じように何千という人々を取り残されたのである。

その時、犬のブッチが彼女に近寄ってきた、ヘスターは犬のブッチにまるで人間に話すように語り始めた、「あなたの飼い主だった母コリンズはいなくなってしまう

いました、信じがたいことだけど本当に起きてしまったこと、でも彼女のことは心配しなくても大丈夫、彼女はこの日を待ち望んでこの日のために生きて来たんだから、それが彼女の人生だったし、彼女は今、確かに主とともにとても幸せなですよ。」

ヘスターは外に出て青空を見上げ母コリンズが経験した喜びと平安を感じようとしたが彼女の眼からあふれ出る涙で喜びと平安どころか、後悔と恐怖で一瞬でも生きていられない気持ちになっていた。

彼女が道に出ていくとひとりの女の人が大きな声で泣きわめいた、ましてその泣き声はヘスターにとって聞きおぼえのある声だった、ヘスターは急いで泣き声が聞こえてくるピケットさんの家の方へ向った、それはやはりヘスターが思った通りピケットさんの泣き声でヘスターがピケットさんに話をしようとしても彼女はただただ泣き叫んでいた、ヘスターはやっとの思いで彼女をなだめて落ち着かせ話ができる状態にさせた、そして彼女から出てきた言葉は「神の恵みで満たされているような感じの子ヘスター、あなたも取り残されたの！」

「ピケットさん、あなたの愛する家族の人もいなくなってしまうんですか！」とおそるおそる彼女に聞いたヘスター、

「私の家族の中でいなくなった人はだれもいません、でも私の娘ヘーゼル、覚えていますか、あのヘーゼルです、その彼女が病院の新生児室で働いていた時、すなわち生まれたばかりの赤ちゃんを見守っていた時、ラブチャーが起きたということです、彼女がちょうど部屋の中のまわりを見回したら、何と赤ちゃんがひとり残らずいなくなったということです、部屋にだれかが入って来てすべての赤ちゃんをさらっていくことは考えられないし、彼女にはそれが理解できず何が起きたのか想像すらつかなくったみたいですが、とにかくすべての赤ちゃんが突然のようになくなったんだから、それで彼女は気が狂ったように叫び、それを聞いたほかの看護婦がいつもおだやかで落ち着いているヘーゼルが大きな声で叫んだので何事が起きたのかと思い彼女の部屋まで来て彼女をなだめたのです、ヘーゼルは突然にすべての赤ちゃんがいなくなったことを話したが誰も始めは彼女の言っていることを信じようとはせず、それどころか互いに顔を見合わせてヘーゼルが気が狂ったのではないかと思ったぐらいだったそうです、それで皆がすべての赤ちゃんのゆくえを探し始めたのですが誰も見つけることはできませんでした、それで人々の心に不思議な恐怖感がおそって来たということでした。

それと同時に今度はちがう看護婦が廊下の向う側から叫び始めた、ベッドに寝たままの患者がギブスを残していなくなってしまうのです、その患者を動かすためには医者が何時間もかけてギブスを取らなくては動かせない状態だったのに、その患者は看護婦の目の前で消えてしまったのです。

他の看護婦たちも少人数ではあるが患者がいなくなってしまうことに気がつきました、彼女たちはどのような緊急状態においても対処することができるよう訓練されているのですが今回のこの事件に対しては常に訓練されている彼女たちも混乱状態に入ってしまった。

テレビを見ていたひとりの患者が何千人もの人が突然にいなくなってしまう世界中の人々が混乱状態になっているのを知って大声で叫び始め、それはもう止めるこ

とができないほどでした、その患者は主の2度目の来臨についての知識があり、一度は魂が救われていた人であったのでニュースを聞いた時にすぐにそのことを悟り、大変な恐怖感におそわれたそうです。

その叫び声を聞いた多くの看護婦たちが2階のフロアから彼の部屋に何事が起きたのかと様子を見に来ました、そこで彼は皆に向かって「主の来臨！それが起きたことを今テレビでアナウンサーが発表していました」と叫んだ、それを聞いた看護婦の中には驚きのあまり気絶する人もいるほどだった、人々は主とともに天に昇ったというニュースはヘーゼルを恐怖と不安でいっぱいさせた。

ヘーゼルの母であるピケットさんは嘆き悲しみながら、「ヘスター、私の娘はそのショックのあまり狂ったようになり、病院の方から電話があつてすぐに病院に来てほしいというので行ってみるとヘーゼルはもう身動きできないようにストレートジャケットという特別な上着を着せられていたんです、私はその姿を見たとき、とても耐えられない気分になりました、あの子はとても頭のいい子だったのに！

今のところ私にはあまり考える時間がないのでよく分からないのですが、一瞬にして多くの人々がいなくなってしまったニュースを聞いても私には何が起こったのか全く見当もつきません、ヘスターは本当に主が来られたと思っっているんですか？彼女はまるで死刑の宣告でも言い渡されるのを待っているかのように恐怖感を顔に浮かべながらヘスターの答えを待っていた。

「はい、ピケットさん、主が来られたことは事実だと思います、主であるイエスは彼の民のために来られたのです。」ヘスターは彼女の友達ナンシーが主が来られる前日に教会へ行き、主を彼女の心に受け入れた事、そしてナンシーと母コリンズがいなくなってしまった事を知った事、また母コリンズのベッドルームで彼女が何を見たかなどをピケットさんに話して聞かせた。

ピケットさんにとってはまるで途方もない話で主イエスが主の民のために来られるなんて一度でも信じたことがなかったのです、今になってもそのことを信じたくない、彼女はどうかしてそのことが間違いであつて事実ではないことを求めた、しかしヘスターは主の来臨は本当に現実に起きたことを断言しました。

ピケットさんはそれに対して「主が私たち人間に対して絶望的な悲劇を与えるはずがないし、彼は神であり、そのもっとも誉れ高い神が私たちにそんなことをするはずがない」と自分の思いを告白した、そして「神はどんな理由があつて、この地上から人々を盗むようなことをするのですか？」

ヘスターが答えて「主である神はこの地上から人々を盗んだりしてはいません、主はご自身の民を守るために来られたのです、あなたも私も主の来臨のために準備をすることができたことを知っていたはずです、あなたも主の2度目の来臨の教えについては聞いたことがあつたはずです。」とヘスターは彼女を責めるように言った。

ピケットさんは答えて「私は何度もその話を私の人生の中で聞いていました、でもそんなことが本当に起きるなんて考えたこともありませんでした、それに私は長い間教会に行っていないので主の来臨については長い間聞いていないし、私の毎日はとても忙しくて、週のほとんどは働いているし日曜日には魚釣りに行ったり、ほかにもっとすべきこと、楽しむべきことがとても多かつたのです、私の夫も教会へ

行かないことに対して別に何も言わないし、彼の持論は“私たちのできることは限られているし、なるようにしかならない。”というものでした。

ヘスターは言った、「その考え方は間違っています、主の来臨の時にすべての人が主とともに天に昇ることができるように神は私たちに自由意志を与えられ、その準備をされていたのです、主イエスの聖なる血を受け入れることを私たちが拒んだために私たちは取り残されたのです。」

ピケットさんはヘスターの話を切るかのように「そんなことが真実の出来事であるはずがない、とにかく私はそんな作り話のようなことは絶対に信じません。」と断言した。

ヘスターもそれに対して憤りを語り始めた、「それなら、あなたは自分で信じたいように信じていて下さい、ただあなたのような人がいるから、私たちをはじめ多くの人がラブチャーに取り残されてしまったのです、あなたのような頑固で強情な人には神のみことばを理解することはできません。」

そのようにヘスターが語っている心の中には、もはやピケットさんに対する同情はなく、怒りと憤りに満ちていた。

ヘスターはピケットさんの顔をにらみつけながら、「あなたの娘が気が狂ってしまったのもあなたが原因、あなたがあなたの娘さんに正しい教えを教えていたら、あなたの娘さんは主とともに天に昇ることが出来ていたでしょう。」

そう語っているヘスターの目からは涙がいっぱいあふれ出ていた、彼女は彼女の母親がヘスターを教会に連れて行き正しい教えを教えられていたら取り残されることはなかったのではと思ったが、それも今ではもう手遅れの出来事だった、彼女はピケットさんに向かって「あなたのような母親は今日の朝の出来事に対してもっともっと深く考えるべきです。」と叫ぶように言った。

そのような状態で彼女は憤りと怒りがいっぱいになった思いでピケットさんから毒ヘビから逃げるように立ち去って行った。

真実によって責められているピケットさんは大変な怒りとともに彼女に対して言い返そうとしたが、すでにヘスターは彼女から遠く離れていた、彼女の後姿を見ているピケットさんの心には怒りの気持ちが徐々に冷たい恐れと恐怖感に変わっていくのが感じられた。

ピケット夫人は心で何度も主の2度目の来臨を否定しようとした、ヘスターが初めに彼女に話した時、一瞬であれ彼女はヘスターの話を信じたが、それらをすべて打ち消して、「私はそのようなナンセンスは信じない、成るようにしかならない」と心に言いきかせ、私たちはそのことに関して何の関わりもないと思った。

そのように思った彼女だったが心の奥底ではヘスターの言っていたことは真実で正しいことだと知っていた、彼女はたしかに彼女の娘に神のみことばを正しく教えることをせず、心は責められていたがそれを認めようとはしなかった。

ヘスターの周りは主の2度目の来臨をまざまざと現実のものにする痛ましい状況ばかりでした、誰もこのような出来事を直視することもできないし、説明することもできないほどの状態でした、どこを見回しても主の2度目の来臨が起きてしまったことを否定できません、ヘスターの心にはもし、もう一度だけチャンスがあったならと思う心が頭から消え去りませんでした、しかし現実にはその希望は絶望に終

わり、ヘスターは今何千人というほかの人々とともに苦難の時期を迎えようとしていたのです、彼女にとって、このことは現実のもののように思えませんでした、今になっては確かに夢ではないことをはっきり自覚せざるを得なかったのです。

彼女にとっては昨日、教会で牧師さんから聞いた主の2度目の来臨の話とその後に来る苦難の時期の説教がまるでずっと昔に聞いた話のように感じていたのです、もし彼女が彼女の人生の明日を見ることができていたならば、事は変わっていたでしょう、しかしそれが人生というもの、神だけが将来何が起きるかを知っておられるのであって、その神が私たちに忠告を与えられ、明日のために準備をするように説教されていたのです、確かに神は神のひとり子が思いがけない時に来られることを告知らされていたのです。

さて多くの人々がイピーワースと呼ばれる葬儀場の前で集まっていた、こんな早朝から多くの人たちが葬儀場の前で何事だろうと思ひながら近寄ってみると、ウエスリーバートラムという人が興奮しながら「私には理解できません、どうしてこんなことが起きたのか！本当に理解できないのです、長い間、この商売をしてきましたがこんなことが起きたのは初めてです、もちろん捜しました、でも見つからないのです、私に出来る事はすべてしたのです、警察にも電話をしましたがいつ電話をしても話し中で助けを求めることができなかつたのです。」と語っていました、

ヘスターはこの人は一体、誰に向かって話しているのだろうと思ひながら、人ごみをより分けて前へ進んでいきました、そこにはお金持らしい高価なスーツを着て指には大きなダイヤモンドの指輪をはめた男の人がウエスリーバートラムさんの前に怖そうな顔をして立っていました、

「もういい、これ以上あなたの話を聞きたくない、埋葬をしようとして私の妻の死体を昨夜持って来たのに今朝になってその死体がなくなってしまったなんていうばかげた話がありますか！私にこのような話で妻の死体を見つけたら何らかの手数料を私から取り上げようとしているなら、私には別の考えがあります、あなたを訴えてあなたの全財産を裁判によって勝ち取ります、覚悟していてください、しかし、昼の12時までに私の妻の死体を戻してくれたら、すべてのことを許しますが、もし12時までに死体が戻らなかったから私にはもう何も言うことはありません、私の弁護士にすべてを任せます、これだけは覚えておいて下さい、どんなことがあっても私は私のすべての勢力を使ってあなたが2度と商売をすることができないようにしますから。

ウエスリーバートラムさんは頭を大きく振りながら、彼の話が終わるのを待っていました、そんなことを言われてもと思ひながら、自分にできることはとにかく死体を探すことしかないと思ひながら、4時間も消えてしまった死体を探し回ったが、その複雑な問題を解決することはできなかった、それとも彼が大金持ちということを知っていてお金のために彼の妻の死体をどこかに隠してしまったのでは！もうそのくらいのことしか彼には考えられなかった、冗談でこんなことをする人もいないだろうし、いったい誰が何のためにこんなことをしたのだろう？長い間この商売をしてきた彼だったが誰かが遺体を墓場から盗むなんてことは一度も経験したことはなかったし、まして死体のための監視人を雇うなんて夢にも思わなかった彼でした。

指に大きなダイヤモンドの指輪をした男の人が去ろうとした時にヘスターは彼の洋服の袖をつかんで「あの、すみません」と言った、

ジョンドレスレンはあたりをぐるぐると見まわしながらヘスターの顔を見た、常に自分を中心に自分の思い通りに生きてきた彼は腹を立ていらいらしながら大声で話を始めた、あのウエスリーバートラムはこのような状態にあってあらしを静めるどころか、彼には何をすべきか全く分かっていない、「こんな時に、君は何が言いたいんだ！」とジョンドレスレンはヘスターに向かって言った。

ヘスターは彼に向かって「あなたの奥さんはクリスチャンでしたか！」と聞いた、その瞬間に彼は不思議に思い、ヘスターの言葉に耳を貸し始めた、

「そういえば私の妻はキリスト信者でクリスチャンだったけど、それがどうしたと言うんだ」と彼は言った、「私の妻はいつも信仰の話をしていたが、その話に対してあまり真剣に耳を貸したことはなかった、私は彼女がやりたいことは何でもやらせてあげていたし、私には仕事があったので彼女が自分で好きなことをしたい時間は十分にあったはずです、」

「だが私の妻の死体がなくなってしまった事と彼女がキリスト信者だったこととどのような関係があるというのですか！」

いつもだったらヘスターのような若い女の子には耳を傾けることもしないのにヘスターの言っていることに耳を傾けていた自分自身に驚いていた彼でした。

もしかしたら、ヘスターはこの死体が消えてしまったという複雑な問題に対して何かを知っているのではと思いつつ、騒がしくしていた人々がヘスターの話聞くために近寄ってきた。

「もし彼女が本当の神の子であったなら、彼女は神の栄光を見たのです、」

「あなたは何を言っているのですか？ もしあなたがこの問題を解決できるのなら、私たちに夢物語のようなことを言っていないではっきりと説明してくれませんか」

「主である神は今朝6時ごろご自分の信者をむかえに来られたのです、あなたの奥さんは真実のキリスト信者だったので彼女の死体は墓場から出て、自分の魂と再び一体となって主とともに天に上がられたのです、これは他のキリスト信者の死体にも同じ事が起き、この朝、何千人という人がこの地上から消えると同時に聖者のよみがえりが起きたのです。」

ジョンドレスレンは彼女の言っていることが全く理解できない様子で聞いていた、ヘスターは語りつづけた、「もしあなたが墓場に行けば、必ずあなたの奥さんの墓場と同じようになっている所がたくさんあると思います。」

ジョンドレスレンはその話を聞いて急いで墓場へと向かい、ヘスターはともに群衆が去って行くのを見て自分も彼らのあとを追って墓場へ向かった。

彼女が墓場へ着く前にもうすでに人々の泣き声が聞こえ始め、多くの人々がこの信じられない出来事のよみがえりの証人となっていたのです。

そこには一つの墓の前でヘスターがああ葬儀場の前で話した男の人がハンカチで涙を拭きながら大きな穴があいている墓の中を見ながら泣いていました、少しの間、ヘスターはその男の人の近くに立っていましたが彼にはヘスターがすぐ横にいることすら感じる事ができなかったようです。

その時、ヘスターの頭の中に聖書のみことばが浮かび上がった、(コリント人へ

の手紙、第一、15：42－44）“死人の復活もこれと同じです、朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものによみがえらせ、卑しいもので蒔かれ、栄光あるものによみがえらせ、弱いもので蒔かれ、強いものによみがえらせ、肉のからだで蒔かれ、霊のからだによみがえるのです、肉のからだがあるのですから、霊のからだもあるのです。”

ジョンは「何ということが起きたのだ！」と震えた声でヘスターに言った。

ヘスターは彼に向かって「その通りです」と答えた、あなたの奥さんの死体がどうして消えてしまったのか！ 今あなたにも理解できると思います、」

「君の言ってきたことが今やっとわかりました、でも今だに信じがたいことだ、」と彼は息をつまらせながら言った。

あまりの驚きのために彼の顔はひきつっていた、まさしく彼の経験しているこれらのことは彼自身耐え難いことだったのです。

ヘスターは穴の開いた墓の前を数秒の間、見つめていたがすぐに墓場を後にさっきまで歩いて道へ戻って行った。

墓場から近いところにある未亡人であるブランドンさんの家を通りかかったヘスターは、その家の静けさに気がつきました、ブランドンさんの夫は2年前に交通事故のために5人の小さい子供を残して亡くなってしまっていたのです、夫を亡くしてからの彼女の生活はとても苦しく、毎日どのようにして子供たちに食事を与えるかと心配するほどでしたが、主の恵みがいつも彼女たちを助けておられました。

彼女たちにとって日曜日の夜は特に苦しい夜で食べるパンもなかったし、パンを買うお金もなく、その上に一番下の赤ちゃんは病気でその赤ちゃんを寝かせつけた後、彼女は夜中まで祈り続け、祈りながら眠ってしまったのです、神が与えられる次の日のことを知ることもなく、数時間のちには彼女のそんな苦労もすべてに終わりの時が来ようとしていることを彼女は知る由もなかったのです。

6時10分前、彼女は疲れはてた体を精いっぱい動かしながら起きた、彼女にとっては目を閉じたばかりなのにもうすでに起きて仕事に行かなくてはならない感じだった、しかし彼女は自分の子供たちのために仕事を休むことはできなかったのです。

その瞬間、彼女の部屋は神の栄光で満たされ彼女は「そら、花婿だ、迎えに出よ。」という叫ぶ声を聞いた、何か水のような光り輝いたものが彼女の体をおおい、彼女は一瞬にして変えられたのです、まるでまばたきするのと同じぐらいの速さで彼女は天に上がり、眠っている子どもたちも一瞬にして変えられました、神のすばらしい栄光の朝が来たのです。

リンダジョウダンも未亡人であるブランドンさんの家から2軒目の家に住んでいました、リンダはもう何年もの前に主を見だし魂が救われていましたが、そのことを嫌い、昔のように自分と一緒に罪の中で生きてほしいと願う彼女の夫に肉体的にも精神的にもひどい苦痛を与えられる毎日を送っていました、時には彼女の腕をつかみ、彼女に主を呪わせようとして彼女の腕が折れるほど彼女を痛みつけていたのです、彼女の夫は毎日のように彼女を苦しめていましたが、たとえどんなひどい事をされても彼女はその苦しみにも負けることなく、主への信仰によって勝利を得ていたのです、他の時には彼女が行っている教会の牧師や会員の人たちにまるで

彼女が何か悪いことでもしているようにうそを言いふらしていましたが多くの人は彼がどんな人であるかを知っていたので彼の話に耳を傾ける人もいませんでした、人が彼の話を聞かないということによって彼はもっとひどいことを彼女にするようになったのです。

ラプチャーが起きたその日に、彼は彼女のベッドの横に立っていました、その前日の夜には彼女の教会で素晴らしいキリストのよみがえりにふさわしい集会があったのです、しかしいつも神が教会で素晴らしい動きをされればされるほど彼女の夫は理由なくして彼女に怒りをぶちまけるのでした、朝の6時前、彼は多くのひどい言葉を使って彼女に起きて彼のために朝食を作るように命じていました、

彼女は眠たそうに起きて時計を見ました、朝食を作る時間には早すぎると思いながら夫に「朝食を作る時間にはまだ1時間もあるのにどうしたんですか、時計を読みまちがえたのですか？」という彼は怒りをこめて「私の言ったことに対して口答えをするな、あんなくだらない教会に遅くまで行っているから私のために朝早く起きて朝食を作ることをしたくないんだ、今日からはこの家での宗教は全く禁じる、そしておまえとの結婚も終わりだ。」と言った彼の顔には怒りとともに暗いものがあった。

今までにいろいろな事を彼女に言ってきた彼でしたが、今回のような事を言ったのは初めてだったので、それを聞いた彼女は驚いて彼に対して何もいう言葉がありませんでした。

彼は彼女に「そんなところでバカみたいに坐っていないで私の言うことをよく聞きなさい、私はあなたにあの古い教会には行ってほしくないし、これからはあなたがあの教会に行くことを禁じます、どうしても教会に行きたいのなら、なぜもっと道理にかなっているこの町から尊敬されている教会へ行かないのか！私はあなたを恥じています、私がどこへ行っても誰ひとりとしてあの牧師の話している説教に対して良いことを言う人はいない。」と彼はさげすむように言いました、「ある人は必要以上に彼の説教を聞いてうんざりしています。」そのようなことを自分の夫から聞いていた彼女の眼には涙が浮んでいました。

「泣いても私の気持ちは変わりません、そんなことよりもさっさと起きて、」と彼女を呪うような言葉で言いました、「もしあなたが1時間かそれ以上早く起きることができたら、あなたも疲れて教会にいつも行きたいとは思わなくなるだろう」

すると突然、部屋の中にまぶしいほどの光が輝きました、その瞬間ここにいた彼女は次の瞬間にはいなくなっていました、彼女もあの叫ぶ声を聞いたのです。

「そら、花婿だ、迎えに出よ。」彼女は一瞬のうちに変えられました、主とともに永遠に天に上げられたのです、栄光の輝いた朝が来たのです。

ヘンリージョウダンが自分の目を疑うほどの信じがたいことが起きたのです、それは彼の妻が彼の目の前で突然に消えてしまったのです、

その出来事によって彼の口から神に対する呪いの言葉が出ようとしたが、混乱と恐怖を感じている彼の心がそれを止めました、彼はこの一瞬の間に起きた出来事に対してどのようにすべきか分からなくなっていたのです、そして彼は何度もまわりを見回したが彼女は見つからなかった、それから彼は家から出て混乱と恐れのために狂ったようになった。

それからヘスターは道を歩いている時に恐ろしいほどの叫び声を聞いた、それは彼女が今までに聞いたことのないほど彼女をぞっとさせる恐ろしいものでした、彼女は、そのため体の中に冷たいものを感じるほどでした、そしてまた他の叫び声が道を少し歩いたところにある小さな黄色の家から聞こえてきた、そしてベティーレンが扉を押しよけるようにして出てきた、

ベティーレンはボブレンの妹で、ボブは静かでおとなしい妻と二人の子供を持った人で、ヘスターは人々から聞いたことによって彼らの家族のことを知っていました、ボブという人は家にとどまることをせず、はっきり言って彼の人生の中に何のいいものも持っていないという感じの人でした、しっかりした仕事もなく、近所の人言うには無能で何の役にも立たない人だということでした、彼は彼の妻と子供たちを家に残して遊び歩き、酒を飲みほかの女の人を追いかけていたということです。

ヘスターは彼の奥さんのことについてあまり知りませんでした、人から多くの良いことを聞かされていましたが、聞くところによると彼女は素晴らしいキリスト信者であり、子供たちにとって良い母親であったということです、しかし彼女の人生はとても難しい人生だったということです、彼女はただ家事の仕事や子供たちを世話することだけでなく、フルタイムの仕事をこなし、洗濯はもちろん多くのことで苦勞をしていたということです、このような素晴らしい女の人に何とひどい運命というか、悲しい結婚生活だったことでしょう。

このようなことがヘスターの頭の中にながら、彼女はその家に向かって歩いていました、ベティーは言葉が言葉にならないほどの驚きとともに家から出てきてヘスターを抱き込むように家の中へ引き入れた、そしてベティーは彼女を家の中のベッドルームの中に彼女を導いた、そして彼女は信じられない悲しい出来事をヘスターに見せた、ヘスターはそれまでラプチャーののちに色々な悲しい出来事を見てきたと思っていたがこのことはヘスターにとってその記憶を消すことができないほどのひどい出来事でした、ボブレンのベッドルームで彼女が見たものは部屋の天井からボブの体が吊るされ、彼の眼は眼球ごと飛び出して、彼の舌は血まみれとなって口から真っ赤な血が流れていたのです。

ヘスターはその恐ろしい光景を信じられない気持ちで見つめていました、誠実なキリスト教の妻を持った不忠実で大酒飲みであった夫がこのような形で自殺をしたのです。

ベティーは絶望的になり死体に近づく、それを引き下ろそうとしました、彼女は自分で何をしているのか分からなかったのです。

ヘスターは彼女のしていることを止めさせようと必死になり、「ベティー、遅すぎます！ 彼はもう死んでいるのです、そのようなことをしても事は変わりません。」

ヘスターの声が彼女を正気にもどしたようです、ゆっくりとベティーはヘスターに願いをするように、「しかし、彼が死んでいることなどありえなでしょ！ 私の兄弟が死んでいないと私に言ってください！」

ヘスターは彼女の肩をとり、ドアの方へ彼女を導きました、それから彼女を居間の大きなソファーにすわらせ、静かに死の匂いのするドアを閉めました。

ベティーは、話をしようと必死になっていましたが、出てくる言葉は彼女の苦悩の心からのうめき声だけでした、彼女がどうにかして語った言葉は「何が彼にそれをさせたのか、どうしても私には理解ができないのです。」というものだった。

急に、彼女は座っていた椅子から立ち上がり、深くため息をつき、彼女の義理の姉妹と子どもたちはどこに行ってしまったのだろう！とつぶやきました、ジェニーが彼を残して家を出て行ったのが原因なのだろうか！ 彼が仕事から帰ってきた時に何かノートを見つけ出し、彼女が彼から去って行ったことを知ったのだろうか！ 彼女は閉じられたドアの方へ急ぎ、扉をあけ部屋の中のあらゆる所を探し始めました、ジェニーがもし去っていたならば、彼女が昨夜寝た後のはずです、しかし彼女は死体には目を向けることも、さわることもしませんでした。

でも、ノートは見つかりませんでした、ところが彼女は床の上に落ちていた新聞を拾い上げ震える手で彼女はそれを拾い上げました、彼女はすぐにヘッドラインを読みました、「何千人もの人が今日の朝 6時ごろに突然消えてしまった」彼女はそれをもう一度読みましたが理解できませんでした、その後、初めて、ヘスターはベティーが神が来られたことをまだ知らないことを理解しました、このような出来事の朝なのに、彼女は一体どこにいたのだろうとヘスターは思いました。

ベティーの顔色は青白かった、ヘスターに彼女は新聞を示しました、ふるえる唇で、彼女は「あなたは、これがどういう意味か分かりますか！」と尋ねました。

「はい。」ヘスターは柔らかかに答えました。「主である神がこの朝来られ、神の子どもたちで準備ができている人々をこの世から取り去られたのです。」

ベティーは驚いて聞いていました、彼女の手はかたく握りしめられたままでヘスターをじっと見つめ信じることができないという様子でした。

「そんなことはあり得ない！、絶対にあり得ない、その話は聞いたことはあるし、いつか起きるかもしれないと思うことはあったけど、あまり真剣に考えたことなどがなかった」と言って彼女はふらつきました、「ジェニーはしばしば私にその話をしてくれたことがあるし、その話を彼女がしている時、私は彼女がとてもきれいなことに驚いていました、でも私はその話が私にとって理屈に合っていない話だと彼女には言いませんでした、なぜなら彼女にとってそれがすべての彼女の人生のようだったからです、」

「ともあれ、ボブは私の兄弟で、彼はもう死んでしまったのですから、」彼女は涙を目に浮かべ口ごもりました、「彼は彼女にあまり幸福を与えませんでした、事実、彼は彼女にとって心の痛みでした、しかし彼女はそれを私がかつて会った誰よりも良い方にとっていました、もし私が彼女だったならば、私は彼のもとを去り、私がどこに行ったか絶対にボブには知らせません、と何度も彼女に言いました、しかし彼女は神に祈り続け彼が救われることを期待し続けていたのです。」

そういう状態の中で神はジェニーを彼女が思っていた道とは違うやり方で彼女を救われたのです、

しかし、ベティーは突然のように「一体！彼女はどこに行ってしまったんだろう」とつぶやきました、「彼女がこのように家を留守にすることはめったにないし、彼女が戻ってきたら大変な衝撃になるでしょう。」とも言った。

その時、ヘスターは彼女を見て言いました、「ベティー！まだ分からないのです

か！ジェニーはもう帰って来ません、彼女は主である神が来られ、彼女を永遠にこの世の苦難から取り去られ、主とともに永遠の御国に取り去られたのです。」

ベティーは真相が彼女に分かってきたとともに気絶しそうになりました。「ジェニーがこの世からいなくなったなんて！」彼女はヘスターの腕に身を投げ出して叫びました。それから彼女はヘスターをまっすぐ見つめて彼女の眼を見て次のように言いました、「今、すべてがはっきりと分かりました、なぜボブが死んでしまったのか！彼はジェニーと子どもたちがいなくなったことに気づき、そこらじゅうを探し回ったにちがいありません、そのとき彼は新聞の見出しに書かれたこのヘッドラインを見たのです、そして彼は何度もジェニーが彼に語っていた聖書のことばを思い出したに違いありません、そして彼はそのことが現実起きたことを悟ったのです、何と悲しいボブ！」と言って彼女はため息をつきました。

ベティーがまだ話し続けている時に、ヘスターは自分の母親の友人たちに会いたかったことを思い出して、そこを立ち去った、彼女はその友人たちが取り残されていることを何の疑いもなく知っていました。

ヘスターは天井からのロープに吊るされたボブの恐ろしい場面の記憶を消し去ろうとしましたが、それは不可能でした、疑う余地もなく地獄でボブは彼が生きていた時よりもっと悪いものを見て目を開いたにちがいありません、もし彼が神のために生きていたならば、これは起こっていなかったでしょう。

ついに、ヘスターは茂みと木によってほとんど隠された大きなアパートに近づきました、彼女はエレベータを待たずに階段を選び一度にふたつのステップをとびこえてマーサとウィルマの2階のアパートの戸口に立ちました、彼女は大声でドアをノックしていらいらしながら返事を待っていました。」

「なぜ誰も答えないのだろう！」と思った瞬間、ウィルマは用心深くドアを開き、かすかに明かりのついた廊下を見た。

ヘスターは驚きで彼女を見ました、なぜなら、それはいつものウィルマとは違って彼女の髪はくしでとかれていないし、彼女の唇は紫でした、彼女の目も沈んでいました、そして神経質そうな指の間に彼女は吸いかけの紙巻きタバコを持っていたのです。

ウィルマがヘスターを見た時、彼女はほっと一息をつきドアを大きく開きました、彼女は「ヘスター、どうぞ」と震えて言いました。

ヘスターは瞬間的に部屋中を見回し、あの特別ニュースの入った新聞を捜しました、それはウィルマが神が来たことを知っているかと確信したからです、そして彼女は座りました。

少しの間でもとても長く感じた沈黙の後に、ウィルマはようやく語り始めた「あなたのお母さんは元気！」

「そういう話し方はちょっと変な感じがします、多くのことが起きているのに」とヘスターは話し始めました、しかしウィルマは話を打ち切って「おお、私の質問に答える必要はありません、なぜ私たちは知らないふりをすることができましよう！私は、何が起こったか知っています、主が来られたのです、それを言うてはどうですか！それを言いたかったのですよ！はっきり言えばいいのに、」と強く言いました。

「ああ！私は、死んでいたらよかったのに、私は今日を憎みます、私はこのような日を見て知るとは考えたこともありませんでした、私自身を狂わせるのに十分です、それにしても何と悲しいマーサ！ 彼女はヒステリックになってしまいました。」

「マーサはどこにいるの！」ヘスターは開いている次の部屋の中の方をずっと見て尋ねました。

「私は知らない、」と彼女は返答しました。「マーサがこの事を聞いた時、彼女は狂ったように家から出て行きました、私は何か彼女に起きないかと、とても心配しました、彼女は恐れで狂ったようになったのです。」

「それにしても、神はどうして私たちが理解することができないようなことをするのでしょうか！ 多くの人は気が動転して腹を立てています、私は今日とても重要なプランがあったのに、すべて台無しになってしまいました、それというのもすべてが、」

ヘスターは急に立ち上がってウィルマの話を打ち切るかのように「そういうことを言うてはいけません！」と彼女は叫びました。「あなたはこれがすべて神のせいのように話していますが、あなたが非難すべき人は神ではありません、あなた自身を非難すべきです！ あなたも準備ができていたかもしれません、結局のところ、神は人類がこのような問題から逃れられるようにイエスキリストのカルバリを通して多くの道を示しておられたのです、あなたも知っておられるとおりにイエスはあなたのためにも死んでくださったのです。」

「誰が私たちをこの世から取り去って助けてくださいと言いましたか！」とウィルマはあざ笑った。「もし私が説教を聞きたければ教会へ行きます、神を受け入れるか、受け入れないかは誰のビジネスでもありません、私だけのビジネスです、」彼女は毒蛇のような目をひらめかせながら、軽蔑して言った。

ウィルマは抜け目のない女性でした、ヘスターは彼女が母親の親友であることをいつも心ではいやがっていたのでした、しかしヘスターの母はウィルマをよくスポーツのできる人と思っていました。

ヘスターはやさしくあやまりました、「ウィルマ、すみません、私は説教するつもりでそう言ったのではありません、その通りです、私たちは誰でも自由意志がこの世ではあります、神を選ぶことも出来れば、断わることもできるのです、」

ウィルマが彼女のことばに耳を傾ける心を持っていないことを知っていたので、彼女は小声で、「もし私たちが彼を拒絶すれば、私たちはその結果を受けなければならない人生をもっているのですね！」と付け加えました。

ウィルマは非常に動揺して神と神の仕事に対して多くの冷酷なことを言うまでは落ち着こうとしませんでした、この世に慣れた女性が神について名誉と敬意を払ったヘスターに対して神をけなし始めた時、ヘスターの頬は赤くなり始めました。

「あなたは私がかつて会った人の中で最も愚かな人です、ヘスター、あなたはこのような苦難の世の中にあなたを残した神を支持して何を言いたいのですか！」

ヘスターの握り締めた手は寒く冷えて湿っていた、また彼女の心は中で激しく打ち動揺していた、しかし彼女はウィルマにもはや何も言うことばを持っていなかったのです。

ウィルマが電話に答えるために別の部屋に入った時、ヘスターは傷ついた動物のようになってアパートから静かに出て行った。

再び通りに戻って行ったヘスターは、今だにそこらじゅうに起きている神のなされた悲劇の場面に圧倒されてしまいました。

「私の神！」彼女は「これこそが取り残された後に起きる恐怖そのものです！」とうめいてつぶやきました。

第8章

ジムはラブチャーの後、狂喜に続く時を生き抜きました、昼間は長かったが夜はもっと長く感じた、彼は自分自身では耐えることのできないほどの恐ろしい出来事を耐えてきました、時々、彼はこれが夢であり、きっと目が覚めるとすべてが夢であったことに驚くだろうとも思っていました、しかし心の奥底では、それが夢ではなく現実に起きたことであることに何の疑いも持ってはいませんでした。

彼が感じた悔やみは口では言い表せませんでした、彼はその後悔がすでに遅すぎることを知っていました、もし彼が彼の大切な母親から与えられた多くの警告に注意を払っていたならば、こんな事にはならなかったのに、彼女は神のみことばをはっきりと悟っていて、この苦難から逃げる道を知っていたのです、もしも彼がそれが自分の時代に起きることを知っていたならば、自分自身も準備をしていたでしょう！ なぜ私は聖書を信じなかったのだろう！ それは私自身にとってこの苦難から逃れる道だったのに、しかし、今それはもう手遅れになってしまった、私はもうすでにこの苦難の時の中にいるのです。

ジムはしばしば母コリンズの小さな家を訪れました、彼は部屋から部屋へ歩き、彼の母が今でもそこにいることを想像しようとしていました、母コリンズはそこで聖書を読み、祈りをしていたのでした、そして台所では神に向かって賛美の歌を歌っている様子が今でもはっきりと子供の時のようによみがえって来ます。

しかし突然、次の瞬間彼はそうでない現実に引き戻されます、そして母はもうすでにここにはいない事と、もう二度と彼女はジムのために祈ってくれることはない事を悟るのです、私の神、私の母がいなくなり、私のために祈ってくれることのない今、私はどうして生きて行くことができるでしょう！

彼は、どこへ行くとも考えないで家を出て行き、もしもこのすべての事を完全に忘れ去ることが出来、二度と思い起こすことがないのであればと泣きながら思いましたが、ジムはこの現実の中で生きて行かなくてはなりませんでした。

彼が家にいる時は、彼の妻ルシルが赤ちゃんを失って以来健康ではなかったもので、彼の人生はほとんど耐えられない状態でした、彼女は「私の赤ちゃんはどこ！ 私の赤ちゃんはどこ！」と何度も何度も叫ぶし、「私の赤ちゃんを捜して、どうしても取り戻して、私に赤ちゃんを取り戻して、私はこんな状態では生きていくことはできません、」と叫ぶのです。

数か月が過ぎました、また、ジムは大きな変化が世界の出来事に起き始めている事に気づき始めました、そして今の彼に取って母親のバイブルは彼女の他の何より近く感じさせました、彼は聖書を自分の家に持ち帰り、聖書の中のダニエル書と黙示録を何度も何度も読み返しました、昔彼にとって一見むずかしそうに見え、現実のものではなかった聖書の預言も今は現実のものとなり、事実ははっきりと理解されるものになっていました、平和と繁栄の国家に住んでいたころの時代、彼には簡単には想像することができなかつたのです。

事態がどのように変わって行ったか！それは驚くべきことでした、罪の人が現れ世界全体の地球へ平和をもたらしました、苦しんでいた国民、民族および国家は彼のその人格、そして驚くべき知識と能力を受理することを実際に切望しました。多くの人の目には、彼は世界が長い間必要とした待ち望んでいた人のようでした、

しかしジムは、それが偽りの平和であり、長続きしない本物ではないことを知っていました、それはダニエル書の中に平和の名によって彼は多くの人を破壊するだろうと書いてあったからです。

しかし、現実には長い間、解決されなかった国家の問題は解決されようとしていました、偉大な政治家が解決することができなかった問題は、今や天から下って来た、この神の子と呼ばれる「驚くべきスーパーマン」によって短い間に今解決されていきました、それは彼が多くての奇跡的な仕事を成し遂げていたからです、ユダヤの人々は、彼のために命を投げ出す準備ができていました、それは彼らが長い間、彼らの購い主を待ち望んでいたからであり、この人物が彼らにとってのユダヤの救世主だと確信したからでした。

誰も彼のことを公に非難する勇氣はありませんでした、なぜなら、そのようなことをした人々には不思議なことが起こり、家は夜に燃えてしまったり、地球上から突然のように姿を消してしまうような事が起きていたからです、それは彼らがこの人物が神の子であるはずがないなどと大衆に言いふらしていたからです。

ユダヤ人は世界で最も幸福な人々となりました、彼らの寺院は再建され、彼らはその中で礼拝し、古い時代のようにささげものをするのができたのです、彼らは栄光の頂点にありました、なぜなら、この偉大な人が地球のすべての民族の中からユダヤ人に好意を示していたからです、彼は自分のために何も求めませんでした、それよりも彼は人々に略奪品を分配し分け与えました、どうして彼が自分のために物を求めるでしょう！ 彼は神の子なのです。

数か月が過ぎた後に、多くの人々はラブチャーが現実起きたことすら忘れるようになりました、しかしジムはそうではありませんでした。

どのように時が過ぎても彼は自分がどれだけ愚かであり、なぜ、キリストの十字架を真剣に受けることができなかつたのか、その痛みと苦しみは消し去ることが出来ませんでした。

ルシールはある朝遅く起きて、このように言いました、「ドクター・ウィルソンを呼んでください、また病気の再発が起きているのです、すぐに医者に来てもらわなければ、私の命が長くないような感じがして来ました。」

ジムは深くため息をつき、また重い心で彼は電話に急ぎました、彼はルシールを失うことができなかつたのです、今の彼にとっては彼女が彼に残されたすべてのものだったからです、彼女のいなくなる人生を彼は考えることができなかつたのです。

震える手でジムはレシーバーを取りドクター・ウィルソンに電話をしました、電話のベルは12の数を打ち、彼はもう少しであきらめるところでした、その時に荒々しい声が受話器の向こう側から「ハロー」と聞こえてきました。

「ドクターウィルソンのオフィスですか？」ジムは仕事で使う言葉のように話しました。

「その通り、私です、」と荒い声が返ってきました。

ジムは一瞬、その声に驚いたが、自分を取り戻して「ドクター、ひどい風邪をひいているのですか？ いつものあなたのような声ではないのですが、何か、あったのですか？」

「何も変わったことはありません、」彼はきびしい言葉で返答しました、「これ

まで私は私の人生の中でこんなに気分がよくなったことはありません。」

「ともあれ、聞いてください、ドクター、ルシールがまた悪い発作を起こしたようで、出来る限り急いで来てください、お願いします。」

医者は何の遠慮もなく尋ねた、「ジム、マークを持っていますか！」

その質問で、ジムはほとんど受話器を落としそうになった、マーク！ おお神様！ 獣の刻印！ 彼の心は強く連打し始めた、また彼の唇は無感覚になってしまいました。

およそ一分ほどの沈黙があり、次に医者は尋ねました、「ジム、あなたはまだそこにいるのですか！」

「はい、私はここにいます、」ジムは弱い声でやっとのことで彼に答えた。

「さて、遠慮なく言いますが！ あなたはセキュリティのマークを持っていますか？」

「ドクター、あなたの言っているのは獣の刻印のことですか？」ジムは息を切らして尋ねた。時間は動き続け、部屋にある大時計はかちかちと大きな音をたてていた。

しかし、その音は医者のかき消すことはなかった。

「その通り、ある人たちはそう呼ぶ人もいます。」

ジムは「マークを受け入れてはいけません、ドクター・ウィルソン！」と叫びました。「ドクター、そのマークをとらないでください！ それは永遠に救われる事のないしるしのマークです！ その刻印をとれば、神からの救いを永遠に受け入れる事ができません、あなたは、地獄からの悪魔と同じようになるのです。」

「それは一体どういう意味だね、ジム！」とドクターは荒々しく彼の話を中断した、「あなたがそんなふうに話すこと自体が危険であることを理解しませんか、それは神をけがすことになるのですよ！ 私はそのような意見を述べるようなあなたを警察に引き渡し政府はあなたを死刑にすることができるのです、ですから、これをあなたに対する警告として受け取ってください。もちろん、私は、あなたが非常に恐ろしいと思うマークを持っています。」彼は自慢げにそれを告白した。

「昨日の夕刊を見ませんでしたか、それとも、テレビで伝えていたニュースを聞きませんでしたか！ すべてことが昨夜の12時から変わったのです、もしこのマークを与えなかったならば、物を買うことも売ることもできません、もしマークを受け入れて政府に登録しなかったら、私はこの朝、私自身のオフィスを開くこともできませんでした、私の看護師でさえは私の仕事をする事ができませんでした、彼女はそのマークを今、取りに行っています。」

「愚かにならないように、ジム、私はあなたをいつも常識的に物事を考えることのできる人だと考えていました、あなたも知っているように私はあなたに悪い助言を与えたことなどありません、私はあなたを私の人生を通して知っているのですから、私はあなたがこの世に生まれて来る時にもそこにいて、あなたの母を助けて来ました、私はかつてあなたに間違ったことを示した事があったでしょうか！」

ドクターは語り続けた、「私は今までこれほどに精神的に落ち着いた気持ちになったことはありません、このような薬を見出したこともありません、いつもなら、この朝の時間帯には神経過敏になるのですが、それも全く感じません。」

「それはちょうど第二次世界大戦の時代の時に似ています、人々はその当時、配給される本を使用しました、しかし、今、それがセキュリティのマークです、これはあの時のものよりも簡単でシンプルです、このマークのない銀行からお金を引くことができず、食料品を得ることができません、とても良いシステムだと思っています、と同時に、あなたも知っている通り、このすべてのシステムに逆らうことはできません、これは現代の最もポピュラーなものですし、あなたも時代遅れになりたくはないでしょう、あなたもこの時代に取り残されることなく、頑固にならないでマークを受け取りなさい、もちろん、いくらかの人々はしばらくの間、ヒステリックになります、しかし、それもしばらくすると落ち着くものです。」

「彼らはすでに市のいたるところでオフィスを作っています、私は、今朝、町へ来る時もあなたの家から近いところにそのオフィスを建てているのを見ました。」

「私はあなたがマークを受け入れたらすぐにでもあなたの家に喜んで行きます、しかし、あなたがマークを受け入れないのであれば、私はライセンスを取り消されてしまうでしょう、私はさらに生活自体を失うかもしれません、私たちはマークを持っていない者に対して大臣から直接に厳しい法律を与えられたのです、これが今の状況です。」

「愚かにならないで、あなたとルシールがマークを受け入れ、それから私の所に電話をしてくれるなら、私はすぐにあなたの家に向かいます、そのような簡単な手続きをして彼女に医療扶助を与えることができるぐらいの愛をあなたは奥さんに対してもっているでしょう、！」

冷たい感じの声で、ドクター・ウィルソンは電話の受話器を切った、ジムは当惑の中で電話の前に立っていました、彼は本当にこれらのことを言ったのだろうか！私はそれを確かに聞いたのだろうか！

ジムは自分の手を強く握り締めて、深くため息をついた、

悪魔の完全とも思えるわざを彼は目の前で聞いたのです、

私は一体どのようにしてマークを取らずに、ルシールのために医療扶助を得ることができるだろうか！私は何としてもその方法を見つけなければならない、道は確かにあるはずだと彼は思った、ただその道を見つけ出す事ができるならば。

その会話は、ジムの気力を失わせてしまいました、また彼は、急いで病気の妻のもとに帰らなければならない事を忘れてしまっていたのです。

彼の心は罪悪感でいっぱいになりました、もしも、このような事になる前に神の御前に罪を悔い改めていたなら、この苦難の道をむかえる様な事はなかったのにと考えた、その瞬間、突然のように、彼はルシールの部屋から何か、刺すような叫びによって現実にもどされました、彼はたいへんな苦悩のなかにいた妻の枕元に急ぎました、彼女の額からは汗が顔をおおうようにして流れ、また彼女の唇は紫になっていました、彼女はうめき声をあげないようにしていましたが無駄な努力のようでした、その時ジムは、もし彼女のためにしなければならぬことがあるならば、一刻も早くしなければならぬことを悟りました、そのために残されている時間はすでになかったのです、しかし、彼の脳は無感覚となり、考える事すら拒否しているようでした。

「私の神！私をあわれんでください、」彼の目には涙がいっぱいになっていた、

彼は何度も昔のように祈ろうとしたが祈りが祈りとして出てきません、悪魔の暗やみの力が彼を取り巻いていて悪魔が彼をあざ笑っているようでした。

地上はまさに悪魔の手にゆだねられていくようでした、彼は、このような時が来ることをはっきりと知らされていたにもかかわらず、他の多くの人々と同じように、そのことを真剣に考えたことはありませんでした。

「ジム！」ルシールはうめくように彼にたずねました、「お医者さんは来てくれるんでしょ！」

ジムの心臓の動機はどんどんと早くなっていった、どのようにして私は彼女にこのことを伝えることができるだろうか！ また、どのように彼女はそれを受け入れるだろう！彼女は非常に感傷的になっているし、全くの無力の状態なのに！

彼は考える余地もなく、叫んで言った、「彼は来ません。」

「お医者さんが来ないって、どういうことなの！彼はそこにいなかったの！」と彼女は叫びました。

「彼はそこに、、、」ジムは口ごもりました、「ルシール、何だか事態が一夜で全く変わったようなんだ、人々は、医療扶助を得るために今、お金に加えて何かを持っていなければならないみたいで、何かを必要としているんだ。」

このような話は彼女にとって意味が分からなかった、また、ジムは彼女が理解していないことがよく分かっていた。

「思い出して、昔の第二次世界大戦中にあった話のようにある食品などは配給でないと私たちの手には入らないものがあつたことを、たとえば、缶詰など、そして肉、砂糖、タイヤ、自動車、建築資材などもその一部だった、現在、そのため私たちは配給される物のために必要なカードを必要としたりすることはなくて、ただ、獣の刻印を必要としているということ、ジムはそのことばを口にした時、冷たい風が吹いたような気がした、しかし、ルシールには、その危険さは全く届いていなかったようだった。

病気のために疲れ果てた彼女の目は小さな子供が助けを求めるようにジムを見つめていた、そして、彼女は「私たちには、その刻印を手に入れるためのお金がないの！ジム」まさかの時のために備えて蓄えていたお金があつたでしょ！私は今までに医者が必要としたことがないほどに彼を今、必要としているの。」

ふたつの大きな涙が落ちて、シーツにしみ込みました、「私には今どうしても医者が必要なの、」と彼女はジムに泣き求めました。

ジムは自分自身を痛めるほどに心で苦しみました、これは彼にとって信じられない現実でした、クリスチャンの母を持ち、正しい主の道を教えられていながら、また、主にあつて正しい牧師が彼にどのような苦難の時代が来るのか、何度も伝えていながら、この恐ろしいほどの苦難を誰もこれほどまでに現実のものとして伝えることは出来ませんでした。

「ルシール、お金じゃないんだ、それは無料、その通り、お金じゃないんだ、ドクターはお金のことは何も言わなかった、ただ私たちの自由がすべてがかかっているんだ、そのために必要なものは、私たちの魂、生きた魂なんだ。」

ジムは腰を少し曲げて彼女に近寄りました、そして「ルシール、あなたは魂を悪

魔に売ってこの刻印のしるしを手に入れなければならないんだ、それから後、あなたはもう二度と母や子どもに会うことは永遠にできなくなるんだ、もう二度と生きた神を見出すことはできないし、この世の憎悪と混乱の中に捨てられてしまうんだ。」と言った。

このように話す事によって彼は彼女が獣の刻印を受ける事の危険性を悟るだろうと思いましたが、ルシールは理解しませんでした、それどころか、彼女は苦痛のために何とかしてこの痛みから抜け出そうとする気持ちでいっぱいでした。

「ルシール、私は私たちが蓄えていたすべてのお金を使ってでもあなたに医者のお助けを与えるでしょう、でも絶対に私たちの魂を売ることはできないし、悪魔のようになることはできないんだ、私たちはたいへんな苦しみに会っているけれど、もし刻印を受けるような事になれば、永遠に幸せになることはできなし、希望は永遠になくなってしまふ、可愛いスーをなくし、母を失っただけでたいへんな寂しさを受けたのにこれ以上苦しむことはできない、何か他に必ず道があるはずだ、時を少し待って考えてみよう。」

ジム！彼女は必死になって床から起き上がり、「私はあなたにとって良い妻ではなかったの！ 私は子供に対して良い母親ではなかったの！ もしこれがあなただったら、私は喜んであなたのために何でもするでしょう！ ジム、あなたはそれが信じられないの！」

彼女は弱った体を立て直し話し続けようと努力した、彼女の黒髪は部屋の中のあかりできらめいていた、彼女は弱々しく全くの無力でした、彼はこのような彼女をどうして拒むことが出来るでしょうか！ 彼は彼女をとっても愛していたのです、彼女はたしかに良い妻でした、彼女はキリスト信者の妻ではありませんでしたが、ジムはそのことで自分たちが取り残されたことを彼女に対して非難することはできませんでした、彼こそがキリスト信者の夫であるべきであり、彼女をリードして彼女の前で敬虔なキリスト信者の生活を送っていたなら、彼はおそらくこのすべての苦難から彼女を救うことができたに違いなかったのです。

彼は彼の人生のうちで最も大きな決断を迫られていました、今の彼にとっては獣の刻印、そのマークを受け入れる以外に他の方法を見出すことはできなかったようです。

「大丈夫、ルシール」彼は柔らかく震える声で最後に言いました、「私はすぐに戻ってくるから、あなたは心を休ませて、もう心配しないように、私はできるだけ早くあなたに助けを呼んでくるから。」

ジムは体を彼女に近づけて額の上にキスをしました、彼の涙は彼の頬を伝わって彼女の顔の上に落ちました。

それからジムは母親の聖書を手にして、それに目を通し始めました、その聖書にはすべて主の2度目の来臨の箇所にはしるしがつけてあり、ジムの思いは母親がいつも彼のために祈り、そして手遅れになる前に私に主の来臨のための準備をするようにと語っていたことを思い出し、彼の眼からは涙が落ちた。

時が過ぎて、主の2度目の来臨は彼の母親が信じ、そして祈った通りに現実に取り残され、彼自身の魂を悪魔に売ろうとしているところでした。

「私の神」と彼はつぶやき、「私を助けてください、どうか私を神様、助けてく

ださい」と繰り返し祈った。

彼は母親の聖書を手に持ち、その黒いカバーの上にキスをして最後の別れを告げようとしていた、もし彼の母親がここに生きていたら、彼にどのようにすべきかを教えることができたのに、と彼は思った、彼の母親はいつも難しい困難な時になすべきことを知っていたからである。

最後に彼は今までの思い出を惜し消すかのように母親の聖書を手放した、そして上着をつけ正面玄関を開き扉をあけて外に出た、彼の心はもはや定められていたのです、彼はどうしてもマーク（獣の刻印）を受けなくてはならない、何という恐ろしい状態に彼は追い込まれたのでしょうか！ もしそれが足、または目、両腕であったとしても死を覚悟することができたでしょう、しかしそれは彼の魂そのものの代価がかかっていたのです、彼はいつの日か天国へ行くことを心のどこかでいつも望んでいたのです、しかし今彼は永遠に望みを断ち切れ地獄への扉を開けようとしているでした。

ゆっくりと彼は道を歩き始めた、そして彼の思いの中に自分の母親が彼のために祈ってくれている声が聞こえてくるような気がしました、彼の心は悲しさと後悔でいっぱいでした、もうすでに時は遅すぎたのです、それらのチャンスを再び呼び起こすことはできないのです、彼は今その現実の真ただ中に直面していたのです。

そのような時にジムは何か近づいてくるのを感じました、ひとりの人が近づいて来るとともにジムはその人の顔を見たとき、彼はこのような人を人間として今までに見たことがないと思いました、目は針が燃えているような火の形をしてジムを直視しました、彼の額の上には奇妙なマークがあり、それは獣の刻印を意味していました、その人が通り過ぎた時、彼はまさに悪魔そのものの存在感を感じました、彼は今、その人がしたことと同じことをしようとしている自分を見て深くため息をつき、自分が今しようとしていることをもう一度考え、ジムは身震いしました。

それからジムはフェアビュー教会の近くに来た時、彼はもう一度この教会に立ち止まりたい衝動を感じました、建物は暖かい歓迎を表すようなステンドグラスで、昔の時を彼に思い出させました、彼は静かにドアを押し開けて教会の中へ入って行きました、彼はゆっくりとその中を歩き、彼は何度もここを歩いたことを思い出していました、彼のこの教会に対する気持ちは今までになかったほどに繊細でした。

彼は母親がよく使っていた教会の席の前で立ち止まりました、彼の眼からは再び涙がこぼれ出しました、彼の心は昔の思い出でいっぱいになりました。

何百という多くの人がこの祭壇で真実に心からイエスを受け入れて勝利を得たことでしょう、その多くの人々たちは神に対して真実であり、ラブチャーの瞬間には主とともに天の御国へ旅立ちました、彼は祭壇でひざまずきましたが今の彼にはなぜか！ 祈りの霊、神の存在を感じることはできませんでした、暗闇の力と悪魔の力が恐ろしいほどに彼をとりまいて祈りのことばすら見つけることができませんでした。

彼が今しようとしていることの重荷は何にも比べるこのできないほどに彼を悲しませ彼はほとんどそれに耐えることができませんでした、彼は教会の扉を閉じてもう一度振り向いて建物を見つめました、彼の眼からは涙が止まらず目がかすみましたが、それから彼はすばやく向き直って教会のステップを走り抜け、自分自身の

魂を売るためにそのオフィスに向かって走りました。

その時、ニック(ジェークのステーションのオペレーター)はバート・ミルのガスタンクにガソリンを車に満たしていました、その時ジムはニックの額に獣の刻印を見ましたがバートの額にしるしのマークを見つけることができずに少し驚きました、もし医者が言ったようにすべてが冷凍しているならば、なぜ彼はガソリンをマークなしで得ることができているのだろうか！ ちょうどその時、バートは与えられたサービスに払うべき手を伸ばしました、そこでジムはバートの右手の手のひらに獣の刻印を見ました、彼の母親に対する思い出と記憶が教会の思い出とともに彼の頭の中で何度もまわり始めました、彼は(ここでしるしのマークを受け取って下さい)と大きく大胆に黒い文字で書かれている白い建物に向かって歩いていました。

ジムは、ドアの外で数分間、体中が硬直して立ちすくんでいました、彼にこの場所から振り返って帰る勇気があったのでしょうか！ それが彼の心の奥底で真実に感じていたことでした、神の霊が彼の心に問いかけていたのです、しかし、彼はルシールのためにこのことをやり通さなければなりませんでした。

太陽は青い空から輝き、また、鳥は飛び跳ねながら歌っていました、しかし、すべての太陽の光、そして喜び、幸福もすべてジムから離れて行ってしまったようでした。

彼は、全身に震えを覚えながら、小さなオフィスの中へのドアを通過して歩むために最後の勇気をふり絞りました、部屋は、大きな暗い感じの机とその上にひとつの大きな電球があるシンプルな感じの部屋で、重く強そうな感じをもった人がキーンキーンと音を立てる椅子に座っていました、彼の目は火の針が燃えているような感じで、また彼の雰囲気はジムに獣を思い起こさせるものでした、悪魔の力は非常に強く厚さを感じさせるものでジムの膝は震え、彼はもう少しで床に倒れてしまいそうでした、目で見ることができない手が彼をおおいかぶせるように手を伸ばしているようでした、彼が向きを変えて戻ろうとすると、彼の心にルシールの声が聞こえてくるのでした、「もし、これがあなただったら、私があなたのために何でもしてあげるのをあなたは良く知っているでしょう！」彼は、彼女の医者と薬を与える事を約束していたのでした、彼はその事を捨てて彼女のところに戻ることはできなかったのです、どのようにして彼女に言い訳ができるでしょう！ 私はマークを受けない事に決めたから、医者をあなたに与える事はできないと言うことができるでしょうか！

「それは私にはできない、」と彼は小声でつぶやきました、「これは私が払わなければならない代価です、他に道はありません。」

机の後ろにいた人がジムを鋭い目で見て、冷い感じで言いました：

「心配することは何ともありません、私もそれを受け入れる前は神経質で、少し恐れもありました、しかし、恐れはすべて消え去ります、私はあなたたちが聖書(バイブル)と呼ばれるあの古い本のために悩まされているのを知っています、でもそれは単なる昔からの迷信のようなもので、あなたがマークを自分自身で受け入れてみると私があなたに真実を伝えていることを知るはずですが、もう二度と再びその本に対する尊敬を持たなくなります、事実あなた方を恐れさせ苦しめていたその本を憎むようになります、この世の人生の楽しさや素晴らしい時を持つことからあなた

がたを締め出していたものだからです。」

「もうそれ以上言わなくてもいい！」ジムは叫びました、「私をこれ以上苦しめないでくれ、それよりも早くそれを実行してこのことを終わらせよう！」

ちょうどジムがしるしのマークを受けようとしていた時に、ルシールの寝室に死の悪魔が入って来た。

「私は死にたくありません！」彼女は恐怖の中で叫びました、「おお神さま、死なせないでください！ 私は罪深い生活を送りました、私は神などは存在しないと仰いました、でもあなたがいつもおられることを知っていたのです、おお神様、私はこのような状態で死ぬことは出来ません、」

彼女は部屋の中で手を大きく開いて叫びました、「母コリンズ、ここに来て私のために祈ってください、私は死にそうです、もうしばらくすると私は神のない永遠の中に落とされてしまいます！ 私は、あなたが信じていた“いのちの救い”を信じないと言いました、でも本当はそれが正しい事を知っていたのです、聖書がそれをはっきりと語っているからです、ただ私はこの世でバカ者扱いされたくなく、教養のある者になりたかったのです、だからあのような態度をとっていたのです、どうか今ここに来て、私の魂の救いのために祈ってください、どうか私の魂が神を見いだす事ができるように祈ってください。」

しかし彼女の声は部屋の中でエコーのように帰ってくるだけでした、もし母コリンズが彼女の声を聞く事ができたなら、すぐにでも彼女のために救いの手を差し伸べていた事でしょう！ しかし彼女はそれをあまりにも長く待ちすぎているのです、母コリンズは主がこの世から取り去られ、主とともに永遠の中に入られました。

「誰か、私を助けて！」悪魔は私を地獄に落とそうとして私の魂の中に迫っています、彼女は狂ったように叫びました、「私は、地獄の炎を感じています！ 私の魂は迷っています！」その後、彼女は再びそれを叫ぼうとしましたが言葉になりませんでした、彼女の魂ははげしい魂の痛みとともに地獄のさばきを受けるためにその目を上げました、そしてその言葉は喉の中で言葉にならなかったのです。

ルシールの体は静止しました、ただ部屋の中でいのちを感じさせるものは、やさしそうに外からふりそそがれる風だけでした。

その同じ時にジムは、悪魔的な冷たい笑いをもった男の前に立っていました、その男は手に光る道具をもっていました、もしルシールが死んでいることをジムがその瞬間知っていたら、彼はその部屋から走って逃げていたことでしょう！ しかしもうそれは手遅れでした、彼は男の人の前へ右手を伸ばし、「私は準備ができています」と言いました。

それから男はジムのまっすぐに見て、その人は「しるしを額に受けたらどうですか！ そうすれば他の多くの人々を元気づける事ができるようになるんですよ！」と言った。

ジムは彼の歯を食いしばるように答えた、「どうでもいいから早く事をすませてくれ、このマークは誇れるようなものではない、私はこれをしなければならぬからしているだけだ、私には子供のころにすばらしいキリスト信者の母親がいた、」彼はすすり泣き始めた、「私の母は私にこのような苦難の時が来るから、その時のために備えて神に会うための準備をするように私に警告していたのです。」

ふるえる唇で彼は語り続けた、「私は、あなたがこれを何事もないように受け取っている事を知っている、しかし私の言っている事は真実で軽く扱うような事ではない事も真実だ、」と語り続けた、「私は暗やみの中に生きている者ではなくはっきりと真理を知っている、私は主である神が来て神の子たちをこの世から連れ去られた事をはっきりと理解している、あたかも私が正気を失ったかのようにあなたは私を見ているけれども私は私が真実を語っていて、この事が真実であることを何の疑いもなく知っている。」とにかく急いで、そのマークを済ませてくれ、私は妻が医者を得ることができるようになるためだけのためにこのことをしているのだから。」

彼の頬から涙が落ち始めた、彼は彼自身の魂を今悪魔に売り渡しているのです、もはや、母コリンズの祈りは決して神に聞かれる事はなく、イエスの十字架の死は彼には無意味となり、無駄になってしまったのでした。

男は光る道具を持ってジムの手の方へそれを近づけました、彼はもっとジムに接近して来てジムの手のひらの中心に触れるまで来ました、それはジムがかつて感じたどの氷より冷たかったほどに彼の心を突き刺しました、その時何かが彼の心の中に入って来たような感じを受け、ジムの顔色が驚くほどに変わっていききました、そしてそれは魔術のように彼を全く異なる人に変えてしまいました、彼の目はきらめき始め、また彼の唇は冷たい笑いを含み始めました、ジムは人生の中で一度も呪いのことばを語った事がなかったのに、今彼の口から神を呪うことばが出てき始めたのでした、何と恐るべきことが彼に起きてしまったのでしょう！

その後、ジムの妻ルシルにマークを与えるために誰かが305の北のメインストリート（彼らの家）に派遣されることになり、ジムは扉をあけて外に出て行きましたが彼は全くの別人となり狂った人のように天を見上げました、そして彼は神がほんとうに存在するのならば今天から降りてくるがいいと叫びながら、ありとあらゆる神をけがすことばを呼び始めました、彼は完全に悪魔に自分の魂を売ってしまったのです、今の彼は地獄の悪魔によって使われる悪魔の道具と成り果ててしまい、彼の心は聖書と神の民に対する敵意と憎しみで満たされていたのです。

「何と私は愚かで無知な母親を持っていたのだろう！」と彼は道を歩きながら、ささやいた、「私に愚かで無意味な教えを押し付け、私の罪のために誰かが死んで私の罪を救うなどとまったく無意味な愚かな教えを私に植え付け、そのうえ神が天から降りてきて人々をこの世から取り去ってしまうなどと全くのうそを語り始め、多くの人々とともにどこかに隠れてしまい、現実には起こってもいない事を人々に信じさせようとするなんて！信じがたいことだ、そのようなことは起こってもいないし、それはすべて全くのうそに決まっている。」

「彼女は私を全くの迷信の中で育てあげてしまった」、彼は苦々しく語り、続いて彼は叫んだ、「しかし私は今自由になった、今私は自由になった。」と叫び続けた。

彼は自分の頭を振りながら、不気味な笑いをして「私は最後に自由になった、私はこの自由を本当に喜ぶ、私はもはやあの本を恐れぬ、もう2度とあの本を恐れぬ、私はかつてどれだけあの本に悩まされてきたか！どれだけ心配し続けてきたか！」

今彼の心の中には罪の子に対する大きな愛が生まれました、彼は昔、すべての心と意思を持って罪の子である彼を忌み嫌っていたのに、今の彼は彼を愛しているだけでなく、この罪の子を心から崇拝するようになってしまっていたのです、医者であるドクターが言っていたようにマークは現実に「強壯剤」のように本当の力を持ち、オフィスでのあの男が言っていた通りでもあった。

「彼らの言っていたことは正しかった！」とジムは叫びました、「私はこのような静かさと平安を長い間感じたことがなかった、このマークは恐らくルシールの病気を直すだろう。」

彼は手の中のマークを見続け、それを賛美し続けた、彼は歩きながら「男が私に言った通り額にそれを受ければよかった」と声を出して言った、「そうすれば誰でも私を見る者がそれを見ることができたのに。」

ジムの心からは人類への正しい愛と希望は消え去っていましたが、彼は多くの人々がしるしのマークを受けることを心から喜び、マークと獣、すなわち罪の子に対して反抗している人たちに対して憎しみの心と殺意さえもいただくようになりました、彼の心は唯一の神に敵対する者たちに対する憎しみの心でいっぱいとなり、彼の神、獣を受け入れない者たちを生きるに値する者とは考えなくなりました。

ジムは神の民と呼ばれていた人々に対して怒りと憎しみ、そして苦さでいっぱいの心をもって家に帰って来ました、彼は正面玄関を足でけり、荒々しく扉をあけました、そして彼が居間に入るとともに彼の眼がはじめに見たものが彼の母親の聖書でした、その時彼の口から再び神をけがす言葉が出て来ました、彼は母親の聖書をにらみつけ、憎しみと怒りを持ってその聖書をつかみ暖炉に燃えている火の中に投げ込みました。

それから彼は不気味な笑いをうかべながら急いでルシールの寝室へ行きました、部屋の中はとても静かで、彼は一瞬立ちどまりましたがすぐにかすれた声で「ルシール」と彼女の名を呼びました。

ジムは彼女がすでに死んでいることを悟らず、彼女をやさしく揺さぶりました、「ルシール！あなたはすぐによくなるから、もう心配はいらない、あなたが私にすすめてくれた通り、しるしのマークを受け入れることは何と素晴らしい経験だったことか！ 私は本当に新しい人間に生まれ変わったような気分だ、あなたの病気がすぐによくなるから」と彼は愛をこめて彼女に語った、「私はあなたがもし、しるしのマークを受け取ったら、もうドクターウイルソンの薬など必要なくなると思うよ！あのしるしのマークほどの最高の薬は他にはない。」

それから彼は彼女の体がとても冷たいことに気付き、「ルシール！」と彼は叫びました、「ルシール！」しかし、答えはありませんでした、「まさか！私を残して死ぬなんて、あり得ない、私はあなたが絶対に良くなることのできるものを見つけたんだから、絶望と悲しさの中で彼は彼女を荒々しく揺さぶりました、しかしそれでも彼女は答えませんでした。」

「彼女は死んでいる！」と彼は非常に大きな声で叫び、もし普通の正常な人が聞いたらおびえてしまうような怒りを持っていた、彼はこぶしを握り、天に目を向けて神に向かって「あなたがこれをしたんだ！」と言い、あなたは自分を神だと呼んでいるが、あなたは全宇宙の神ではない、神はひとりだけだ、私はその唯一の神を

見つけたんだ、私たちは必ずあなたを打ち滅ぼすと叫んだ、そして荒々しく彼は語り続けた、「あなたは長い間、私たちの人類全体を苦しませて来た、そして多くの人々にあなたは自分を何か偉大なもののように見せて、人々はあなたに敬意を払っていた、しかし今、真実の神が現れ、あなたはその名誉と栄光をはぎ取られ全世界の前に見世物になる、私の言っていることが分かるか！」と狂ったように叫んだ。

彼は自分自身を投げ出すように椅子に坐って、ドアのベルが鳴るまで彼は神に対してけがす言葉を語り続けた、彼はドアを荒々しく開けた、そこにはサム・ファergusという人がしるしのマークを額につけて立っていた、彼の手の中には光る金属の道具のようなものがあり、彼はルシールにマークを与えるために来ていたのだった。

「もう遅すぎた！」とジムは怒りをいっぱいにして言った、「彼女はもうすでに死んでしまった、」その人は荒々しく尋ねた、「死体はどこですか！」ジムは寝室に向って歩きながらルシールの体を引き取ってくれるように葬儀屋に電話をした、ところが葬儀屋はジムにルシールがしるしのマークを持っているかどうかをまず最初に訪ねた、ジムはそのことに驚いた。

「あなたに恐れがありますか？」と聞かれると、ジムは自分の怒りを無視するかのよう「私には恐れはありません、ただファergus氏は彼女にマークを与えるつもりでしたが、来るのが遅すぎてしるしのマークを彼女に与えることができませんでした、彼女がもう少し長く生きていたら、彼女も私と同じように素晴らしい経験をする事ができたのに！」

「私は体にしるしのマークを受けていない人々の埋葬をすることを許されていません、私はしるしのマークを持っていない人々の死体が犬のように埋められ取り扱われることを通知されています、しるしのマークを拒否して我々の神を受け入れない人々には当然のことだと思いますが、あなたが彼女の夫で彼女がそのしるしのマークを望んでいたと確信しておられるわけですね！」

「その通りです」とジムはすぐに答えた、葬儀屋の彼は非常に用心深い人であるかのようにこの仕事を取り扱っていた。

「そういうことであれば、あなたが私たちの神のしるしのマークを持っておられるということですから、私はそちらに行き、あなたの奥さんの死体を受け取りに行きましょう。」

ちょうどその時、サム・ファergus、彼の目がジムのように悪魔のパワーできらめき、ルシールの体が置かれている部屋のドアから出てきた。

「あなたの言ったとおりだ、彼女は死んでいる」と彼は荒々しく答えた、彼は同時に天の神を呪った、なぜなら彼女がしるしのマークを受ける前に神が彼女を死なせたからである、その後彼が去り始めると、ジムは彼を引き止めた、

そしてジムは彼に「とにかく彼女にしるしのマークを入れて欲しい」と言った、「葬儀屋と話しをしたら、彼女にしるしのマークがなければ体を引き取りには来ないと言っていたから」

サムは満足げにルシールの部屋に戻り、彼女の額にしるしのマークを入れた、しかしそれは彼女にとって何の意味もないものであった、なぜなら彼女の魂はすでに永遠に生きた神と切り離されていたからである。

サム・ファーガスが去った後、ジムは暖炉の前に座り、彼が投げ捨てた母親の貴重な古い聖書を取り出した、ジムは悪魔の力によって刺激され聖書の中から一つずつページを裂き、次にマッチでそれらに火をつけ始めた、ジムは神聖な神のことばが燃える炎で滅ぼされていくとともに異常な歓喜で叫び始めた。

「この本が私の心をあざむいたように、もう2度とほかの人をあざむくことがないように、」しかしジムはこの聖書を焼くことができても、彼の心に愛する母を通してきざみこまれた神のことばは消し去ることができないことを理解していなかった、神はこれらのことばを語られ、その中にはいのちがあった、人の言葉は彼らによって語られる、しかしそれはしばらくすると消え去り、忘れ去られる、しかし神のことばは永遠に生き続けるのです。

ジムは多くの呪いの言葉とともに母親の人生の道しるべとなっていた聖書を焼き尽くしました、この聖書は多くの問題を解決し彼女に命を与え、来るべき苦難の時から彼女を救い出す道を示していたのです。

ちょうどジムが神のことばの最後のページを焼き尽くした時に、彼は外の通りから聞こえてくる恐ろしい音を耳にしました、彼の心臓は激しく動き始め、外からは多くの人々の悲鳴や怒鳴り声が聞こえて来るのでした、彼はそれらのことに関して何が起きているのだろうか！と思いをめぐらし始めました。

すると突然のように赤い色をした馬が彼の目に見えてきました、馬に乗った人は黒い衣をまとい、彼の右手には長く、そして鋭く光る剣を持って、それを振り回していました、彼は突然のように現れ、突然のように去って行きました。

急に、最も美しい血の色の馬が見えてきました。

ジムはその瞬間、次には何が起きるのだろうかと思いをめぐらしました、それから彼は窓から離れ家の外に出ました、すると彼の眼に映ったのはあらゆるところで人々が争っていたです、どこでも赤い馬が行った所には争いごと、戦争が起き始めていたのです、それは彼にとって恐ろしい情景でした。

日が経つにつれて、ジムは赤い馬とそれに乗っている人の意味を自覚し始めました、戦争はあらゆる国家に起こり始め、それらはおとぎ話ではなく、現実で本当に起きていることでした。

しるしのマークを受けた人々の心には深い憎しみの心が芽生え始め、彼らの心の中はすべての人にしるしのマークを受けさせる心でいっぱいとなり、それに敵対する者を死に至る罪とまで考えるようになっていました、そのようにしてしるしのマークを受け入れない者たちに対しての迫害の日が始まりました、町のあらゆるところではすばらしく完全な政府を設立するための通知が示され、新しい神（獣）を礼拝する軍隊が形成されることとなり、この新しい政権に敵対する者たちはすべて取り除かれなくてはならないという警告でした。

ジムはその通知のポスターを読み、カルビンハイツにある事務所に登録するために急ぎました、すでにしるしのマークを受けていた人々は多くの人々がそこに到着していました、彼らは大きな部屋に案内されテーブルのまわりで着席しました、そこで話をしようとしている人は右の頬の上に2つの長く深い傷跡があり浅黒く暗い感じの人で彼の眼は悪魔の力できらめき踊っているようでした。

彼は「あなた方は一つの重要な目的のためにここに呼ばれました」と発表しまし

た、続いて彼は「その重要な目的とはあなた方も通知のポスターを見られた通り、新しい政権に敵対する反逆者、または欺く者たちをこの世界から取り除くために呼ばれたのです。」と語った、私たちの目標は一つの政府の下の完全な世界をコントロールし、それを完成することです、俗に呼ばれるクリスチャンとか、私たちの神、獣以外を礼拝する者たちを逮捕して彼らに悔い改める機会を与えることです、そして彼らが私たちの同志となることによって私たちはいつそうこの新しい政府を強くすることになるのです、私たちはこれらに関して決して妥協をせず、愚かな同情もしません。」と彼は語り、「理解しましたか！」と強い言葉で締めくくった。

「人々の心、そしてその考え方を変えさせる方法には多くありますが、この政権を保つことに関して我々は拷問などの手段をあまり残酷であるとは考えていませんまして成功するためには手段を選びません、私たちはこれらの異教徒があわれみを受けずに苦しむことを望みます、あなたがたはこれらに関して多くの報酬を与えられるでしょう、しかしながら一人でもしるしのマークを受けずに自由にさせるならば、それが友だちであれ、または愛する人であれ、あなた方は死に至る罪を犯すこととなります、ですからあなた方はこの仕事に関して個人的な感情や思いを政府が求める目標との間に入れてはいけません、あなた方は自分自身を捨て去り、愛情や同情を彼らに示してはなりません。

さて、あなた方のユニホームを次の部屋で受け取って下さい、そして直ちに我々の任務に就くように仕事を始めてください、彼らはもし望んでいるならば、しるしのマークを受ける時間は充分にあったのですから、しかしながら、今は力を持ってこの任務を全うしなければなりません、あなた方は本給に加えて引き渡すすべての人のために特別のボーナスを与えられるでしょう。

「それですべてです、あなたの制服を受け取るように」と彼は命じて部屋を去って行きました。

ジムは人々のあとについて彼自身の制服を受け取り、その金のボタンをはめて制服を着た時に彼は自分自身を誇りに感じました、そして帽子をかぶり獣のしるしのついたスリーブとともに銀のバッジを彼のコートの中の左の折り襟に顕著にピンで留めビースト（獣）の政権の一部として認められました。

人々がすべて制服を着けた後に、彼らは獣の政権の宣言を行うために始めの部屋にもどるように命じられました。

人々の準備がすべて整ったときに指揮官は彼らの前に立って「気をつけ」の姿勢を命じ、「私たちの神のイメージから目をそらさず、あなたの右手をあげて私のあとに続いて言葉を繰り返すように」と言いました。

彼らは命じられた通り、厳粛に従順にそれを行いました、それらはすべて一致して一つの言葉として続けました、

「私は B e a s t（獣）の名によって誓います、私は欺く者と反逆者、裏切り者をこの世界から取り除くことを私の全力を持って実行します、私たちの神以外のものを崇拝、又は礼拝する者を自分自身の血を注ぎ出しても彼らを改心させ、私たちの神に立ち返らせることを行い、もし彼らが B e a s t（獣）を受け入れない場合は彼らを死に至らしめ、あわれみを与えず彼らが降参するまで投獄させ苦しめることを任務とします。」

「手をおろしなさい」と指揮官は強い言葉で語り、「今、私たちは最後のステップに来ました、」と言って近くのテーブルの上にある金色のピッチャーから彼はダイヤモンド、サファイアなど他の宝石で覆われた金色の器へ赤い液体を注ぎました。

そして彼はこのように語り始めました、「これは昨日死んだクリスチャンの血である、彼は自分たちの信仰のゆえにB e a s t（獣）私たちの神を受け入れず自分の命を失ったのです。」と彼は誇らしげに語った、「あなた方にこの血が与えられる時に獣の名によって一口ずつ飲み、それによってあなた方はすべてのクリスチャンおよび同調者、支持者などの血を求めるようになるでしょう。」

彼らはすべての準備を終えて銃を持ち、剣と金の鎖からぶら下がるホイッスルを持って完了し、いま彼らはすべての栄光と誉れをB e a s t（獣）に返す準備ができたのです。

彼らは急いで部屋から出ていき、新しい政府に仕えることを喜びとし、彼らは家から家へとするしのマークを持っていない者を探しはじめました、新しい政府によって始められたB e a s t（獣）による新たな動きが今始まりました。

多くの男性および女性がしるしのマークを持っていないことによって拘束され、マークを受けることを強制されました、彼らが拒絶した場合、虐待者はそれらの血なまぐさい仕事を始めました、遠く離れた建物の影の中でそれらの出来事を見守っていたしるしのマークを持っていない人々は現実にそれらの恐ろしい場面を目撃し大変な驚きと恐怖が彼らを襲いました。

人々の中でラブチャーが起きた当時、真実のクリスチャンではなかった人たちがこれらの恐ろしい出来事を目前として神の御前にへりくだり彼らが真実の神の前に罪を犯していたことを悔い改め、神からの罪の赦しを求め始めました、一度救われていながら罪に戻った人々、そして真実の神の知識を知っていながらも罪人であった人々は今これらの出来事を目の前にして必死になって真実の救いを求めました、今これらのすべての人々は自分自身の血をもって真実の救いを全うしなければならなくなったのです。

一見大胆なように見える人々が死につながる拷問へと導かれた状況は実に悲しくみじめなものでした、鉄の鎖のようなものでつくられたものは異教徒を火で焼く目的で組み立てられていました、ある人々は神の聖者が火で焼かれ焦げてゆく過程を見て耐えることが出来ませんでした、その声は挑戦的で「私は決して獣を拝むことはしない、天におられる唯一の神だけが私の神であり、私はその神だけを礼拝する」

火やぶりにされるために彼のまわりには多くの木が積まれました、「しるしのマークを受けますか！」彼の答えはひるむことなく「絶対に受け入れません」でした。

その後にガソリンが彼の体を含め多くの木に注がれました、そしてもう一度最後に彼の信仰を変えるようにと促されました、しかし答えは依然として変ることなく「絶対に受け入れません」でした。

その瞬間、処刑を行う者が火をガソリンに注ぎました、火は神の聖者を取り囲み、すさまじい光景が始まりました、彼は自分の声を押し殺すかのように耐えていましたが制御しがたい金切り声はしばらくすると消えていきました。

悪霊に取りつかれた人々がそれらの恐ろしい光景を見ようと集まり、獣に誉れと

栄光を与えている時に真実の神のために命を失った魂は天使たちに見守られ神が建てられた都に運ばれていました。

ジュリアナケトナー、若い少女でおよそ 17歳ぐらいの子が人々の前に引き出され B e a s t (獣) のイメージを崇拝するように強制され自分の命を救う機会を与えられた、しかし彼女はすすり泣きながら「私はそのイメージを拝みません」と答えた。

彼女はまもなくバーベキューにされる豚のように、重いワイヤーで備えられた柱に縛り付けられました、火がつけられ炎は高くのぼり上がりました、そのとき彼女は全力を持って戦い自分自身を解放しようとしたのですが、燃え上がる炎は彼女の体がなくなるまで燃え続け、彼女の戦いは一見無意味なように見えました、彼女の金切り声はエコーとなって響き渡り、再び反響しました、かげから見ていた者は彼女がガードマンに囲まれていたので助けることもどうする事も出来ませんでした。

多くのクリスチャンは全くの無力となり B e a s t (獣) の政権が率いる軍隊によって生きたライオンが獲物をさがして吠えている穴の中へ投げ入れられました、そして彼らはその恐怖の中で彼らの信仰を悔い改めて B e a s t (獣) を崇拝するように促されました、しかしほとんどの答えは、獣を受け入れませんでした、兵士たちはつながっていたライオンを解き放し、それから悲痛な金切り声が再びエコーのように響きわたりました、しかしその声もやがて消えていきます、ただ自分の食事を奪い合う野生のライオンのうめき声だけが聞こえるだけでした。

さて聖書において赤い馬は戦争と争う心を現わし、その後の黒い馬はこの世の中に飢きんが来ることを現わします。

美しい黒い馬の乗り手が地球を駆け巡りすべてをまわり尽くすと飢きんは世界中に始まりました、人々は何千という数によって飢えていきました、街はそこらじゅうに飢餓で死んだ人々の遺体で散らかってしまうほどのすさまじさで、それは吐き気をもよおさせる光景でした、毎日の朝早く死体は拾い上げられ、遠方に持ち運ばれ捨ててしまわなくてはならない状況にまで至ったのです。

母コリンズは、その昔ジムに聖書の列王記にある話でサマリアがどのように閉じ込められたかに関して話を伝えたことがありました、誰も都市の壁の外に出て行くことができませんでした、また誰も中へ入ることもできませんでした、敵(シリア)はそれらを囲み込み都市の人々は餓死していたという話です。

そこにはふたりの女性がそれぞれの息子を持っていました、ひとりの女は他方に言いました、「あなたの息子を今日私たちに与え、食べて私たちは生きのびよう、そして明日は私の息子をともに食べて私たちは生きのびよう」それで彼女たちはひとりの息子をなべに入れ沸騰させ食べてしまった、翌日、しかしながら別の女は自分の息子を守り遠くに隠してしまった、前日自分の息子を殺した女は王に会いに出かけて行き彼に彼女の話の話を伝えました、しかし、年を取った王は彼女を助けることができませんでした。

ジムに彼の母親(母コリンズ)は、「それは恐ろしい物語です、しかしそれよりももっと恐ろしい事が起きる時が来ます」と教えていました、「聖書はその時のことを伝えています、それはラブチャーの後に来る苦難の時代のことです。」

ジムは人々が空腹のあまり人肉を食べるのを見たのです、それだけではありません

ん、虫やうじ虫、へびやネズミ、食べることのできるものはすべて食べていたのです。

Beast（獣）の政権の力は非常に強く、一見 真実の神はこの地上に起きていることに関して全く目をそむけているような感じでした、食べ物を得ることができない人々はどうする事も出来ず、しるしのマークを受け入れるために（獣）のオフィスに入って行っていたのです。

第9章

ヘスターは苦難の時が始まって以来、始めの数か月はとても苦しい時期を経験しなくてはなりませんでしたが、災害は至る所で起こり、恐れが彼女の心を休むことなくおそって来ました、ラブチャーが起きた時の数日は彼女にとって耐えることができないほどでした、ナンシーを始め多くの彼女の最も親しい友達とははや彼女とともにはいなくなったのです、彼女にはそのチャンスがあり、そしてその準備もできることができたのという考えが、何度も何度も彼女の思いを通り抜けました、そのようにして過ぎてゆく1日が1週間となり、どんどんと時間が過ぎて行きました。

夜は彼女にとって眠りに入るまでに数時間かかり、まして彼女が眠りに入った後でも彼女がラブチャーに取り残されたことを絶えず夢見みていたのです。

アラベスタトリビューンという新聞に最初に反キリストの写真が現われた時、ヘスターはそれを見て身震いしました、彼女はその顔の中に何か異常なものを感じ、その眼からは不思議な力で人々を影響する何かを感じ取りました、その影響の力は彼女を頭の先から爪先まで震えさせました。

その時、恐ろしい考えが彼女を襲いました、時が来るとこの反キリストが自分が本当は何者であるかということと全世界に知らせる時が来るはずですが、そしてしるしのマークを受けていない人々、特にクリスチャンは拷問を受け、もし(獣)のマークのしるしを拒否するならば、たしかにそれは彼らにとって死の宣告となるはずですが。

死！それは真実の神に会う準備ができていない人々にとっては恐ろしい言葉でした、ヘスターは知識はあっても真実の唯一の神に合う準備、すなわち死ぬ準備はできていなかったのです、ましてしるしのマークを受け入れることは絶対にできません。

彼女は心を奮い立たせ強い決意で彼女が好きだった教会への通りを歩きました、そして彼女が建物に入った時、涙は彼女の目から流れ落ちました、この教会で彼女が求めたものは誰かひとりでも彼女のためにいのちの救いを祈ってくれる人でした、しかしそこには誰もいませんでした。

考えてみるとあの当時、私をいのちの救いに導くためにどれだけの人が私を助けようとしてくれていたことでしょうか、彼女の眼から再び涙が流れた、それなのに私はなぜ！なぜ！神のみことばを信じなかったのだろう！ 私はあの当時、私には充分の時間があると思っていたのに、悪魔は私の心をあざむいて私はそれを信じてしまったのです。

ヘスターは祭壇の後ろに立ち人々の救いのために多くの説教がここから語られていたことを考えていた、彼女はそこで聖書を開き1ページずつ読み始め、讚美歌を思い起こし、いのちの救いに導く歌を心に思い浮べた、涙は彼女の頬を伝わって流れ落ち、彼女は知らない間に祭壇の前にひざまずき祈っていた。

「おお、神様、私はあなたに対して罪を犯したことを知っています、」と叫びました、そして「私は、あなたのひとり子(イエス)に会うための準備をしなかったことを知っています、私のあやまちをお赦しください、」彼女はよろめきながら「私はあなたのみことばを今読んでいます、そしてあなたがあわれみ深い神であるということを読みました、神様！どうか私の魂を救ってください！」

彼女の魂の敵である悪魔は彼女のそばでささやきました、「神はあなたのことをもう気にかけてはおられない、あなたの魂はもはや2度と救われることはない！」しかし、彼女は祈り続けました、彼女は何としても主である神を見い出さなくてはならなかったのです、彼女はもはや彼なしでは生きていくことができませんでした。

その時、突然のようにその暗やみから光が輝きました、彼女の心から突然のように重荷が取り除かれ、彼女の心の中から光が羽根をつけて湧き上がってくるようでした、その瞬間彼女は神に対して「グローリー、神に栄光を」と叫びました、その通り本当にそれは神を見つける栄光だったからです、彼女はそれに値する者ではなかったにもかかわらず唯一の神は彼女を赦されました。

彼女は目から涙をぬぐい彼女がかつて一生のうちで感じたことのなかった魂の安らぎを感じながら神の家（教会）から歩き去りました、彼女のまわりには多くの問題があり、恐れや苦痛がありました彼女の心の中にはとても深いところで解決された平安があったのです。

さて、フランクとスーザンはラブチャーのことで完全に生活が崩されてしまいました、フランクは毎日のようにナイトクラブに通い続け、起きてしまった恐ろしい出来事を必死で忘れようとしていました、クラブを去った後に彼は帰宅し部屋へこっそりと入りドアをロックして神のみことば（聖書）を読みつづけ、何がこの地上に起きているのかを理解しようとしていました、特にヨハネの黙示録の中にある神の裁きについてです、しかし現実はただただその苦難の時が始まったばかりで彼の未来には大変な苦しみが待っていたのです、彼はひざまずいて祈ろうとしました、何としても彼は神を見つけなければなりません。

さて、スーザンの遊び友だちはあたかも何も起こらなかつたかのように生活を受けようとしていましたが、事態は同じようにはすすんで行きませんでした、彼女たちの中には主の2度目の来臨（ラブチャー）のことを頭の中から消し去ることができずにいました、しかし他の人々はそのことに関して心を冷たくしたのです、彼女たちの中にはラブチャーという言葉が出てくるたびに怒りを示し言い争いを続ける人がいました、それらのことによってスーザンの遊び友だちは徐々に集まることもしなくなつたのです、しかしそれはスーザンにとって逆にほっとする結果となつたことも事実です。

ある夜のことで、フランクとスーザンが外出して家に帰ってきた時、ヘスターは居間の中で彼女のお父さんとお母さんのいのちの救いのために祈っていました、それに気づいたフランクとスーザンは彼女の邪魔をせずに部屋を歩いて爪先で歩くつもりでドアを静かに開けた時、部屋の中から神の霊が彼らを包み込み、彼らは知らない間に床にひざまずいて神のあわれみを祈りはじめました、彼らの祈りはヘスターを通して現れた神の力によって現実の祈りに導かれ、ヘスターの祈りとともに彼らはいのちの救いを見いだしました、彼らの中から神への不信仰は消え去り救いの喜びが彼らの心の中に入ってきました、彼らが唯一の生きた神を見いだしたからです。

さて、日々の新聞は毎日のようにBeast（獣）のすばらしい功績でいっぱいでした、彼は偉大な力を持ち、多くの奇跡を行ない彼にはますます多くの人々が支持するようになり、彼が神の子だ！というステートメントを始めた頃多くの

人々は冗談のように考えていましたが、現実的に素晴らしい行いが伴う時に何千もの人々が今確信しており、Beast（獣）の信奉者になっていったのです、

さてユダヤ人はイスラエルをあがなうべき人が偉大な力を持って来ることは悟っていましたが、彼らが待ち望んでいた購い主がこれほどの力を持っているとは考えてもいませんでした。

そのような時にヘスターは新聞の見出しにユダヤ人との間に結ばれていた契約が壊されていることを知りました、彼女にとってそれはとても恐ろしい出来事でした、多くの奇跡を備え世界を驚かした偉大なスーパーマンは、今、ユダヤ人の神ではなく、彼らのキリスト(イスラエルの購い主)ではなく世界のすべての民族の神であることを主張し始めたからです。

そのためユダヤ人は、彼がユダヤ人のために多くのことをしたにもかかわらず、このことよっての彼を見捨てました、彼はほかの誰よりも多くのことをユダヤ人のために成しとげました、エルサレムに壮大な宮を組み立てて先祖が古い時代にしたようにささげものを提供することを可能にしました、そうした状況の中でレポーターの取材記者はBeast（獣）に対して同情する人々も出てきたと発表した、それはすべてのことが彼らの思うように進まなかったことでユダヤ人が不満を示したというのである、しかしBeast（獣）は会見で彼らユダヤ人は必ず私のところに戻ってくる、彼らは私なくしてあらゆる状況を正しく保つことはできないだろうと語りました。

しかしヘスターは、真実は反キリストが最初からユダヤ人の心を欺き、自分自身が彼らの贖い主（キリスト）であるかのように行っていたことを知っていました、今、彼らユダヤ人の目は開いて真実を悟るようになったのです、もはや彼らは暗みの中にはいません、彼らは今、反キリストの真実の姿を認識したのです、Beast（獣）の真実の姿とはまさしく聖書の語る滅びの子（不法の人）その人です。

私は、その後に反キリストから逃れる彼らの顔に拷問と恐れを持ったユダヤ人の写真を見ました、反キリストが自分を明らかにした時、彼らが感じていたに違いない恐れ、それらは真実のキリストが彼らの先祖によって責め苦しめられたことを悟り始めたことです！ 彼らはこれらのことを通して真実のキリスト、その十字架の苦しみ、その本当の意味での救いをもし彼らが始めから知っていたなら、これらの苦痛、苦難は避けられていたことを悟ります、あのへりくだったナザレのイエスが実は真実の彼らのための購い主であったことをもし始めから知っていたなら！

ヘスターが他の写真を見ている時、彼女はこの苦難の時に主の力によって天に上げられる14万4000人のユダヤ人について考えました、彼女は聖書の黙示録の中の12章で語られている女のことがイスラエルであることをは知っていました、それからイスラエルの12の種族の中から1万2000人ずつが選ばれ14万4000人が成り立つことも知っていました、黙示録の14章では、それらの人がすべて処女だったと書かれています、すなわち女によって汚されていなかったということです、したがってヘスターは彼らが男性でならなければならない事も知っていました、ヨハネは苦難がまだ起こっていた間に天で彼らを見たと言っていたので、それらは苦難の時代の中で起きたということを知ることができます、聖書では彼らについて小羊にささげられる初穂として人々の中から贖われるとありますから、彼らは確かにこの苦難の時に

主の力によって天に上げられるということは確かです。

そしてヘスターは心の中で思いました、「この苦難の時に主の力によって天に上げられるとは何と素晴らしいことだろう！」確かに彼女は考えました、私もこの苦難の時にあって主に対して真実を貫くならばいつの日か！この苦難の時から逃れてすべての苦しみは過ぎ去ってしまうということです。

しるしのマークがこの世に紹介されて以来、アラベスタの町にはBeast（獣）のイメージがすなわち像が立てられました、ヘスターがこの像を最初に見た時、それは信じられない驚きでした、それはたしかにただの像でしたがそれには確かに話す力があつたのです、彼女は人々がその像を取り囲み、礼拝しているのを見て少し恐れを感じました、それはたしかに彼女にとって信じがたいものであり彼女の心臓の鼓動までもしめつけるものでした、そして彼女がその像を見続けると知らない間に礼拝してしまうような力を持っていたのです、彼女は常にイエスの血を通して祈り自分自身を守らなければなりませんでしたが、しるしのマークを持っていないヘスターと他の人々は離れた所からイメージの像を礼拝する人々を悲しみながら胸を刺される思いで見えていたのです。

空は透き通った青色で太陽は輝き美しい雲が点々としていました、しかしヘスターの心の中には暖かさや美しいものは何もありませんでした、彼女の世界は全く変えられてしまっていたのです。

街中ではしるしのマークについて、人々はいつも議論していました、ある人はこのように言っていました、「私は死んでもマークを受け入れません」

もうひとりの人は、「私たちは簡単に拒否することはできない、どうすればよいのか！食物を得るために何かをしなければならいでしょう、ただ飢えることはできません。」

ヘスターはこの町で最も大きいスーパーマーケットの入口に立って、何が起きているのかを注意深く観察しました、確かに人々がキャッシャーを通る時にはすべてあなたの買った食料品はチェックされ、すべての人がしるしのマークを示さなければなりませんでしたが。

その時、ひとりの女の人が買い物かごを持ってキャッシャーのいるところに来ましたが彼女の全身が何かの恐れでふるえているようでした、彼女のかぶっている帽子の下からは白髪が見え、同時に彼女の顔にはしわが目立ちましたが彼女の眼には何かの光があつたようです、彼女はカウンターの上に食料品を置きましたがしるしのマークをキャッシャーに示す様子はありませんでした。

ザンドラという名の(キャッシャー)は彼女の額にしるしのマークを持っていました、彼女は小さな年老いた婦人を疑い深くにらみつけました、ヘスターは自分のいる場所からそれらの様子を見てザンドラという名の(キャッシャー)が頭の固い人で、この年老いた婦人に対して優しさや憐れみを示すことがないことをすぐに悟りました。

「どんとんと前に進んで来てください！」ザンドラはどなるように言いました、「私はあなたのためだけに一日中を使うことはできません、しるしのマークはどこですか！」

年老いた婦人は当惑した様子で彼女を見つめ、しるしのマークを示す様子はありません

ません、彼女の後ろのラインはより長くなっていました、と同時にそこには食料品の買い物のチェックを待つ多くの人々が気短に待っている様子があり、落ち着いたの
ない空気が動き始めていました。

「あなたはしるしのマークを持っているのか！ それとも持っていないのか！」
サンドラは年老いた婦人に対して厳しくたずねました、「もしそれを持っているの
なら、すぐに見せて下さい、もし持っていないのならすぐにここから出て行って下
さい。」

年老いた婦人が悲しそうに戸惑いながら頭を上げたとき、ほとんどすべての人の
目が彼女に集中しました。

「いいえ」と彼女は弱々しい声で言いました、そして「でもお願いですから、こ
れだけは買わせてください。」

しかし答えは荒々しく返ってきました、「それは絶対にできません、あなたは自
分が誰だと思っているんですか！ そこらじゅうに書かれているサインがあなたに
は見えないんですか！ しるしのマークを持っていない者は食料品を買うことがで
きません。」と書かれているでしょう、私が警察を呼ぶ前に「さあ、ここからすぐ
に出て行って下さい。」と彼女は冷たく宣告した。

しかし年老いた婦人はそこを動こうとしませませんでした、彼女がポケットからハン
カチを取り出し、目から流れ出る涙をぬぐい始めた時、彼女の肩は震え始めました、
「食物なしで私を追い払わないでください、私たちは家に何の食べ物も持っていま
せん。」

このことでザンドラは大変な怒りを示した、「あなたは簡単な英語を読むことも、
理解することもできない本当に間の抜けた年老いたバカ者です！ 私たちはあなた
のような無知な人々を取り扱う別のやり方を知っています。」と言って彼女はいら
だちをあらわにした。

そのようなときに一人の警官が他の多くの人たちとともに冷たいまなざしをもっ
てそこに来た、その警官はしるしのマークを額に持っていて、彼の袖と帽子の上にも
しるしのマークの旗を持っていました、彼は荒々しく老婦人の腕をつかみ、ドア
の方へ彼女を引き寄せました、彼女は恐怖でびっくり仰天し無慈悲な警官が彼女を
追い出し始めた時、彼女は神に祈りはじめました。

ヘスターは遠くからこれらのことをながめ、自分の目に流れ出る涙を拭きながら
その店を後にした、彼女は小さな老婦人が神の子どもであることを悟りましたが、
ラブチャーが起きた時、老婦人にその準備ができていなかったことは何と悲しいこ
とでしょう！彼女はこれらの苦痛と苦難からすべて逃れることができたのにと
思った。

目にいっぱい涙を浮かべながらヘスターはある銀行のドアの前に集まっている群
衆に目を止めた、警察のパトカーが銀行の正面に駐車していて、ちょうどヘスター
がそこに来た時、警察官たちはパトカーに血のついた衣服を着た人を引きずって
いました、彼はひどく打たれていた様子でした。

「それは私の金だから、私は絶対にそれを取り戻すつもりだ！」

「それは絶対にできない、あなたがしるしのマークを受け入れない限り！」とひ
とりの警官がいきなり言い返した。

ヘスターは驚きのあまり、すぐに自分自身の口に手を当てて驚きの声を抑えた、なぜなら警官たちのひとは母コリンズの息子ジムだったからです、そして彼はたしかにしるしのマークを持っていました。

「そんなことはありえない！」と彼女は息をのんだ、「母コリンズの息子、ジムであるはずがない！」

それから彼女は自分自身で意識する前に「ジム！ジムコリンズ！」と叫んでいた。

その警察官は黒髪で少し大きな肩を持った、いうならば顔立ちのいいハンサムな感じでありながら、彼の暗い目の中、及び唇のまわりに現れる冷たい感じのほほ笑みが悪魔の力を現すかのようにヘスターの方を振り返り彼女の眼を見つめました。

そして彼は「あなたは誰ですか！」と命令するようにたずねた。

ヘスターは一瞬ことばを失いましたが、すぐに気を取り戻し口ごもりながら言いました、「私はヘスター、ベル、ウィルソンです」

しかし彼女は心の中では恐れと死に対する恐怖があり、彼女は自分自身を何としても止めようとしていたのです。

「私はあなたのお母さんが行っていた同じ教会へ行っていた者で、彼女は私にとってとても大切な友達でした、というより最高の友達でした」彼女はそこで涙が止まらなくなりました。

彼女がジムの母親の名前を口にしたら、彼は体中が揺れ動くほどに怒りを示し始め、異常なほどの憎しみをあらわにした。

「それを口にするな！」と彼は叫び、歯を食いしばり手を握りしめ「私の母の名前を二度と口にするな！」ともう少しで彼女をなぐりつけるかの様子であった、「私は私の母の名前を私の思いの中から完全にぬぐい去っているのに、あなたは私にそれを思い起こさせてしまった、私は彼女を憎んでいる、私は私の母を忌み嫌っているのだ、分かるか！」と叫び続けた、「私は彼女が歩いた道を忌み嫌っているのだ。」

彼は自分がキリスト信者の母親に生まれ育てられた人生を呪い始めた、「私は彼女が私に教えた迷信を忌み嫌っている、そしていま彼女はどこかに隠れて主の2度目の来臨が起きた、主であるイエスが来て神の子どもたちがこの世から取り去られたと私に信じさせようとしている。」しかしそれは全部が全部、憎むべき嘘なんだ！

「やめて下さい、」とヘスターは叫んだ、彼女はそのことで自分自身を大変に危険な状態に置くことも忘れていた、「あなたが母コリンズのことをそのように言う事を私は絶対に許しません。」と彼女はヒステリックに叫んだ。

その時にはすでに彼女は逃げ道をふさがれ、ジムは彼女を突き放し彼女を蹴りとばした。

「この犬どもを取り除け！」と彼は叫び、再び彼女を打ち倒そうとした、しかし彼女は必死の思いで群衆の中に走り込み逃げ出した、彼女は彼が「その女を止めろ！彼女は気が狂っている、」という声を聞いた、彼女はそれだけは覚えていたが、どのようにその場所から逃げ出したのかを覚えていなかった。

彼女は意識を取り戻し我に返った時、公園の中の多くの茂みの後ろに身を隠していた、そこで彼女はいったい何が起きたのかを思い起こしていた、彼女は自分が眠

りこんで夢を見ていたのだと思いますが、どうして自分がこのような場所にいるのか！ はっきりと思い出すことができなかった、それから彼女は自分の足で立ち上がろうとしましたがとても疲れていることに気づき、再び彼女は公園の中の草の上にはばらくの間、横になりました。

そののち彼女は自分の記憶がはっきりと戻ってくることに気づきました、これは夢ではなく恐ろしい現実だったのです、母コリンズの唯一の息子ジムは悪魔に魂を売ってしまい、彼の素晴らしい母親に対して恐ろしいことを言っていたのです、それから彼はヘスターをも蹴り飛ばしました、母コリンズはもう2度と息子ジムに会うことはできません、彼はもう2度と天国に行くチャンスがないのです、彼はもはや地獄から来た悪魔と同じ存在になってしまっていたのです、なぜ彼はそれを行うことができたのだろうか！

ヘスターは身震いしましたが、今まで以上にしるしのマークを拒むことを決心しました、たとえどのような拷問にかけられても、また飢え死にするようなことがあっても彼女は絶対にしるしのマークを受け入れることができないのです。

それから数日間はしるしのマークを受け入れていない人々にとって難しく困難な日々が続きました、彼らは日々を用心深く過ごさなくてはならなかったのです、なぜなら、彼らはいつであれ、どこであれしるしのマークをたずねられ、手のひらか、または額の上にそれを求められていたからです、しるしのマークを受け入れず、キリストが神であることを否定しない者たちが次々と死刑に処せられていました、ヘスターはどれだけ自分の家族が逃れ続けることができるだろうかと思いをめぐらしていました、反キリスト政権の軍隊はオフィサーを家から家に訪ねさせ、人々を尋問していたからです、もし彼らがしるしのマークを受け入れるならばよし、しかし受け入れない場合は拷問の場所に連れ去られていたのです。

町の通りには、しるしのマークを受け入れずに餓死した人々の死体がありました、しかしそれらはヘスターにとって勝利を感じさせるものでもありました、ヘスターはまだしるしのマークを拒否する魂（隠れている信者）がいることを知っていました、今のヘスターにとって死はもはや好ましくないビジターではなくなっていました、時折彼女はただ横になって静かに死ぬことができるならば、何と安らぎとなるだろうとも考えました、そして彼女は静かに死ぬことも神に祈りました、しかし神はヘスターの祈りを今のところ受け入れられてはいません。

ある日ヘスターがひとりで家にいた時、ドアをたたく大きな音が聞こえてきました、ヘスターは息をのみ込んでただ待ちました、どうすればいいだろう！彼女の父と母は食べ物を探しに出かけていました、食べ物を探すこと、手に入れることが一番の問題となっていました、なぜなら彼らもしるしのマークを持っていなかったからです。

別の大きなドアをたたく音が聞こえてきました、そして荒々しい声は「獣（BEAST）の名によって命じます、戸を開いて下さい」

ヘスターの顔から血が流れてくるような感じでした、彼女は周りを見て隠れる場所を探しましたが見つかりません、彼女はいったいどうすればよいでしょう！

荒々しい声は再び「扉を開いてください！そうでないと私たちは扉を壊して入っていきます。」彼女は急いで自分の聖書をソファの上のクッションの下に隠しま

した、「神様！ 私が冷静でありますように、そして話すべき言葉を導いて下さい、」それから彼女は扉を開いた。

「扉を開くのに、なぜそんなに時間がかかったのか！」と荒々しい声でオフィサーが言いました、彼は彼女を疑いの目で見まわしました、「どうぞお入り下さい。」と彼女は丁寧に言いました。

3人のオフィサーは彼女の次の言葉を待つ前にすでに家の中にずかずかと入って行きました。

「お坐り下さい！」ヘスターは上品に彼らをもてなしました、しかし彼女の心の中には嵐が吹き荒れていました、もしも私の父と母が彼らがいなくなる前に帰ってきたらどうなるだろう、彼らは私の父と母に何をするだろう！ もしも彼らがしるしのマークのことを尋ねたらどうすればいいだろう！ 彼女の心の中には多くの質問が出て来て、またそれらに対する答えも前もって考えずにはいられませんでした、

「誰があなた以外にここに住んでいますか？」と3人の中の一番背の低いオフィサーが急に尋ねた、「私の母と父です。」と彼女はあごを上げてまっすぐに答えた、

「あなた方は皆、しるしのマークを持っていますか？」と彼は彼女の顔をにらみこんで尋ねた。

彼女は尻込みませんでした、そして澄んで安定した声で答えた、「私は持っていません。」心では彼女は祈っていました、「神様、このことで彼らが私の母と父のしるしのマークのことについて尋ねることがないように、」

「なぜあなたはマークを受けないのですか？」と彼は彼女に近づいて来て質問した、「それが私にとって正しいことではないからです。」と彼女は彼の眼をまっすぐに見て言いました、「それはどういう意味ですか？」と彼は彼女の率直さに惑わされながら尋ねた、

「私はキリスト信者、クリスチャンです。」と彼女は大胆に返答した。その瞬間、彼女の中からすべての恐れが出ていき彼女の顔は彼女の贖い主のすばらしい愛によって光り輝いた、「私は銀や金よりももっと尊い代価を支払われて買い取られたのです。」

「いったい、あなたは何のことを言ってるのか！」と尋ねる人によって突然のように中断された、「そのような謎めいたことを話さず、私たちが理解できる言葉で話しなさい。」

「それでは、はっきりとあなたがたに伝えましょう。」とヘスターはへりくだって話し始めた、「それは神の子の流された血のことです、」

その瞬間、彼女を見つめていた彼らの目から哀れみが消え去りました、たしかに彼女は彼らの前に立って美しい絵を作ったのは真実でした、しかし、彼女が獣

(BEAST) 以外に対する信仰を明らかにしたとき、彼らは、ただただ彼らの神(獣)に対する愛と忠実さによってすべてのことを忘れてしまいました。

彼らは彼らの神の名前を冒瀆している彼女の頭からそのばかげた考え方を取り出すことを誓い始めました、それから彼らは大変な怒りとともに机の引き出しを投げ出し、すべてのものを床に投げ出しました、それから彼らは2階に上がり、寝室のドアを蹴り破り、すべてのものを破壊し始めました、ヘスターは彼らの跡について母親の服や着る物が床に投げ出されるのを見ながら絶望的でした、そして彼らがベ

ッドをひっくり返し始めた時、ヘスターは「おそらくあなた方は神のことばを、すなわち聖書を探しているのでしょうか！」という言葉で彼らを止めた。

彼らは驚いて彼女を見つめた、そしてうちの一人がこう答えた、「私たちは聖書と呼ばれる憎むべき本を捜している、あなた方はそれを神のことばと呼ぶかもしれませんが、私たちはそのようには呼びません、もしそのような本がここがあれば、私たちはそれを必ず見つけ出します、そして必ずその本を破り捨ててしまうでしょう。」

「その聖書はここにはありません、私はその私の聖書をソファの上のクッションの下に置きました。」

彼らは彼女を驚きと疑いの目で見つめました、それは彼らが彼女のような少女に今まで出会ったことがなかったからです、そのことで彼らはもし彼らが彼女の信じている信仰を変えることができるならば、獣（BEAST）の政権にとって何という祝福になるだろうとも考えた、実はこれが彼らの探し求めていたもので恐れをもたずに純粋に信じている人を探していたのである、だからこそ彼らはヘスターに最初に会った瞬間からそれらのことを心のどこかに秘めていたのである。

聖書を忌み嫌っている感じのひとりのオフィサーが荒々しくクッションの下に隠されていた聖書を見つけ出しました、ところが彼らはその聖書を見つけて出しても、それを引き裂きませんでした、それはヘスターにとってとても驚きでした。

彼らは巧妙な顔つきでヘスターに両手を差す出すように命じました、彼女は彼らの言葉に従いました、彼らは彼女に手錠をかけましたがヘスターはそれに対して動揺した感情を示しませんでした。

「私たちと一緒に来てもらわなくてはなりません。」と3人の中のリーダーであるように見えた男が彼女に冷たい感じをもって命じました、ヘスターは自分の家を彼らに連れられて出て行く時、もう2度と再びこの家に帰ることはないだろうと考えていました、彼女は堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです、そしてその都を建てられたのは神です、それから彼女は思い出の多くあるこの家をもう一度見直して心の中に思い出の写真を焼き付けて家を出て行きました。

彼女はふたりのガードマン、ひとりには彼女の前にもうひとりには彼女の後に連れられて行く時、頭をまっすぐにしていました、彼女は彼女の死に向かって歩いていることを知っていたのです、しかし、その昔イエスは彼女のためにカルバリの十字架の死に向かって歩いていたのです、その通り、彼女はイエスのために自分の命を与えることをすばらしい特権と考えました、イエスは彼女のためにすばらしいわざをなされていたからです。

彼らが歩いて行く途中、少しの間、誰も声すら出しませんでした、それからヘスターが口を開きました、それは聖書がこの横柄な人によってどのように扱われているか、気になったからです。

甘いやさしい声で彼女は、「私たちがそこに着くまでの間、私の聖書を私に持たせて下さいませんか！」と尋ねた、

「それは絶対にできない、」とオフィサーのうちのひとりが荒々しい声で彼女に答えた。

ヘスターの聖書を持っていたオフィサーはひそかに心の中で獣（BEAST）政権のた

めに彼女の魂を勝ち取ろうと決心していたので、彼女が引き続き頑固でない限り、彼女を死に至らせることは必要ないし、まして彼女は若いのだからすぐにでも彼女を改心させることができると考えていました。

そこで彼は「今ちょうどそのことを考えていたところです！ 私はこの汚れた本を自分自身の手で運びたくはないし、他のオフィサーのひとりにたずねようと思っていたところです、気分は悪くなるし冷や汗をかきます。」

そのことは彼らの中で十分に問題の解決につながりました、他のオフィサーのふたりも同じようにそのことを拒んだからです、どのように彼らが冷静になろうとしていても、この聖書は彼らにとって気分を悪くし、彼らをイライラさせずにはおきませんでした。

そのようにして再びヘスターの聖書は彼女の手の中に戻ってきました、その聖書を手にした時、ヘスターはその表紙の柔らかさ、そして感じの良さだけでなく、その本を通して彼女は神の愛の暖かさと不思議な力を受けていたのです、神が確かに彼女とともにおられる、彼女の死に至るまでも。

さて彼らは最後に、赤いレンガの建物の所まで来ました、その中の庭にはクリスチャンを苦しめるために使われた多くの装置がありました、ヘスターと彼らオフィサーがそこに入る直前に誰かの体が火あぶりにされたようです、多くの人々がそこに集まりその様子を見ていた感じです、そこには人間の肉を焼いた強いにおいがあり、彼女はそのことによって吐き気を感じました、しかし彼女はその人の体は焼かれても、すでに魂は体から離れていることを知っていました。

彼らは彼女を大きな部屋に導き一つの机の前に案内しました、そこには眠つきの悪いひとりの人がいて彼女はその不思議な感じによって思わず後ずさりするほどでした。

「しるしのマークを受けとっていただけませんか！」と机の後ろの人は尋ねました、「それはあなたから多くのトラブルを取り除きますし、ここからすぐに自由に歩いて出ていくことができます、それは実に簡単な手続きです。」彼は怪しい目つきで彼女と駆け引きを続け、引き続いて彼女に話し続け、「あなたは死ぬには少し若すぎるとは思いませんか！」と言った。

彼は彼女の手を軽くたたきました、しかし、あたかもへビが彼女をめがけて打ったかのように彼女は她的手を後ろに引きました。

「私たちは獣（BEAST）政権でああなたのような人を使うことができます、というのは私たちは様々な状況の中で常に落ち着いて行動できる人を求めているからです、」と彼らのために彼女を勝ち取ることを望んでわざとらしい親切さで言いました。

「あなたはここに来る前に庭の中で悲しい出来事を見たと思います、もちろん私たちにとっても悲しい事です、ただこのことに関して人々が学ぶべきことは獣（BEAST）政権は人々が軽く扱うものではないということです、この仕事は真剣できわめて現実的です、私たちはあなたにしるしのマークを与えましょうか？ それとも、あなたが庭の中で見たことと同じ運命をたどりますか？」

ヘスターは清く正しい尊厳を持って彼女の頭を上げ、素直で明瞭な声で言いました、「いいえ、私はしるしのマークを受け入れません。」

その時、3人のオフィサーはそれを見て自分たちの目を疑いました、いったいど

のような種類の超自然の力が彼女に何の恐れも持たずにこのことをさせているのか！ 彼女自身の死さえも恐れないとは！

しかし、机の後ろにいた男の顔色が怒りで変わった、彼は「彼女を連れて行きなさい！ 私たちは彼女がその考えを変えるために彼女に経験してもらわなくてはならないことがある。」彼はオーダーをなぐり書きにして、彼の補佐官にそれを渡しました。

荒々しい手が彼女を捕えました、そして彼女は裏口から連れ出され狭く薄汚い独房がある廊下を下って行きました。

「このオーダーは、彼女を景色のいい正面の独房のうちのひとつに入れるようにと書かれています。」と嘲笑する笑いを持ったガードマンが言いました、それはヘスターの体の中に何か冷たいものを走らせました。

彼女は大きな鉄製のドアを開かれ、そこに押し込まれ、ドアは強く閉められました、それから鍵がかけられました、しばらくの間、彼女はそこに立ったまま閉じられたドアを見つめていましたが、すぐに周りを見まわしました、そこに一つだけ家具があり、2枚の古びた毛布があり、一つだけある窓には鉄格子がありました、その窓からはあの庭がよく見えましたが、彼女はそのとき、獣（BEAST）の政権に屈しなかった神の聖者が自分自身の血をもってキリストを証して黒焦げになって火あぶりにされた瞬間を目撃しました、ヘスターは吐き気を催しました、そして彼女は震えました。

「私の神様！」と彼女は祈りました、「どうか私が強くなることができますように、そして勝利者として死ぬことができますように」

ヘスターは雑音を聞き、他の人々が彼女のそばの独房に入れられていることに気づきました、ドアが厚い鉄で作られていて部屋自体もセメントの壁によって作られていて高さもかなりあったので彼女はそれらを見ることはできませんでした、必死に彼女はそれらの声に耳を傾けましたが祈っている様子はいかがえてもそれらの声を聞き取ることはできませんでした。

それからヘスターは手の中にしっかりと自分の聖書を握りました、確かに彼らが独房に鍵をかける前に聖書の存在に気づいていなかったことは神の奇跡でした。

急いで彼女はその大切な聖書を毛布の下に隠しました、神は私のことを思ってこの聖書を私の手の下に置いて下さいました、このような状況の中であって神が私のことを思っていて下さることを知ることは何と素晴らしい慰めでしょう！

他の囚人からのうめき声や叫びの上に彼女は悲しげに鳴る庭の巨大な鐘の音を聞きました、彼女はそれを何度も以前に聞いたことがあり、それが何を意味するか知っていました。

それは新たな犠牲者を殉教者の墓へ送るためのもので、彼女の心は大きく打たれるような気持ちでした、次の殉教者とは彼女自身かも知れないのです。

その後、彼女は足跡を聞きました、彼女は思わず自分自身の口をふさぎました、彼女自身の口から出てくる悲鳴を止めるためでした、外からは制服がこすれる音が聞こえ、多くの鍵を持っている音とともに彼女の扉の前で鍵が押し込まれました、彼女はまっすぐに立ち、まさしく自分の時が来たと思いました、扉はゆっくりと開けられ、男は剣を手を持って立っていました、あたかも殺す準備が出来ているかの

ように、しばらく彼は彼女をにらみつけました、ヘスターの心は恐れでおののいていました、しかし彼女は前に進み「私は準備ができています。」と言おうとしました、ところがそれは声となって出てきませんでした。

男は口を開いて、「誰もこの命令に逆らうことはできません、あなたはその窓の前に立ってどういう状況であろうとも決して動いてはいけません、解りましたか！ 私たちがあなたに見てほしい美しい出来事があります、さあ！ 私の言った通り、今すぐ実行しなさい、」とって男は宣言するように叫びました。

ヘスターは言われた通りにすぐに実行しました、彼女にとってこのことは現実には起きている事だとは思われませんでした、彼女はつまずきながら窓の中から外の庭をのぞき込みました、それから独房の扉は音を立てて閉じられて鍵がかけられました、その時彼女は彼女に近いところからすすり泣きする声を耳にしました、それで彼女は聖者の死を見ることを強いられているのが自分だけではないことに気づきました。

庭で集められた群衆から多くの叫び声が聞こえてきました、それから突然のようにすべては静かになり、緊張した空気がしばらくの間続きました、そして彼女の独房の外から足跡が聞こえてきました、彼女はそれに聞き入りました、その後、監視が持つ多くの鍵が揺れ動く音とともに、その足跡は庭に通じる鉄の門で大きく音を立てて開けられました。

しばらくしてガードマン（監視）のキャプテンは「気をつけ」と大きく叫びました、そしてガードマンは円形の鉄で作られた器のようなものにふたつの鉄棒を作りました、これは新しい拷問のやり方だとヘスターはその瞬間思いました、彼女が見るとその人の指の関節は鉄棒に縛りつけられていることによって青白くなっていました。

美しく少し弱々しい感じの若い女性はふたりのガードマンによって乱暴に押しつけられていました、彼女の金髪の髪の毛は太陽の光によって不思議にも美しい背景を作っていました、彼女の目には神の栄光の光があり、彼女の唇がわずかに動いたようです、しかしそれはただ恐れの外れのようなでもありました、彼女の肩は堂々としていて、そこにはやさしい尊厳のようなものも漂っていました、ガードマンは最後の場所で彼女を押しませんでした、彼女は最後の歩みをゆっくりと歩いていました、ヘスターは心の中で“彼らは一体どのようにして彼女を殺すのだろうか！ また彼らは本当に彼女を殺すのだろうか！ 最後の最後で彼女は真実の神への信仰を捨ててしまうのだろうか！

「おお！ あわれみ深い神さま。」とヘスターは思わず祈り、「主のために命を投げ出すことができる力を彼女に与えてあげてください。」と付け加えた。

ちょうどその時、ふたりの男が深い所にある大きな穴からおおいかぶさっているふたのようなものを動かしました、ヘスターの独房の窓からは遠くにありながら、それがよく見えたようです、その中には異なった種類の何百もの毒をもったヘビが互いに重なり合って動いていました、ヘスターは驚きのあまりに自分の目を疑いました、彼女は若い女性の運命がどのようになるかを悟ったとともに恐怖の中で委縮してしまいました、冷や汗は彼女の額に出てきて、彼女の背中には冷たい空気が流れるような感じでした、若い女性は穴の横に立つことを強いられ、彼女はその穴の

中にあるものを見て恐れを感じるとともに自分の運命を悟ったようでした。

彼女がヘビの穴の中に近寄ることを強いられた時に、若い女性の目は怖れとパニックで大きく開きました、蛇の頭はすぐにでも彼女に襲いかかるように長い舌を口から出していました。

ヘスターは思わず悲鳴をあげるところでしたが、彼女は自分自身を制御しなくてはならないことを知っていました、しかし、彼女は気がつかないうちに窓から離れ、震えながら床によりかかりました、直ちに窓のそばにいたガードマンはヘスターに「窓から離れないで、命じられた通りに窓に戻りなさい、あなたは自分が何者だと思っているんですか、私があなたなら命じられた通りに従いますね、2度目の命令はおそらくあなたに与えられないでしょうから！」と彼は怒鳴って言った。

ヘスターは震えながら弱った足を強くして引きずりながら窓のところに戻って行った、ちょうどそのとき庭の中ではガードマンが若い女性に「あなたはあなたの信仰を捨てて、獣 (beast) のしるしを受け入れて、今日からこの神だけが真実の神だと宣言しますか？」と尋ねていた。

彼女はまぶたを動かすことなく、堅く無表情で立っていました、庭の中はすべてが静かになって、すべての人々は彼女の答えを待って彼女に集中していました、若い女性はその答えを与えることを躊躇しませんでした。

「いいえ！」彼女は尻込みすることなく言いました、「私は決して私の信仰を捨てません、宇宙には一つの神だけが存在します、私が仕える神、全宇宙の神です。」と断言した。

するとガードマンは彼女をにらみつけ、ゆっくりと彼女を穴のふちに彼女を押し始めた、彼女は最後に心変わりをする時を与えられたのである、そののち「獣

(BEAST) に栄光を！」と叫んでガードマンは彼女を突然のように穴に落としました、穴の中に落ちた彼女はヘスターが今までの人生の中で聞いたことのないような哀れな悲鳴をあげました、そして、その声はヘスターの残った人生に絶えずつきまとうほどのものでした。

多くのヘビが一瞬に彼女を襲いました、ヘビが彼女を襲うたびに彼女は鋭い悲鳴をあげ、ヘビが彼女の命を吸い取るとともに窒息するような声は最後の声としておさまりました、それから穴にふたが閉じられました、それから獣 (BEAST) を礼拝する者たちは地上にひざまずき栄光と誉れを獣に与えました。

それがヘスターが覚えているすべてでした、数時間たったのちに彼女は床の上に横たわっている自分を知りました、彼女の頭の中は何か鋭いもので破壊されたような感じでした、一体！彼女に何が起きたのだろうか、彼女、今どこにいるのだろうか！そしてしばらくの後に、彼女に記憶が少しずつ戻ってきて、その恐ろしい出来事を思い出した。

「私は気絶したに違いない、」彼女は床にしゃがみこんでつぶやきました、彼女の体はあたかも打たれたかのように至る所で痛みを感じていたが、それはもはや彼女にとって重要なことではなく、彼女は長い時を床の上に坐りこんで過ごし、もはや生きている価値のない自分の人生を考え、もしもこの人生がすぐにでも終わりを迎えるならばと考えていた。

ヘスターの独房の中には夕日が差し込み影を長くしていた、鍵が扉に差し込まれ

ドアが開き、あの同じガードマンが「さあ、食事だ、」と言って、冷たい豆の入った鍋とパンを与えた、そして彼は一杯の水を与え彼女に忠告した、「この食事を食べたほうがいい！ あなたは少量の食事を毎日与えられる。」

ヘスターが何かを言う前に、彼はドアの周りをまわってヘスターに近づき、顔を近づけて「ところで、今日の午後、私たちがあなたに見せたサービスはどうだったかな！」と冷たい笑いを持って語り始めた、彼は彼女をゆっくりと眺め、その目には悪魔の力がきらめいていた、「あなたにもっと悪いことが起きる前に、考えを変えた方がいい！」と彼は冷たく言ってドアを閉めて鍵をかけ外に出て行った。

今の彼女にとって食欲はなく、どのような食事もとることは難しかった、しかし彼女は自分自身のための健康のためにも何かを食べることは必要だったのである。

その夜、あの薄汚い毛布をまとって眠りに入ろうとするとき、多くのイメージが彼女の心の中に再び戻ってきました、そして彼女が自分の母親と父親のことを考えるとき、知らず知らずのうちに彼女の眼には涙が出てきました、私の父と母は一体どうなるだろう！ 彼女は彼女の父親がどのようなことがあっても母を助けようとすることは知っていたし、自分の命をも投げ出すだろうと思っていた、それで彼女は神の御前にへりくだり、自分の父親のために無謀なことをしないようにと祈った。

長い夜の中で彼女はあの若い女性の白い顔を何度も思い出しました、彼女の目は大きく開き、あのへびの穴の中へ落され、聞こえてくるあの忘れることのできない悲鳴は彼女の心の中に鳴り響きました、ああ！彼女が感じた恐怖、どのようにしてそれを心の中から消し去ることができようか！

最後に彼女はそれらのことを繰り返しているうちに眠りに入りましたが、彼女は夢の中で彼女にまつわりつくへびと、あの忘れることのできない悲鳴を何度も聞きました。

夜が過ぎて、新しい日が始まった時、それは何という彼女にとっての安らぎだったでしょう、この日に何が彼女を待っているか、彼女は知る余地もありません、しかし少なくとも、あの恐ろしい暗い夜は過ぎ去ったのです。

第10章

3人のオフィサーがヘスターを連れ去った直後に、フランクとスーザンは帰宅しました、彼らが家に帰って来た時、家の中が少し荒らされ、ヘスターがいなくなっていることに気づいた彼らは大変な衝撃を受けました、彼らが最も恐れていたことが起きてしまったのです、彼らは一体どうすればいいのでしょうか！ヘスターは若いから、ひょっとすると彼らはあらゆる手を尽くして彼女を説得するだろうし、彼女をだまして、しるしのマークを取らせるかもしれない、彼らはともに心配のあまり自分自身を制御することができませんでした、彼らの心には獣の政権によって彼女が連れ去られたことに対して全くの疑問はなく、どうすればいいか！ということだけを考えていたのです、彼らはヘスターを探しに行くことに関して、日が暮れるまで待つことで同意しました。

それから、彼らが冷蔵庫から残り物を取り出して、ちょうどすわって食べようとした時に、裏口からドアをたたく音がしました、スーザンの心臓は突然のように動きが途切れしました。

彼女はその瞬間、夫を見ました、震える声で彼女は「あなたは、それが誰だと思う！」と小さくささやきました。

「私には分からないし、見当がつかない。」とフランクはしゃがれた声で答えた、ドアの方にふたりが目を向けると、その音はより大きくドアをたたき続けた。

恐れで身がすくんでしまったスーザンは彼女の夫が用心深くドアを開けて暗い外を覗き込むのを見守った。

「フランク！」ジャック・ランドが外から呼び出した、

その瞬間、ドアは大きく開きました、スーザンは緊張感が一瞬にとれて思わず椅子に坐りました、ジャックは前日、彼らが主イエスを見いだすために助けた彼らの親しい友達でした。

ジャックは彼らに息切れしながら、獣（BEAST）の政権から送られた3人のオフィサーがヘスターをこの日の昼に連れ去ったことを彼らに伝えた、彼はヘスターがどれだけ堂々としていて聖書を腕にかかえてこの家から出て行ったかを告げるとスーザンは泣き崩れた。

と同時にフランクの心の中に復讐の心が芽生えた、彼は自分の銃を取り出してすべてしるしのマークを持っている者たちを殺したいとまで思った、スーザンがその彼の顔を見たとき、その表情に驚いた、今このような時にフランクは決して落ち着きをなくしたり、分別を失ってはならないし、まして大それたことをする事がないように、彼らは霊に導かれて正しい行いをしなくてはならなかった。

「フランク、床にひざまずいて私たちの天の父に祈りましょう、私たちの神は私たちが何をしなくてはならないか！どのようにすべきか！すべてをご存じです。」

彼らは台所の中で床にひざまずいて3人ともに祈りました、彼らの心をすべて大きく神に開き、知恵を求め、神のみこころを行うための力を求めた、彼らはその祈りによって力づけられ、ヘスターのために祈り、そして彼ら自身のためにも唯一の神の真実のために最後まで立ち続けられるように祈った。

暗い夜が厚い黒い毛布をかぶせるように迫ってきた、フランク・ウィルソンはあ

の独房のある庭につながる同じ道の外に立って、それを見つめながら何とかしてヘスターを救い出すことを思いめぐらし、彼は自分の命の危険を冒しても実行しなければならないと考えていた、ヘスターはその刑務所の独房のどこかに入れられている筈だ、もし彼らが彼女をまだ殺していなかったなら、と思うと同時に、ひょっとしたら、すでに彼らは彼女をその残酷で手によって殺しているかもしれないという考えが彼の心の中に何度も走った、彼女への愛と彼女を思う心が彼から恐れを遠ざけていた。

それから、1時間ぐらい経ったのちに彼はそれを現実に実行に移していた、彼は独房のある庭の近くまで来て、ふたりのガードマンが言い争っているのを見つけ、そのチャンスをつかっていた、彼らの言い争いが激しくなり、フランクは彼らに気づかれることなく門のゲートを通り抜けることができた。

門の内側に入った彼は誰にも見られないようにその庭を通り抜け、独房のあるところまで行くために壁に沿って静かに前進した、それからまわりに誰もいないことを確かめて独房のあるところに向かって必死で走った、彼がそこに到着した時、彼の心臓は激しく動いていた、再び彼は影の中に自分の身を隠して時を待った、そこには何の音も聞こえず、ざわめきの音もありませんでした、ただ反対側の独房から聞こえてくるようなうめき声がありました。

彼は影のように壁に沿って動いて、ようやくのこと独房の窓のところまでやってきました、彼は目をこらして独房の中を見つめました、その独房の中には数人の囚人と思われる人々が、ある人は床に横たわり、ある人は座り、ある人は立っていた。

彼は周りを見回して、柔らかく優しい声で「ヘスター！あなたはそこにいるの！」と呼びかけた。

彼は誰かが答えてくれるかどうかと思っている間、彼の体中の筋肉は硬直して緊張していました、数人のひとの顔が窓に近寄って来た。

「私の娘、ヘスターはこの中にいますか？」彼は心配そうに尋ねた。

ひとりの女の人がその窓に近づいて来て、皆の方を向いて彼らに甘く優しい声でこう尋ねた、「誰か、この中にヘスターという名の人がありますか！もしいるならば、誰か外にあなたに会いたがっている人がいます。」

すべての人が首を横に振りました、それからその女の方は窓のところに戻ってきて、「その人はここにはいません」と言った。

フランクは重い心で次の窓に移りました、しかし次の窓の中を彼が見るとそこには女の方はひとりもいませんでした。

彼は狂ったように別の窓を探しました、そこで彼はうめき声を聞き、のぞき込むとそれはヘスターでした！彼はそこにある鉄の棒を通して狭い独房の中を見つめました、ヘスターはそこで汚らしい毛布の下に横たわって何か夢を見ているようになさされていました、彼女は人々が殺される場面とあのヘビのことを夢見ていたのです。

ちょうど彼がヘスターを呼ぼうとした時、足音が聞こえてきました、彼はそれを注意深く聞きました、ぎょっとして彼は壁に寄り添いました、彼の息が荒くなり、もし彼らが近くに来るとその音が彼らに聞こえてしまうかもしれないほど、そこは静まり返っていて彼は自分自身のためではなく、ヘスターのことを必死に思い、も

し彼がここで連れて行かれるようなことがあればヘスターの身に何が起きるだろう！と考えました。

その足音はより大きくなり、夜警が彼のいるところにどんと近づいていることがわかります、それからその夜警は突然のようにフラッシュライトをつけてそこらじゅうを照らしはじめました、その光はフランクが隠れている壁のところにどんと近づいてきました、彼の心臓は思わず止まってしまうほど恐れで硬直しました、そのフラッシュライトはフランクの顔をまっすぐに照らしたのです。

荒々しい声で「私があなただを叩き落とす前に、そこから出てきなさい。」という声が聞こえてきました。

感覚を失ってしまうほどになったフランクは片手にフラッシュライトを持ち、他の手に銃を持っているガードマンによろめき従いました。

「それであなただはここに、しるしのマークを取るために来たのかな！」と男は冷たい笑いをふくめて言った、「それは全く素晴らしいことだ、私たちが外に出かけてあなた方を探す時間を省くことになる。」

彼はフランクを蹴り飛ばし、それから彼の持っている銃の先で彼の背中を強く押ししました、彼らが正面玄関に来た時、彼はフランクに扉を開くように命じました、その時、そこに満ちている光によってフランクは一瞬、目が見えなくなるほどでした、ガードマンはそこでフランクをもう一度蹴り飛ばし彼を部屋の中へ押し出しました。

「私たちが私たちの裏庭に何を見つけたか、よく見てください。」とそのガードマンは含み笑いで言いました、「恋人ですよ！ おそらくこの男は恋人とのデートを守るためにここまで来たのでしょう、ところがそこで彼女の父親に見つかって邪魔をされたということです。」

机のうしろにいた男がフランクをにらみつけて、「あなたはあの独房の窓の外で何をしていたんですか？」と彼はとげとげしく尋ねた、「私たちはあまりそういう話は好きではないんですよね。」

フランクは頭に血がのぼり、興奮した状態で「恋人でも何でもなく、それは私の娘だ。」と口をすべらした。

「おお！」と男はフランクを連れてきたガードマンに向かってウインクをして「これは面白い、したがってお父さんは娘にしるしのマークを受けるようにここに来たわけだ。」と言った。

「私は決して私の娘にしるしのマークを受け入れて、自分の魂を悪魔に売るようなことをすすめたことは一度もない。」フランクは大胆に答えた、「私は神に、彼女があなた方の残酷な責めに耐えて死に至るまで従順で真実の神への信仰を守り通すことを祈る。」

机の後ろにいた男は怒りのあまり狂ったように、「やめろ！そんなばかげた話は」と目をぎらぎらさせて叫んだ、「それは神への冒瀆だ、そんな話を聞いては行られない、私はあなただを今夜殺すことができるのだ、もしあの娘があなたの娘ならば、あなたの妻は今どこにいるのだ！」

「私の妻は私とともにはいない、」とフランクは急いで答えた、彼らが彼の妻の行方を探すことを拒むためだった。

「私は馬鹿じゃないんだ、」と彼は暗い表情で答えた、「あなたがあなたの妻と一緒にいないのは私にもよく見えている、ただあなたはあなたの妻がどこにいるのかを私たちに知らせなくてはならない、早いうちにそれを私たちに知らせた方がいいと思う、そうしないと私たちはあなたをもっと違うやり方で責めなくてはならない、私たちはあなたのような偉そうにしている者たちを話すようにすることができるんですよ、獣（BEAST）こそが宇宙の唯一の神、そしてあなた方は彼に従います、あなたにそれが分かりますか！」と彼はフランクを軽蔑して言った。

「私は私の真実の神に従う。」とフランクは尻込みせずに答えた。

彼は彼らによって拷問の部屋に導かれた、そして拷問が始まった、彼らは様々なやり方で彼を苦しめたが、彼は彼の妻の行方をしゃべらなかつた、しかし彼らは彼女の家がどこにあるかをつきとめた、フランクは彼らがどのようにしてそれを探し出したのかを知らなかつた。

彼らがフランクを長い時間苦しめた後に、スーザンが部屋に連れてこられた、そして彼女が彼女の夫を見た時、彼女は恐ろしさのあまり悲鳴をあげた。

「あなた方は私の夫に何をしたんですか！」と彼女はフランクに近づいてあえぎすすり泣きました、彼の顔はひどく腫れて、彼の両目は真っ黒にされ彼のシャツは背中から二つに裂かれていました、彼らはフランクを彼ら自身が疲れるまでたたき続けていたのです。

「これはちょっとしたもてなしをしていただけですよ！」とひとりのガードマンは冗談話のように笑った。

それから彼の冗談話をしていた顔が渋い顔に変わり、スーザンの顔を悪で満ちた目でにらみつけた、それはスーザンからいのちを吸い取ってしまうかのようにも思えました、「私たちは彼がこのレッスンを学ばず、自分の頭の中にまともな感覚を戻して私たちからの命令に従わないならば、もっとひどいことをしなくてはなりません、」と彼は言った、「もしあなたが賢い人であるならば、私たちの言うことに素直に従うでしょう、あなたの旦那さんの不運をあなたの教訓としてください。」

それから彼らは古びた独房へ連れて行かれました、ガードマンがそこでその扉を閉めて鍵をかける時に彼は「この独房にいた女性はもうここを必要としていません、」と冷たく無情な声で言った、「彼女は生きてままで焼かれただけでなく、彼女は真っ黒焦げになるまで焼かれてしまいました。」

それからガードマンは扉をボタンと閉めて鍵をかけるぞっとするような笑い声を出しました。

次の朝、ヘスターが起きた時、独房の窓からは太陽の光が輝いていました、長い恐ろしい夜が終わったことで彼女は少しの安らぎを得ていました、しかし、それから扉の外で多くの鍵がガラガラ音を立てるのを聞き、彼女の顔は少し青白くなりました、彼女は震える手で急いで聖書を毛布の下に隠しました。

それからガードマンが部屋に入ってきました、そのとき彼女は扉に背を向けて小さな窓を見ていたのです、ガードマンは彼女に不親切な声で話しはじめました、ヘスターはあたかも彼が話すまで部屋の中の彼に気がつかなかつたように振向きました、彼は彼女の朝食を床の上に置くとき、あたかも親しみがあるように他の多くの質問とともに、昨夜ゆっくり休めたかどうかを尋ねました、しかしヘスターは話し

をする気分ではありませんでした、彼女は無表情な顔で彼に答えました。

朝食は暖かく、非常に食欲をそそりました、しかしながらなぜ彼らは急に彼女に対する態度を変えたのだろうか！ 彼女はそれが愛や同情ではないことを知っていましたが、ガードマンが動くことも去ることもしなかったので、それを無視して食べ続けました、

ちょうど彼女が食事を終わろうとしていた時に、外から足音が聞こえてきました、彼女はガードマンのキャプテンの顔を見上げました、それと同時に彼女に食事を持ってきたガードマンは急いで彼に敬礼をして獣政権に敬意を払いました。

「獣政権が永遠に生きられますように」

「彼女の様子はどうか！」とキャプテンは親切そうに尋ねて彼女に近寄ってきた。

「私は元気です、ありがとう」と落ち着いた様子で答えた。

「私はあなたをこのような場所から解放する命令を与えることができる力を持っていることを喜びましょう、あなたのような可愛いお嬢さんがこんな場所にいる必要ありません、あなたがしなくてはならないことはほんの小さなことです、それをすれば私はただちにあなたをここから自由にすることができます。」

ヘスターは彼の誘いに答えませんでした、同時に彼女はそれらのことに関して全く無関心な表情を見せました、キャプテンは眉をしかめました、それは彼が予想したように事が進んでいなかったからです、彼は彼女がこの時期になったら、喜んで彼の誘いにのるだろうと思っていたのです。

「さて、若いお嬢さん、あなたのしなければならぬことは難しいことでも何でもなく簡単な小さなマークを取るだけです、そしてそれはすぐに終わるでしょう。」

ヘスターは静かな声で「私はしるしのマークを受け入れません、あなたの好きなようにして下さい、私の聖書は肉体を滅ぼすことのできる者を恐れてはならない、しかし、肉体をも魂をも滅ぼすことのできる方を恐れなさいと書かれています、私はあなたの誘いに興味がありません、私の答えはいつでも“いいえ”です。」と言った時、彼はヘスターの顔の中に強い抵抗心があることを見て取りました。

しばらくの間キャプテンは彼女を見て、信じられないという表情を見せました、そして私の聞いていることは現実に確かなことだろうかと思いました、このような無力な少女がこのように簡単にも私たちの誘いを断ることができるのだろうか！ 彼は彼女にやさしさと同情を見せることによって、まして温かい素晴らしい朝食を与えることによって彼女が心変わりをするだろうと確信していたのです、ところが彼女はその親切さに対して恩知らずの敵がするようにふるまったのです。

それから彼の心の中には様々な思いが浮かんで来ました、彼は彼女に対する強い憎しみを抱くようになり、彼の中から大変な怒りがわき上がってきました、しかし彼の脳に一つの計画が浮かび上がりました、そしてそれを彼が考えれば考えるほどに彼は再び静かな自分を取り戻しました、そして再び彼に彼自身が戻ってきたのです。

「ところで、あなたのお母さんとお父さんが昨夜、ここに連れて来られたのをあなたに知らせておきましょう。」

ヘスターの目は驚きのあまり大きく開き、彼女のくちびるは冷たく開いたままで

した。

「私はひょっとしたら、あなたがそれに興味があるかもしれないと思ったので伝えておきました。」と彼はあざけって言った。

ガードたちはキャプテンに付き添って独房を出て行き、ヘスターをひとり冷たい独房に残しました、彼女はその時、窓の鉄格子をつかみ外を見つめ、かごの中に閉じ込められた動物のように感じました、私の父と母がここに連れて来られた、ということは彼らの運命はどうなるのだろう！ 私は彼らを助けるために何かできることがあるだろうか！ しかしそれはもはや彼女にとって重要なことではありませんでした、しかし父と母が彼らの残酷な手の中に入ってしまうことは、あの優しい父と母のことを考えるととても恐ろしくなりました、もし彼らがあまりの恐ろしさのために心変わりすることがあっては、とまでも考えてしまいます。

「どうか神様！ 彼らが強くなることができますように！」と彼女は正直に神に祈りました、涙は彼女の頬を伝わってながれていきます。

それからの数時間は彼女の父と母に関する情報を待つことでとても苦しい時でした、多くの暗い考えが彼女の頭をよぎり、ゆっくりと朝が過ぎて行きます、いつでも独房の外から足音が聞こえると彼女はそれを待ちましたが、だれも彼女の独房の中には入ってきません。

それからちょうど正午になったとき、重い足音が彼女の独房に近づいてくることを悟りました、そしてそれは彼女の扉の前で止まりました、そして扉が開かれました、朝の朝食を持って来た同じガードマンが彼女の独房の中に入って来て、

「あなたのお父さんがこれをあなたに与えるようにと私に言われました。」と彼は親しみのあるほほ笑みを含めて彼女にノートを渡した。

「ありがとう」と彼女は言って、急いでその薄い紙きれを開き、その信じがたいことが書かれている手紙を読みました。

私の最愛なる子に、
あなたは私とお母さんがどのようにしているのかと非常に心配していると思います、でも、もう心配する必要は何もありません、私たちは大丈夫です、事実、私たちはこのような幸せを今までの人生の中に味わったことはありません、私たちはしるしのマークを受け入れました、実は私たちはあざむかれていたのです、しかし私たちは今、真実の光を見いだしました、あなたのお母さんと私はあなたがしるしのマークを受けることを心待ちにしています、どうか私たちを失望させないで下さい、そうすれば私たちはもう一度一緒になることができます、それからいつも私たちがあなたを愛していることを思い出して下さい。 あなたを愛する父より。

彼女の父と母がしるしのマークを受け入れ、そしていま私にそれを受けようにと望んでいる。

「そんな事はありません！嘘だ。」と彼女はヒステリックに叫びました、彼女はそれを持って来たガードマンを見つめて涙をこぼしながら、小さな子供が願うように「どうかこれが嘘だと言って下さい、これは私のお父さんが書いた手紙ではないと言って下さい。」懇願した。

ガードマンは彼女を見つめて悲しそうにこう言った、「残念ながら、それは真実です、あなたのお父さんが直接、私にそのノートをくれたのです、この筆跡があなたのお父さんのものであることに気がつきませんか！」

彼女はその瞬間、そのノートを見た、その通り、それは彼女のお父さんが書いたもののようでした、「一体彼らは何をしたのだろう！」と彼女はとても悲しんだ、「あれほどまでに私は彼らが失敗しないように何度も祈ったのに、」

ガードマンはその独房の中にとどまっていたが、ヘスターは彼のことを気にせず自分の思いを語り続けていました、もしも彼女の父がすでにしるしのマークを受けているのならば、彼女にとってはもはや意味がないことだったからです、彼女の父と母が弱くなって悪魔に彼らの魂を売ってしまったという思いが彼女の脳の中に何度も何度も繰り返され、彼女は大声で叫びたくなりました。

それだけではなく彼女のお父さんの願いは彼女も同じようにしるしのマークを受けることでした、そのことは彼女を身震いさせました、マークを受け入れますか！いいえ、絶対にそんなことはできません、たとえ彼女の両親が懇願したとしても、「おお！私の神様」と彼女は祈った、「もう2度と私の家族は一つの幸せな家族になることはできない、私の父と母は天国を捨ててしまったのだから。」と叫んだ。

この苦難はヘスターにとっては少し重すぎたようです、彼女はあわれな叫び声とともに傷ついた動物が倒れてしまうようにくずれた、ガードマンはその彼女を助け、彼女をオフィスに連れて行きました、彼女がオフィスに入った時、キャプテンが彼女に寄り添い、「すべてが今から良くなるから」と彼は彼女に耳打ちした。

それからヘスターは自分の足で立ち上がり、残酷な現実の中で彼女のすべての残った力を振りしぼるかのように、絶望の中にあっても彼女自身の手をかたく握りしめていた。

キャプテンは彼女に、「さてどうでしょう！あなたのお父さんとお母さんを幸せにするためにもしるしのマークを受ける準備ができたと思いますが！マークを受けてあなた自身も自由になり、もう2度とあの狭い独房の中にもどることは必要なくなります。」と彼は彼女の肩に手を置いてやさしく言いました。

ヘスターは彼から瞬間的に身を引きました、「いいえ、私はマークを受け入れません、私の父と母がそれを受け入れたことは悲しいけど、だからといって、私は決して私の神を失うことはできません、」と彼女は神の御前でへりくだる気持ちでそれを言った。

彼女はキャプテンの目をまっすぐに見た、彼女の眼は神の栄光で光り輝いていた、「あなたが私に対してどのようなことをしても、私はマークを受け入れません。」「りっぱなことだ！」とキャプテンは荒々しく言った、「もしそれがあなたの望むことならば、私たちはそれを見ることにしましょう、あなたはまだ拷問を受けて苦しめられていません、人が苦しめられていない時は立派なことを言うことができる、私はあなたが両親のことを通して心変わりをすると思ったが、あなたは彼らに対してあまり愛がなかったようだ、あなたは人間じゃない。」と彼は宣言するかのように強く言った。

彼はそれからふたりのガードに合図をした、それから彼らはそこから出て行った、ヘスターは一体！彼らが何を考え、何をするつもりかとかたずをのんで待っていた、

その後、ふたりのカードが出て行った扉が開き、そこに彼女の父と母が立っていた。

「お父さん！お母さん！」と彼女はガードマンの手を離れて彼らに走った、「なぜ！しるしのマークを受け入れたの！」とヘスターは泣くように言った、彼女の両親は驚いて「私たちはしるしのマークを受け入れてはいません！」彼らはともに当惑して言いました、「あなたは何を言っているのか！」

「お父さん！ あなたはあなたとお母さんがしるしのマークを受けたので私にもしるしのマークを受けるようにと手紙を書きませんでしたか！」

彼女は彼らを見つめて不思議そうにたずねた。

「いいえ！そんなことはしていない。」と彼ははれた唇で答えた、「私はそのような手紙は書いていない、彼らはあなたをだまして、しるしのマークをあなたに受けさせようとしたに違いない。」

もっと多くのことを語る前に、ヘスターは両親から切り離された、彼らの命はもはや火のともしびでした、ヘスターはそれを感じていましたが、彼女のお父さんとお母さんがマークを取っていないということで彼女の喜びは頂点に達していました。

「ありがとう、神様」と彼女は何度も何度も小さな声で言いました。

キャプテンはフランクとスーザンを外庭へ連れていくために命令を与えました、ヘスターはその時が近づいていると感じ取って、もはや3人で彼ら自身の血を注ぎだして信仰を全うすべきだと思っていました、彼らは高さ3フィートぐらいあると思われる処刑台のようなもののところに導かれました、そしてその上には鋭い剣を持って立っている男がいて、その建物の上の右側には油を沸騰させていた大きな器がありました、母親、父親そして娘の3人が手を握りしめてそこに立たされているという悲しい状況でした、しかしながら彼らがどのようにして殺されるか、または死ぬかを彼らは知りませんでした、どれほど残酷であろうとも、それはすぐに終わってしまうことであり、そののちには勝利が彼らのために待っていたのです。

フランクは彼らによってその建物の上に来て手を置くように命じられた時、彼の妻と娘に別れのキスをしました、スーザンも彼と同じようにするように命じられました、その時、ヘスターは母親にしがみつき強く深く抱きしめました、それからガードマンは彼らのことを宣言しましたが、ガードマンが完全に準備ができるまでの少しの間、彼女たちは互いに見つめ合いその愛を残すところなく確かめ合っていました。

「私の愛する子、強くありなさい！」スーザンは息が詰まりました、「くじけることがないように、私たちは向こう岸で再び共に会うことができるのですから。」

彼らはヘスターがコントロールを失うだろうと思って彼女に手錠をかけ近くの棒にかけた、その場所から彼女はすべてのことを見渡すことができた。

スーザンとフランクは青ざめた表情であったが彼ら自身の死を待つ間、静かで落ち着いていた、しるしのマークを受けた多くの人々が彼らの死を見るために集まってきた、そして彼らは獣政権に対して名誉と栄光を与えていた、人々はざわめいていたがすべてが静かになりました、彼らとは反対側に坐って処刑台の近くにいたキャプテンの目は不気味にきらめいている感じで冷たい笑いが唇にあった。

「フランク・ウィルソン、自分の神への信仰をすてて、獣 (BEAST) 真実の神に仕え

ることを求めますか？」

「いいえ、」と彼は尻込みせずに答えた。

「それでは獣の政権の名によって、私はあなたの手を切断するように命じます。」

フランクは目を閉じました、剣を手に持った男が力強くその武器をあげてフランクの手を両方とも切断し、そして油が沸騰している器の中に投げ込みました。

ヘスターとスーザンは恐ろしさのあまり大変な悲鳴をあげました、それだけではなく彼女たちには油の中で彼の両手が音を立てて揚げられる音までも聞こえてきたのです。

スーザンも同じように信仰をすててマークを受け入れるかどうかを尋ねられました、
「いいえ、」と震える唇で彼女は答えました。

同じように剣を持った男は勢いよくその鋭い剣をおろし彼女の手を両方とも切断しました、彼女は苦悩の中で信じられないほどの悲鳴をあげました、ガードマンはそれを共につかみ上げ、油の沸騰している器の中に投げ込みました。

フランクとスーザンは再びマークを受け入れるかどうか尋ねられました、しかし答えは同じ「いいえ」でした、次に彼らの耳が切り落とされ、その油の中に投げ込まれたのです。

ヘスターはここで少しの頭痛とともに吐き気を催すようになりました、「おお神様！ なぜ私たちはラブチャーを信じなかったのでしょうか！ あなたののみことばがこのような時代が来ると伝えていたのに愚かにも私たちはなぜ信じなかったのでしょうか！ どうか私たちが強くなることができるように私たちに助けてください、おお神様、お願いします。」と言い、彼女は「私たちは今までにないほどあなたの助けを必要としています。」と願った。

そして、彼らが再び獣を崇拜することを拒絶した後に、ガードマンは彼らの舌を突き出すことをフランクとスーザンに命じました、そして彼らの舌が切り取られました。

ヘスターはヒステリックにそして狂ったようにわめき始めました、彼女はそれを制御しようと試みましたが、彼女にはその力がなかったようです、ひとりのガードマンはヘスターに向かって静かにしろ！と怒鳴りましたが、彼女はそれでも自分自身でそれを止めることができなかつたようです、別のガードマンが彼女に向かって走り、彼女の口の中に口止めを押し込みました、それで彼女が出すことのできる音は口の中でごぼごぼという音だけとなりました、彼らは悪魔が完全に支配している者たちで神の子たちに対してどのような残酷なことでも出来たのです。

フランクとスーザンは実に残酷な拷問が続くことによって彼らの目から涙が止まらなくなり、彼らのビジョンが涙でぼけてきました、ヘスターはひとりのカードが鋭いとがった物を持って彼らの目玉をえぐり出した瞬間を目撃しました、そこから大変な血が顔中に流れ出し、その血は彼らの体の部分が投げ込まれた油の壺の中にまで至りました、その時、ヘスターは彼女の母が意識を失ったのを見て神に感謝しました。

彼らは彼女の母の体を床に置いて、彼女の足を切断し油の器の中に投げ入れました、それから彼女の腕、そして肩を切断し油の中に同じように投げ入れました、そして最後に彼女の頭も切り離され、ほかの体の部分と同じように油の中に投げ込み

ました。

ヘスターは母親の体が油の中で揚げられるのを見ることができ、その音を聞くことも出来ました、それと同時に彼女の鼻に吐き気を催すようなにおいも伝わってきたのです、彼女はその耐え難い場面を見ることができなくて目を閉じました、しかし、彼女が目を閉じたとき、彼女から目を離さないようにそばに置かれていたガードマンが彼の剣の先で彼女を突き刺すのでした。

彼女はこの処刑が始まって2度も気絶しました、そのたびにサディスト的なキャプテンは彼女の目が覚めるまで彼女の両親の拷問を止めるようにガードマンに命じました、彼はヘスターが目をそむけることを許さなかったのです、彼は彼女の霊と精神を壊そうと必死だったのです、彼女はその残酷な場面を見続けることができず、彼女の霊と精神は一時的にはそれらに耐えることができなかったのです。

フランクの体も処刑台の上に置かれ、体中に走る耐えきれない鋭い痛みと苦痛のためにもはや限界に来ていました、その時に彼らは彼の腕、そして足、そして頭を次々に切断し、油の器の中へ投げ込みました、見ていた多くの人々は獣（BEAST）に対して賞賛の叫び声をあげ獣政権に敬意を表していました、しかし、ヘスターの上には静かな落ちつきが下りてきました、もはや彼女の母親と父親は苦しむことがないのです。

ヘスターの口の中に押し込まれていた口止めは取り除かれ、彼女の顔は神の栄光とともに輝き、彼女は大きく澄んだ声で「神に感謝します、勝利が勝ち取られました、私の父と母は主とともに今、安全な場所にいます。」と叫んだ。

彼女自身も考えていない間に、このひ弱な少女の口から神の霊によって動かされた驚くべき言葉が出てきました、その時、マークを受けていた人々の間に怖れと震えが見えました、それから彼女がもう何も言うことができないようにガードマンの汚い手が彼女の口の上に押されました、そして彼女の手錠は取り除かれ、彼女のやわらかい手の上には赤く血で染まった傷跡が残るだけでした。

彼女は彼女の父親と母親が殺された処刑台を目の前にして、彼女自身の勝利もすぐ近くに迫っていることを感じていました、キャプテンの残酷で冷たい眼が注がれましたが、彼女はたしかに落ち着きを取り戻していましたが、彼女の心は動揺することなく、もはや彼女にとって死に対する恐れはなくなっていました。

「私は死ぬ準備が来ています。」と彼女は謙虚に言いました、「なぜ待つのですか！」

そのことはキャプテンをととても不愉快にしました、そして彼は「彼女を連れて行きなさい、」と呪いを込めて叫びました、「私はまだ彼女を殺する準備はできていません、私は獣（BEAST）の名によって、必ず彼女の霊と精神を崩してみせましょう。」

ガードマンは彼女の後ろから剣を突き刺し、刑務所に向かって行進するように彼女に命じました、彼女は彼女が願ったにもかかわらず、彼女の望みが拒否されたことによって失望していました、彼女は死ぬことを望んでいました、彼女にとって生きること何の意味もなく、逆に死ぬことは彼女にとってすべてでした、ガードマンは彼女を同じ独房に連れ戻しました。

彼女は独房に戻ったのちに、すぐに秘密の場所から聖書を取り出しました、涙を

浮かべた目で彼女は神のことばをページからページへと読み続けました、なぜ彼らは私を殺さなかったのだろう！ 彼女は彼らが殺す準備ができていることに疑いはありませんでした、ひょっとすると神には他の計画があり、彼女の命をこの世に引き留めていたのかもしれない、その思いは彼女の心に温かいものを感じさせた。

その同じ夕方にガードマンは独房の扉をあけて、身なりのいい30歳ぐらいの女の子を独房の中に押し込んだ、彼女は体中が震えていて呼吸も荒々しくあえいでいた、「私の名前はヘスター・ベル・ウィルソンです、ほとんどの人々は私をヘスターと呼びます。」と彼女は明るく遠慮なく言いました。

「私の、、名前は、、シルビア、、マッシューズです。」と口ごもらせた低い声で彼女は言った、「彼らは、、あなたも、、殺すつもりなのですか！、、あなたは、、クリスチャンですか！」

「はい、そうです。」とヘスターは誇らしげに返答しました。

その女性はヘスターに近寄って来た、彼女はもはやヘスターを恐れていない様子だった、「ひょっとしたら、あなたが私に神を見つけることを助けてくれるかも知れません、私は一生懸命努力しているのだけど、どうしていいのかわからないのです、私の家族は社会でとてもいい地位についています、彼らは皆、しるしのマークを受け入れました、そして私だけが取り残されたのです、私もそのマークを取ることができたのですが、私の知り合いの看護婦、彼女の名はオフィーリア、彼女は素晴らしいクリスチャンで神の子どもでした、彼女が私に主の2度目の来臨のことと、この苦難の時代のことを私にすべて教えてくださいました、しかしそれは私にとってその時、何か作られた作り話のようにしか聞えませんでした、それで私はそのことに対して真剣に考えてはいなかったのです。」

「ラプチャーが起きたあの朝、オフィーリアは主とともに天の御国に一瞬のうちに連れて行かれました、それで私は初めて彼女が私に長い間話してくれていたことが作り話ではないことを悟りました、」分かりますか！と彼女は低い声で語り続けた、「私の母と父は教会のことや聖書のことをほとんど話してくれたこともありません。」

「私の人生はオフィーリアが消え去って以来、2度と同じではありません、かつて私はこの世の中の人々が動く群衆について生きていたのですが、彼らが皆、しるしのマークを受ける時、私は彼らについていけませんでした、彼らは私の頭が少しおかしくなったのではと考え始めました、なぜなら私がしるしのマークを受けることを拒否したからです、と同時に私はオフィーリアのことと神のことをいつも話すようになったからです。」

「私の家族は家族の名をはずかしめるより、私を獣政権の軍隊に引き渡したのです、私はひとりのガードマンが私を次の朝、死刑にする計画があることを聞いたのです、私は今とても恐ろしいのです。」と彼女は流れる涙とともに息を詰まらせました。

ヘスターは「私にはそれがよく分かります。」と彼女に同情の声で伝えた、「私の母と父は今日、殺されました、そして遅かれ早かれ私も彼らに続いて殺されるでしょう、私はそれが今日であったらと何度も思いました。」

その女性はヘスターの話聞いて、ちょっととまどった様子で彼女を見つめた、いったい彼女はどういう人なのだろう！死に直面してこれだけ勇敢になれるとは、

「あなたは死ぬことを恐れないのですか！」と彼女はおどろいた様子でたずねた、ヘスターはそれに対して柔和に答えた、「肉体はその恐ろしさと苦痛のために尻込みをしますが、私は今日、神の霊におおわれて、とても元気づけられました、それで私は死を受け入れることができ、主とともにいたいと願うようになったのです。」

シルビアは「それで、もしあなたがそれだけ神に近い人であるならば、」と彼女の目に素晴らしい期待を持って、「必ずあなたは私が神を見つけることを助けて下さるでしょう、あなたは神が私の魂を救ってくださると信じられますか？」彼女は正直に尋ねた。

「もちろん、私は私の神がそれをあなたにして下さることを知っています。」とヘスターはシルビアの目をまっすぐに見て答えた。

ヘスターは秘密の場所から聖書を取り出しました、シルビアの目はそれを見て驚き、その聖書がオフィーリアがいつも彼女のために読んでくれていた同じ聖書であることを心から喜んだ、ヘスターはページからページへと聖書の箇所を読み、シルビアはそれを熱心に聞き、いのちの水を飲みました。

ヘスターがそれらを読み終わった時、彼女は神のみことばを開いたまま、シルビアにたずねた、「あなたは私が今まで読んだ聖書のみことばを信じますか？」

「はい」シルビアは彼女の頭を下げて躊躇することなくまっすぐに答えた。

「それでは、神がキリストを通して、あなたの魂を救ってくださるように一緒に祈りましょう。」ふたりは共に、神を忌み嫌っている人々から守られて独房の床にひざまずき祈りました、シルビアは涙を流しながら勝利の道へ導かれていました、それから彼女は輝いた顔で立ち上がり、驚くほどの恵みに包まれていました。

明日、死ななければならぬという思いは、彼女の心からその喜びを取り除くことはありませんでした、彼女は救い主を見つけたのです。

次の朝のことです、ガードマンがシルビアを連れて行く準備ができた時、ふたりの新しい友達の手を握りしめました、そしてお互いに川の向こう岸で再び会うことを約束して神の素晴らしいいのちの救いを喜びました。

「さようなら、私が神を見つけるのを助けてくれて本当にありがとう」とシルビアは彼女が死に向って歩いていることを自覚してヘスターに言いました。

ヘスターは涙を浮かべた目で独房の中の小さな窓からシルビアがライオンの穴に向かって勇ましく歩いて行く姿を見ていた、シルビアはまっすぐ立ち、そこには恐れが感じられなかった、彼らは彼女をライオンのいけにえにする前に、もう一度彼女にマークを受け入れるかどうかをたずねた、彼女はすばやく頭を横に振った、彼女の顔は神の栄光に満たされ、手をあげて天を指さしていた、彼女には何の暗さも見えず、ライオンの穴に向かって歩いて行った、天上では天使たちが金で造られた通りの中で賛美の歌を歌っていた、なぜなら、ここに再び新しい魂が悪魔に打ち勝ち天の御国へ帰ってくるからです。

ヘスターの心は悲しかった、しかし、シルビアが信仰の中で栄光の死を遂げたことを喜んでいて、もしあの時、ヘスターがああ独房にいなかったら、シルビアはこの栄光の死を経験することはできませんでした、ヘスターは今、なぜ彼女が両親とともに殺されなかったかを悟りました。

第11章

ジムは雷のような音を聞きました、それは非常に大きい音で地球自体が動いたような感じがしました、扉を開いて空を見上げると彼の心に恐れが入ってくるのを感じました、何を意味しているのだろうか！ 彼は今までにそのような音を聞いたことがありませんでした。

もしジムが見ていた雲の向こう側を見ることができたならば、そこには口にトランペットをあてた光る天使たちを見ることができたでしょう、ジムは緊張して少し待ちました、何が起きるのだろうか！

「私たちはもう十分に苦しんだのではないか！」ジムは恐れの中でつぶやいた、彼は天を見上げて神の名前を冒瀆しました。

突然のように空からあられと火が血と交わって雨のように降ってきた、それはジムにとって今まで経験したことのないような恐れだった、彼は近くにある大きなビルディングに他の多くの人々とともに逃げ込んだ、彼らは必死になって天からおりてきた神のさばきから逃げようとしてきたのである。

窓から見つめていたジムはすべての緑の草は焼かれ、三分の一の木が滅ぼされるのを見た、いくらかの人々はその時に逃げ道を失って、その死体が道ばたにころがっていた、一体これは何が起きているのだろうか！ ジムは半狂乱でその答えを記憶の中に探していた、それから彼は母親のブラックリストの中に書かれている聖書の中の黙示録 8章の中の預言の恐ろしい出来事を思い出した。

「それはあり得ない！」彼は叫びました、「それは絶対にあり得ない、私はあの本を焼いたのだから、なぜその内容が私の大脳に繰り返し戻ってくるのだろうか！ 私がそれをすべての力を持って忌み嫌ったのだから、私はそれを絶対に聞かない、」彼は叫んだ、しかしジムはその記憶を彼の大脳から消すことはできなかった、それは彼を悩ますために彼の中にとどまり続けた。

嵐が終わった時、別の恐ろしい 突風が吹き始めた、天から第二の御使いがラッパを吹いた、そしてジムは大きな火の玉を見た、それは大きな山のようにも見えた、それは天から降ってきて海に落ちた、そしてそれはすぐに赤い海となり、目で見てわかるようにそれは血に変わった、ジムの心臓は非常に強く連打し始めた、他の多くの人々はその様子を見ようと海に向かった、ジムも同じように急いだ、海の全体が血のようになるなんてとても信じがたいことだ、しかし彼らの目はその現実をまっすぐに見ていた、それはまさしく事実でジムも見ると、それはまさしく血だった、三分の一の海の中の生き物は死んでしまった、そして三分の一の海の中にあつた船は壊された、人々はそこに立ちすくみ海が死者を吐き出すのをただ見守るだけだった、それはまさしく神の裁きの怒りがこの罪深い人類の上に降りて来たのだ、しかし、人々はそれでも彼らの罪を悔い改めなかった、彼らは神の名前を冒瀆し、それをけがし続けた。

“それから第3の御使いがラッパを吹き鳴らした、するとたいまつのように燃えている大きな星が天から落ちて来て、川々の三分の一とその水源に落ちた。

この星の名は苦よもぎ（にがよもぎ）と呼ばれ、川の水の三分の一は苦よもぎのようになった、水が苦くなったのでその水のために多くの人々が死んだ。“（黙示録 8章の10, 11）

もうすでに幾日かの日が過ぎた、アラベスタの市には飲み水がありませんでした、飲み水を求めているのに、それが血であるとわかる時、それは何と吐き気さえ催させる気分になることでしょう！ ジムののどの渇きは限界に来ていた、人々は現実に飲み水がないことの渇きで死んでいたのです、すでに市全体が水を求めて狂った状態になっていた、彼らは他の飲み物、例えばジュースなどで生きのびていた、しかしながら、冷たい水ほどにのどの渇きをいやしてくれるものはありませんでした。

誰かが叫んだ、「水が向こう側にある、」すると人々は彼の指さした場所に狂ったように殺到して行きました。

ジムの乾き切った唇は、冷たい水を求めて痛みました、彼はその水たまりを求めて殺到してくる人々を殺しても自分自身に水を求めていたのです、ある人々は力がすでに弱く、他の人々に命ごいをしてまでも水を持って来てくれるように頼みました、しかしジムはその人たちを呪い、蹴り飛ばしてまでも自分の道を邪魔する者を退けました、彼は他の人々のことは全く考えず、考えているのは自分自身のことだけだったのです。

ジムがやっとの思いで水たまりの所まで来た時、人々はひざまずいてその水たまりから水を飲んでいました、自分の命を救うためには自分の前にいる人を押しのけなくてはなりませんでしたが、ジムは気短にその人が動くのを待ちましたが、その人は動く様子がありませんでした、ジムはもう少し待ちました、それから彼はその人にどなり始めたのです、「ふざけるな！ もういい加減にしろ、お前のうしろで誰かが待っているのに気がつかないのか！」

それでもその男は動きませんでした、そしてジムはその男を後ろから蹴り飛ばし、彼の顔を自分の方に向けさせた、彼は死んでいたのです、その瞬間、ジムの頭にみことばが思い出された、“水が苦くなったので、その水のために多くの人々が死んだ。”

「聖書！」ジムの脳に浮んで来たことば、彼は怒り狂った、「私はあのひどい本を焼いて捨てたのに、なぜ！ その本のことばが帰って来るのか、私はそれを本当に焼いてしまったのに、“彼は叫んだ、「どうして！ こういうことがあり得るんだ。」

ジムは神のことばを焼きました、しかし、彼はそのことばを心から消し去ることはできなかったのです、人の話したことばは死んでしまいます、しかし神のことばは永遠に生きるのです、彼のことばは“いのちのことば”死はその中にはありません。

ジムは怒りと狂気の中で水たまりの苦い水を飲んで死んだ人々の体を残して逃げ去りました、彼の口からは神に対する冒瀆のことばが次から次へと出てきます、神が人々にさばきとしてこれらの疫病を送られていたからです、彼らは何も悪いことをしていないのに、なぜ神は彼らを苦しめようとするのか！ この神は 実に冷たい神で、ただこの全宇宙を支配しようとしているだけだ、しかし、それもそんなに長くは続かない真実の神である獣（BEAST）が現れて、この神を地の底にたたき落とすのだ。

その時、空から大きな音が聞えて来てジムの不敬虔な思いを中断した。

“第4の御使いがラッパを吹き鳴らした、すると太陽の三分の一と月の三分の一と星

の三分の一とが打たれたので三分の一は暗くなり、星の三分の一は光を失い、また夜も同様であった。”（黙示録8章の12）

このような破壊的な形で悲劇が次々と起きたことによって、人類の心にはことばに言い表わすことのできない恐れが生じた、昼も夜も人々は神のさばきがこの世に来たことを思い出させられた。

突然のようにあたりが暗くなりはじめた、ジムはすぐに自分の時計を見て、信じられないという様子で周りを見回した、「そんなはずがない！」とジムは叫んだ、「今は真昼の正午なのに、私の眼がおかしいに違いない。」と彼がつぶやいている間にも、周りはどんどんと暗くなっていった。

その時、ジムは猛烈な突風の音を聞きました、しかし、彼は天使が底知れぬ穴を鍵を持って開くのを見ませんでした、穴が開かれるとちょうど大きな炉が開かれたように、その煙のために周りのすべてを暗くした。

ジムがこの地上に神のさばきの夜が現実に来たことを悟った時、煙は消え去り始め、彼がかつて一生のうちで見たことのないほどの恐ろしい光景を彼の目の前に開いていった、それは彼の体中の血液を凍らせてしまうほどに恐ろしい光景で、彼は叫ぼうとしたが声にならず、彼の唇は何も感じることができず、彼の舌は動かなかったのです、彼はしばらくの間、その場所にショックと恐れの中で震えながら立ちすくんでいました。

“その煙の中から、いなごが地上に出てきた、彼らには地のさそりの持つような力が与えられた、そして彼らは地の草やすべての青草や、すべての木には害を加えないで、ただ、額に神の印を押されていない人間にだけ害を加えるように言い渡された、しかし、人間を殺すことは許されず、ただ五ヶ月の間苦しめることだけが許された、その与えた苦痛はさそりが人を刺した時のような苦痛であった、その期間には人々は死を求めるが、どうしても見いだせず死を願うが、死が彼らから逃げてゆくのである、そのいなごの形は出陣の用意の整った馬に似ていた、頭には金の冠のようなものを着け、顔は人間の顔のようであった、また女の髪のような毛があり、歯はししの歯のようであった、また鉄の胸当てのような胸当てをつけ、その翼の音は多くの馬に引かれた戦車が戦いに馳せつける時の響きのようであった、そのうえ彼らは、さそりのような尾と針とを持っており、尾には五ヶ月間人間に害を加える力があつた。”（黙示録9章3-10）

さて、人々はこの恐るべき動物から我先に逃げようとして町中が大変な混乱となりました、人々の中でいなごに刺された人は助けを求めて悲鳴をあげますが、誰ひとりとして彼らを助けることはできませんでした、いなごは獣のしるしのマークを受け入れた人々だけを刺しました、そして彼らは逃げることはできませんでした。

ジムは、しばらくの間、恐れと驚きのあまり動くことができませんでした、やっとの思いで体を動かし、裏通りから表通りへと走り続け、何とかしてこの恐ろしい動物から逃げ出そうと必死でした、彼は必至で走り、呼吸を困難にさせながらも動物に刺された人々の悲鳴を後にして走り続けました。

それから彼はどれだけ走ったか！思い出せないほどでしたが人々の悲しい叫び声は彼の耳に聞こえなくなりました、それで彼は少しの間、休むことにしました、彼の胸は苦痛を覚えるほどに激しく心臓が鼓動を打っていました、それから彼は見知

らぬ家の前に来て、そのレンガのステップの上で腰を下ろし、この恐ろしい疫病を送った神に対してその名前を冒瀆し始めた。

ジムがそこに坐って間もなく、彼の鋭い耳が新たな雑音を耳にしました、そしてそれは徐々に大きくなり近づいてきました、彼の心臓は再び動きが速くなり、その音が何であるかを恐れていると同時に、彼は大きないなごが彼に恐ろしいほどの速さで走って来るのを目撃しました、その光景は彼が今まで見たことも、想像したこともないほどの恐ろしいもので、その顔は人間の男の顔のようであり、髪の毛は女性の髪の毛のようであり、その歯はしし、ライオンの歯のようであり、翼は大きく両方に広がり、頭の上には王冠があり金色にきらめいていました。

ジムは苦しみながら立ち上がりました、彼は恐れのために体中が弱くなっていましたが必死になってあの恐ろしい創造物のいなごから逃げようと走りだしました、彼の後ろからはあのおそろしい動物のほえる声を感じることができるとはそれは接近していたのです、もし彼がもっと速く走ることができれば、と思いながら、すでに彼はその後ろからその動物の荒い息を彼の首すじに感じるようになっていました、彼は必死になって逃げていましたが、もうすでに逃げる道が閉ざされたようです。

彼は石につまずき金切り声をあげて倒れ、あのおそろしい動物は彼の上にライオンのようにおおいにかぶさってきました、彼はその恐ろしい動物をまっすぐ見ることができず目を閉じました、そのとき彼は必至で獣（BEAST）の名を呼び、助けを求めましたが答えはありません、いなごは彼のうしろのしっぽを使ってジムを何度も何度も刺しました、そのとき彼の中に燃えるような痛みが走り、体中に広がっていきました、その痛みは彼がこれまでの人生の中で一度も味わったことがないだけではなく、そのような苦痛が存在するという事を夢にも想像したことがありませんでした、次の瞬間、彼は目の前が真っ暗になっていく経験をし、彼は自分が確かに死んでいくのだと感じましたが、そのこと自体、彼にとってどうでもよかったようです、その時の彼にとって死ぬこと自体はこの悪夢のような苦痛と苦しみから逃げることができる唯一の道だったのです、そして彼は気を失いました、彼が覚えているのは、ただあのおそろしい動物と全力で争っていた事と神の名をけがし、冒瀆していたことだけでした。

数時間が過ぎ、その後には彼はあの恐ろしい経験をしたにもかかわらず、自分がまだ生きていることを知りましたが、体を彼が動かすたびに体中の神経が燃える火で焼かれるような鋭い痛みを覚え、動くことができず横になったままで、何という拷問だったのだろう！と思い起こしていました。

極度の苦痛で満たされた日々が過ぎて行き、しるしのマークを受けていた人々は徐々にいなごから受けた苦痛から解放されていきました、しかし再びいなごの攻撃を受けると、その苦しみがまた始まるのです、ジムはおよそ5ヵ月間、昼も夜も苦しみ続けました、彼らの苦しみが終わり始めると再びいなごは攻撃を始めてくるのです。

人々はこの時期に彼ら自身の命を断とうとしますが、聖書に書かれている通りの5ヵ月の間の苦しみの時期にはそれがどうしても出来ません、”その期間には、人々は死を求めるが、どうしても見いだせず、死を願うが、死が彼らから逃げて行くの

である。“（黙示録 9：6）

人々の中には高いビルにのぼって、そこから飛び降り自殺を図りますが、彼らがそこに到着して実行に移そうとすると、彼らにはその力がないことに驚かされます、極度の苦しみから逃げようとして、あらゆる形で命を断とうとしますが、死が彼らから逃げて行くのです。

「これだけ終始苦しめられ生きなければならないのであれば、生きている価値がどこにあらう！私は私自身でこの人生を終わらせる。」とジムは宣言するかのようにつぶやきました。

ジムは彼のポケットの中に拳銃を見つけましたが、そのやり方よりも橋の上に登ってそこから飛び降りておぼれ死んだ方がいいと考えました、なぜなら彼はいつも昔から水におぼれて死ぬことが一番楽な死に方だと聞いていたからです、彼の心の中にはどれだけ、このような苦しみをこの地上に送った神に対する憎しみがあつたことでしょうか、しかし彼は同時に、いつの日か、獣（BEAST）がこの神を天の御座から落とし敗北させることを信じていたのです。

今の彼にとっての時間は永遠のように長く感じましたが、やっとの思いで橋の上にたどり着きました、それから彼は橋の上から流れる川を見下ろして、もう少しですべてのことが終わると自分の心につぶやきました、ところが驚いたことに橋の上に立って飛び降りようとした時、彼にはその力がなかったのです、彼は何度もそれを試みましたが、それが彼には出来なかったのです、それから聖書のことばが彼の脳に浮かび上がって来ました。“人々は死を求めるが、どうしても見いだせず、死を願うが、死が彼らから逃げて行くのである。”（黙示録 9：6）

ジムは怒り狂って周りを見渡しました、「一体！誰が自分の命をとることができないと言ったのか！」

すぐに彼は、その言葉がどこから来たかを悟りました、「あの憎むべき本！聖書だ、私を自由にさせない、何の権利があつて人間にできることと、できないことを命令するのか！歴史上人々は、時代を通して自分の命を終わらせたい時に終わらしているのだ。」と彼は軽蔑した言い方で叫んだ。

彼は両手を天に向けて、必ず自分の命を取って終わらせると宣言した、そして彼は自分のポケットの中から拳銃を取り出し、彼の頭の横に拳銃の先をあて、力の限りそれを実行しようとした、ところが驚くことに彼にはその力がありませんでした、そこで彼は橋の上に倒れ、神の名前をけがし始めた。

ジムが来た道と同じ方向から、橋を横切って来るひとりの人がいた、その少女はやせていて、とても弱々しかった、それは確かにメリーコンウェイだった、彼女はヘスターとジムの母とともに同じ教会に行っていた人だったのです。

メリーはとても苦しい経験をしていたが、まだしるしのマークを受け入れてはいなかった、彼女は昼の間はこの橋を渡ることができないで、この夜を選んだのだった、彼女がもし、クリスチャンで魂が救われている人であるならば、死を恐れる必要はなかったのだが、彼女はまだ、その主のいのちの救いを見い出してはいなかったのです、もし彼女にとって信じるのが自分自身でできたならば、しかしそれは彼女にとってとても難しかったのです、この世全体が悪魔の手に渡され、彼女が祈りをしようとするほど悪魔の声が彼女を邪魔していたのです。

彼女が橋のところまで来た時、彼女はまわりを見回して深いため息をつきました、彼女を追っている人々からの恐怖のゆえに彼女はジムの存在にも気づきませんでした、ジムは彼女の足音を聞いて「助けてくれ！助けてくれ！」と叫びました。

メリーは一瞬逃げようとしたのですが、“ひょっとするとクリスチャン（神の子）かもしれないと思って立ち止まりました、もしそうならば、その人は私が神を見つけるのを助けてくれるかもしれない”という思いによって彼女はジムに近づいたのです。

はじめ彼女はジムを認識しませんでした、彼の髪の毛は長く、汚れていてひげを剃った様子もなく、彼の着ている服は裂かれてボロボロでした、彼女の心臓の鼓動はとても速く打ち始めました、しかし何かその人について親しみを感じるものがあったのです、彼女はその人にどこかで会ったことがあるように思いましたが、彼女が思っていた人とはとても遠く離れた感じがしていたのです、その時ジムは頭をちがう方向にむけて彼の顔が彼女によく見えるようにしました。

「ジム！」と彼女は叫びました、彼女は自分の命の危険をも忘れて彼に近づきました、そして「ジム！私を覚えている！」と彼女は喜びの中でたずねました、彼女はジムを見つけたことの喜びで彼女の眼からは涙があふれました。

「ジム、私はメリーです。」彼女は声を震わせながら語りつづけた。

ジムはメリーを小さい頃からずっと知っていて、彼らはともに育ったのです、メリーには兄弟がいませんでした、それでジムが彼女の兄のようにふるまっていたのです、ジムは彼女より年上でした、彼女はのちに大学へ行って、ふたりは離ればなれになっていたのです。

「ジム！あなたは取り残されてしまったの！あなたのお母さんはいつもあなたのことを思っていて、彼女が主とともにこの世を去る前の日まで、あなたのことを祈っておられたのですよ、」と言って彼女は声をつまらせた、「私はあなたは救われてラプチャーに行ったのだと思っていたのに、ジム！それで主の救いを見いだしたの？」彼女は心配そうに耳を彼に近づけてたずねた。

「主の救いを見いだすって、どういう意味だ！」ジムはことばをもつれさせた、「ところで、あそこに拳銃があるだろ！それを拾いあげて私の命を取ってくれ」「とんでもない、ジム！」彼女は叫びました、「私にはそんなことはできない、いっしょに祈りましょう、神が私たちを助けて下さるから。」

このことでジムは狂ったように怒った、「神を追い払え！」彼は右手をあげて叫びました。

メリーは驚いて彼の右の手のひらを見つめました、ジムはしるしのマークを持っていたのです、彼女は心の中で思わず窒息しそうになり、制御できずに体中が震えてきましたが、やっとの思いで立ち上がりました、長年の間、彼女の友達として、また兄弟のように愛情を交えていた人が、今、彼女の敵となっていたです。

ジムは彼女をにらみつけ、「あそこにある拳銃が見えるだろ、それで私の命を取ってくれ、」彼女は後ずさりしました、ジムは続けて「あなたにはそれ以外に選ぶ道はないんだ、そうしないと私はこのホイッスル（警笛）を吹くぞ！そうするとどうなるか、あなたにもよく分かっているはずだ。」

「できない、ジム！」と彼女はヒステリックに叫びました、「できない、できな

い、」彼女は彼から逃げるように橋の向こう側に向かって走り出した。

「戻って来い！」とジムは叫びました、「戻れ！ばか者」

鋭いホイッスルの音はメリーの体中に冷たいものが走るのを感じさせました、獣（BEAST）政権のメンバーはすぐにでも彼女を見つけ出すだろうと彼女は知っていました、その通り、彼女が橋の向こう側に渡る前に足跡が聞こえて来て、彼女の後ろから男の声が聞こえてきました、「止まれ！止まれ！」

彼女は走り続けました、そして必死で祈りました、「神様！どうか私を助けて下さい、どうか彼らが私を捕えることがないように、私はまだ魂が救われていません。」

彼女は必死で走り、全力で逃げようとしたのですが、恐れと飢えからくる肉体の衰えと弱さによってそれは不可能のように見えました、彼らは彼女のすぐ近くまで来ていたです、それから荒々しい手が彼女をつかみました、そして彼女は自分自身が悪魔の手の中に落ちていくことを悟りました、彼らは彼女をつかまえて引きずり始めた時、栄光と誉れを獣（Beast）にと叫び続けました。

「どうか、神様！」と彼女は祈りました、大変な恐れが彼女の心から体へと入りこんでいくかのように彼女を包み込みました、「どうか神様！私があなたを見つける前に彼らが私を殺すことがないように！」

その後には彼らは彼女を門を通して拷問の庭へと導きました、彼らは彼女を刑務所へ連れていくことをせずに、直接に拷問の庭へ彼女を連れて行き、彼女の命をそのまま取ろうとしたようです。

「私を殺さないでください！」と彼女は叫びました、「私はまだ救われていません、どうか私に少しの間の祈りの時間をください。」しかし彼らは彼女の言葉にひとかけらの注意も払いませんでした。

ガードの男は手の中に鋭い剣をもって彼女の前に立ちました、彼女はすでに気力を失い、それは一見、神が彼女を見放されたようにも見えました。

「おお神様！私の魂を救ってください。」彼女は叫びました、しかし、すべては暗やみしか感じられません、彼女はどうしても神を見つけ出すことができませんでした。

次の瞬間彼女は「しるしのマークを受けるか？」と尋ねられました。

彼女の体中が震えて止まりません、望みもなく、神も見いだせずに死ぬことは、何と悲しいことでしょうか！メリーは確かに悟っていましたが、しるしのマークを拒んで死んでも、それは彼女の命を救うことはできません、彼女はイエスの流された血を通して生まれ変わりの経験を持たなくてはならないのです。

彼女は必死で首を横にふり、「私はしるしのマークを受け入れません、でもどうか私を殺さないで下さい」と言った。

しかし、冷たくあわれみのない手は彼女を処刑台の上に置き、剣を手にした処刑人は彼女の首を肩から断ち切る準備を始めました、その時突然のようにひとりの兵士が彼に近づき処刑を中断させました、獣（Beast）反キリストがこの刑務所に立ち寄り、そのことですべての兵士たちは任務を中断したのです、「獣（Beast）に栄光を」と兵士たちは叫びました。

剣を手に持っていた処刑人の兵士も、すぐに剣をおさめて、「獣（Beast）に栄光

を」と叫びました。

「もうしばらくすると、獣 (Beast) 反キリストが私たちの町に立ち寄られ、この刑務所を通過されるから、」とひとりの兵士が興奮した身ぶりで話した、「さあ、門を開けて、彼は処刑台のある拷問の庭を見たいと望んでおられるから」

彼らはメリーの処刑を中断しました、多くの人々は門のまわりに集まりメッセンジャーが示した場所が集まってきた、メリーは兵士たちの手によって急いで刑務所の独房の中に入れられました、彼女にとっては何という救いだったことでしょうか、彼女の命は少しの間ですが生き延びることができたのです、ひょっとすると彼女は主の救いを見いだすことができるかもしれません。

彼女は独房の中から小さな窓を通しておびえながら外を見た、そこからは門のゲートから町に続く道までも見ることができました、そしてそれを彼女が見たとき、彼女は息をのみ込みました、何千という人々が道を完全にふさぎ、目の見える限りそれは人々でいっぱいになっていました、多くの人々はひざまずいて顔を地に伏して「獣 (Beast) 永遠に生きよ！」と叫び続け、ハレルヤと誉れと栄光を彼に向かって唱えていたのです、これらの出来事はしるしのマークを受けていない人々にとってはとても恐ろしい光景だったのです。

ちょうどその時、一つの戦車が六つの豪華な白馬によって引かれて出て来ました、その美しさははっと思わせるもので、戦車はあらゆる種類の宝石でおおわれていました、サファイア、碧玉、エメラルド、玉髓、紫水晶などで、車輪はダイヤモンドで輝き、白馬を引いているギアは金でした、それはメリーが今まで見たものの中で最も美しい光景でした。

戦車に乗っていた人の姿は彼女をぞっとさせました、彼は火の炎のような眼をもっていて、大きな輝くダイヤモンドで散らばめた白い衣を着て、彼の腰の周りには金の帯をつけていました、そのうえに彼は小さな宝石で飾られたターバンを頭の上に着けていたのです。

突然、行列は止まりました、反キリストが戦車の上に坐り、その前には同じような衣を着た、にせ預言者が彼の前に立ちました、そして反キリストは天上を見上げ、天から火の炎を呼びました、すると突然のように天の空が開き、人々の目の前で火の炎が下りてきました、多くの人々の中にはしるしのマークを受けていない者もいて、反キリストは彼こそが奇跡を起こすことのできる神であると宣言していたのです。

メリーは独房の窓からそれらの出来事を見ている時に、偉大な祈りと崇拜の霊の力を感じました、その力はとても強く、彼女をひざまずかせ礼拝させるような力を持っていました、しかし彼女はこれが真実の神ではないことを悟っていたのです、彼女は自分自身の心を欺いて反キリストにひざまずくことはできません。

行列は再び動き始めました、人々は一体となって一つの声のように叫び始めました、「獣こそが真実の神、獣は永遠に生きる」その声は一つの水のような声となりました。

戦車は門のゲートを通り抜けて刑務所に近づき始めました、獣、反キリストはまっすぐに前を見て、次の瞬間、彼は突然のようにメリーに目をとめました、その目は鋭く彼女を見つめました、彼女はこれほどまでにひとりの人が彼女に対して力を

持ち、支配できる感覚を持つことができるとは考えてもいませんでした、彼女は彼を礼拝しひざまずいて祈らなければならない感覚で包まれていたのです。

「どうか神様！私は血を通して祈ります、イエスの血を通して祈ります」彼女の声はつまりました、獣、反キリストの力は彼女の魂の中まで見通すことができるほどの力を持ち、彼女の思いのすべてがすでに読まれているような感じでした、メリーはとても弱くなりましたが、必死の思いで窓の鉄棒にしがみつき倒れないようにしていたのです、反キリストが彼女に示した力は信じがたいものでした、もし彼がもう1分間長く彼女を見つめていたら、彼女はおそらく崩れ落ちて彼を礼拝していたことでしょう、反キリストの力はそれほどまでに強く恐ろしいものでした、しかし戦車がゆっくりと過ぎ去って行くとともに彼の眼はメリーから離れていきました、彼女は独房の床に倒れ、体は制御しがたいすすり泣きでふるえていました。

「おお神様！」と必死になって彼女は、「どうか私が信じることができるようになって下さい」と叫んだ、そのようにしてメリーが独房の床の上に横になった時、彼女はとても大きな雷のような音を聞きました、彼女がじっとして聞き入っていると、多くの人々の悲鳴が外の通りから聞こえてきた、一体何が！彼らを突然のように変えてしまったのだろう、もはやそこには獣に対する賛美の声や喜びの声はなく、メリーの心臓の鼓動はとても速くなってきました。

彼女は独房の窓から反キリストの乗った戦車が不思議な力によって空のかなたに消えて行くところを見たばかりでした、6頭の白馬、そして戦車、反キリスト、そして、にせ預言者は偉大な鳥のように空の中に消えて行ったのです、メリーはその光景にぞっとするものを感じていました、それはまさしく魔術に似ていたからです。

しかし、その後多くの悲鳴が町の通りから出てきたことによって彼女は独房の窓から見下ろした、突然のように彼女の眼は恐怖と驚きでいっぱいになった、何百ものライオンが人を背中に乗せて町の通りから押し寄せていたからです、しかしそれはライオンのものであってそうではありません、彼らはライオンのような頭を持っており、体は馬のようであり、しっぽはさそりの尾のようでその尾には頭があり、それで人々に噛みついていました、その奇妙な動物の上に乗っている何者かは火と硫黄が燃えているような胸当てをつけ、馬の口からは火と硫黄が燃える煙のようなものを吹き出していた、これらの動物は至る所で人々を滅ぼしていた、その光景はぞっとするものであった、これらの動物はまさしくヨハネの黙示録の9章に書かれているそのものであった、“騎兵の軍勢の数は2億であった、私はその数を聞いた、私が幻の中で見た馬とそれに乗る人たちの様子はこうであった、騎兵は火のような赤、くすぶった青、燃える硫黄の色の胸当てを着けており、馬の頭はししの頭のように口からは火と煙と硫黄とが出ていた、＝馬の力はその口とその尾とにあって、その尾は蛇のようであり、それに頭があって、その頭で害を加えるのである。”

(黙示録9章の16, 17, 19)

彼女にとってそれらの破壊的な出来事と馬に乗っている何者かを見ていることはまさしく悪夢のようであった、人々は彼ら自身を守るために武器をとった、そして多くの銃弾が発射された、しかし、何ひとつ馬に乗っている何者かを打ち滅ぼすことはできなかった、この集団はまっすぐに町を通り抜け、多くの死者を出した、またこれらの生き物が通り抜ける時、その吠える声は雷のようであり、そのあとに

は多くの死傷者、そして血まみれになって倒れる人々を残した、それはまさに激しい戦場のようであった、人々の中で生き残った者はそれでも神を認めず、彼らの悪を悔い改めようとはしなかった、それどころか神の聖なる名をけがし続けた、それで神は天からさばきをもっとこの地上に降り注いだ。

黙示録の16章にある第一の御使いが出て行き、鉢を地に向けてぶちまけた、すると獣の刻印を受けている人々と獣の像を拝む人々にひどい悪性のはれものができた。ジムは体中がひどいはれもので苦しんだ、何という苦痛と苦悩を彼らは招いたのでしょうか！ もはやどのようなにしても助けを見いだすことはできませんでした。

第二の御使いが鉢を海にぶちまけた、すると海は死者の血のような血になった、海の中のいのちのあるものは、みな死んだ。

第三の御使いが鉢を川と水の源とにぶちまけた、するとそれらは血になった。

“また私は水をつかさどる御使いがこう言うのを聞いた「常にいまし、昔います聖なる方、あなたは正しい方です、なぜならあなたは、このような裁きをなさったからです。彼らは聖徒たちや預言者たちの血を彼らに飲ませました、彼らはそうされるにふさわしい者たちです。” 黙示録（16：5，6）

また私は祭壇がこう言うのを聞いた、「しかり、主よ、万物の支配者である神よ、あなたのさばきは真実な正しいさばきです。」

太陽はどんどんと明るくなり、日差しが強くなった、人々はその鋭い暑さから逃げようとして避難場所を探した、しかし、その鋭い暑さと熱から逃げる場所はどこにも見つからなかった、その暑さは信じがたいほどのものとなり、人々はその熱によって焼かれてしまうまでに至った、しかしそれでも彼らは悔い改めなかった、彼らは神を忌み嫌い、神のさばきを憎んだ。

それから突然のように太陽はどんどんと暗くなり、最後には光さえも失っていった、それは他の御使いが怒りの鉢を獣の座にぶちまけたからです、地の上は深い暗やみに包まれ、ジムはしるしのマークを持っている他の人々とともに苦しみのあまり舌をかんだ。

第12章

メリーが獣政権の兵士たちによって刑務所に連れて来られた日に、ヘスターは独房の窓の横に立っていました、彼女はガードマンが誰かを刑務所の庭の中に引きずってくるのを目撃しました、彼らがもっと近くにその囚人をヘスターに近づけた時、彼女の心臓の鼓動が強く打ち始めました、なぜなら、それはメリーコンウェイだったからです、彼女はフェアビュー教会からの知り合いでヘスターはいつも彼女のことを称賛していたのです、彼女はメリーが殺さないように頼んで、慈悲を求めて叫ぶのを聞きました。

「私の神！」と思わずヘスターは祈りました、「どうか彼女が主であるあなたの救いを見いだす前に彼らが彼女を殺すことがないように！ 神様、私が彼女の救いを助けるために、彼女に話しをすることができるように道を開いてください。」

彼女の涙の祈りの中で処刑人はメリーを処刑台の上に乗せました、彼女はそれを見守る中で心配と不安で気を失うほどでした、神は彼女の祈りに答えてくださらないかのように、もはやメリーの命を救う望みは消えてしまったようでした。

ヘスターは目を閉じました、祈りの中で彼女は処刑人が手に持っていた剣を引き戻したとき、目を再び開けて驚きました、彼は剣を突然のように床に落として他の人と話しをしていました、その後ヘスターはメリーが処刑台から解き放されて、引きずられるようにして刑務所へ連れて行かれるのを見ました。

それから数分経ったのちに彼女は足音が彼女の独房に近づいてくるのを聞き、彼女は息を殺して聞き入りました、それがおそらくメリーだと信じた彼女は彼らが彼女をどの独房に入れるかと心配しながら待ちました、彼らの足音はヘスターの独房の近くで止まったのです、彼女は彼らが隣の独房の鍵をあける音を聞きました。

「おお神様！」と彼女は祈りました、「どうか、それがメリーであるように！ 神様、彼女が私の隣の独房に入れられることを望みます、そうすれば私は彼女と話しをすることができます。」彼女はひざまずいて祈り、目には涙があふれていました、彼女は神に向かって、メリーの命を助けられたことを心から感謝していました。

多くの心の動揺とともに彼女は独房の窓に顔を寄せて外を見ました、獣政権の行列は刑務所の門を通り抜けて去って行きました。

それから時が過ぎ、静かになったのちに彼女は独房の壁に寄りかかり、隣の独房に合図を送る準備をしました。

「メリー！」彼女は小さな声でささやきました、彼女の心臓の鼓動はどんどん速く打ち始めていましたが誰もそれに答えませんでした。

それから、彼女は再びもう少し大きな声で呼びました、「誰！ 私の名前を呼んでいるのは、誰！」ヘスターの心はメリーの声を聞くと同時に喜びでいっぱいになりました。

彼女は興奮のあまり、ガードマンのことを忘れ、「私はヘスター」と喜びの声で叫びました、「ヘスター、ベル、ウィルソン！ あなたや母コリンズが行っていた同じ教会に行っていた黒髪の女の子、ヘスター、覚えていますか！」

メリーの心も大変な喜びで彼女の内側から何かが湧き上がってくるようなものを感じるほどでした、「ああ！ヘスター、あなたは主の救いを見いだしたの？」彼女は心配しながらたずねました、そして彼女は答えが返ってくるまで息をのみ込みま

した。

「はい、メリー！私は主の救いを見い出しました、神に感謝します。」

「ヘスター！それは何と素晴らしいことでしょう！私はあなたが主の救いを見いだしたことを心から喜んでいますが、でも私は必死になって信じようとしているのだけど、とても難しく、私にはできそうにもない、もし出来るならと思うけど」

「メリー！よく私の言う事を聞いて、」とヘスターは必死に話した、「あなたは聖書を持っていますか？」

「はい、私は新約聖書を持っています。」それはとても小さいもので、彼女はそれを腰のベルトの中に隠すことができていたのです。

「それで充分です、私も聖書を持っています、私がそれを持って来るまで、ちょっと待っていて！」次の瞬間、彼女はもうすでに聖書を持って壁際に戻っていました。

「さて、メリー、私が聖書の箇所を示すから、その場所を読んでみて！」

メリーは言われたとおりにしました、聖書の箇所を次から次へと読み、互いにひざまずいて主の救いのために祈りましたが、メリーは信じることができませんでした。

それから数日が経っていききました、ヘスターは祈り続け、彼女とともに神のこぼえを読み続けました、しかし、メリーは不信感と絶望ののちに落ちていき、もはや望みが残っていないようにも感じ始めていました、彼女は悪魔の暗やみの力の中にいて、彼女の独房の中はそれに包まれているようでした。

ある朝のことです、ヘスターの独房の鍵が開けられ、ガードマンがそこに立ち軽蔑した声で「ヘスター、ベル、ウィルソン！ あなたの最後のチャンスが来ました、あなたはしるしのマークを受け入れるか！それとも私たちはあなたの命を取る準備をするか！あなたは異教徒として火あぶりの刑にされるでしょう。」

その瞬間、ヘスターは少し驚きましたが、彼女はこの時が来ることを覚悟していたし、同時にそれを期待していました、確かにその瞬間、ショックを受けましたが彼女はすぐに自分自身を取り戻しました。

「ちょっと待って下さい！私はもう2度とここに帰ってこないのです、私と一緒に持って行きたいものがあるのです。」彼女は汚れたマットレスの下にある黒い本を取り出しました、ガードマンはその本を見て、彼女がこの独房の中にその本を隠し持っていたことに驚いていた様子でした、彼はヘスターがその聖書を抱きしめるのを見て、とても怒り始めました。

「私たちがそのような本をどのように取り扱うか！あなたも知っているでしょう」と彼は問いただした。

ヘスターは悲しそうに頭を下げました、彼女は獣政権のガードマンたちが多くの聖書を山ほど積み上げ、ガソリンをかけて燃やしてしまうのを知っていたのです、そのとき彼らは神の名をけがしながらそれを見守っていたのです、その他の時は異教徒と名付けられた名札を付けて神の子たちとともに燃やしてしまうのでした。

「その本を私によこしなさい！」と彼は聖書をつかみ、怒り狂って言った、しかしその瞬間、彼がその本にさわったとき彼はすぐにその本から手を離しました、それはちょうど、誰かがとても熱いアイロンにさわった時のようでした。

「あなたはその呪われた本に、何をしたのか！」彼はもつれた言葉で怒りをぶち

まけました。

「私は何もしていません！」ヘスターは驚いて返事をした、「その本は昔から何も変わっていません！」

「それならそれでいい、あなた自身でそれを持ちなさい」彼はそれをヘスターに命じました。

メリーは彼女の独房からそのすべてを聞いていた、ヘスターが殺されるのです、ヘスターはメリーにとってとても祝福される存在でした、メリーもやがて同じ道に行くことになるのですが、彼女はまだ主の救いを見い出していません。

「メリー！」ヘスターはガードマンに連れられて独房を出た瞬間に彼女の名を呼んだ、「勝利の時が来ました！私が神の家に帰る時が来たのです、愛するメリー、私があなたに教えたとおりに、すべての主である神を信じなさい、そうすれば彼はあなたの魂を救われるでしょう。」ヘスターの声は感動と興奮で高まっていたが、彼女は続けて「これはお別れの言葉です、私たちが再び神の御座の前に来て会うまでは、私はあなたのために最後まで祈っています。」

「ヘスター、ヘスター！」とメリーはヒステリックに叫びました、「彼らがあなたを殺すなんて！殺すなんて、できません。」

ヘスターが刑務所から出て行く間、メリーの目からは涙があふれ出ていました、「さようなら、ヘスター」それから彼女はヘスターの言葉を思い出し、私たちが再び神の御座の前に来て会うまでは！とはどういうことだろう！彼女はその望みをもっていないし、信じることもできていないのに。

メリーは独房の中の窓から外を見た、多くの群衆はヘスターが処刑されるのを見に集まって来た、ヘスターはふたりのガードマンの間を歩いていた、彼女の顔には神の栄光が輝いていた、そして彼女の手の中には尊い尊い聖書があった、幾人かのガードマンはその聖書を彼女から取り去ろうとしたが、不思議なことに前と同じような事が起き、彼らは彼女の聖書にさわることができなかつたのです、それを見ていた他のガードマンはもはやそれを試みようとはしなかつた、怒ったガードマンのキャプテンはヘスターの処刑を急がせた。

キャプテンは宣言して言いました、「あの憎むべき本を彼女とともに焼いてください、彼女は魔術にかけているのです。」

ヘスターは威厳のある兵士のように歩いた、彼女の頭と肩はまっすぐに、そしてその上に偉大な平安が彼女をおおいかぶせた、彼女にはもはや恐れはありませんでした、火あぶりにされるためにつながれていた彼女の口には祈りがあり、それを独房の窓から見ていたメリーの目には涙があふれ、彼女がメリーのために祈っていることを知っていたのです。

ガードマンたちは彼女の周りに多くの木を積み重ねました、それから彼女は最後にするしのマークを受け入れるか！とたずねられました、その瞬間、多くの群衆は静まりかえり、この美しい少女の決断を唾をのみこんで待っていました、ヘスターの眼はダイヤモンドのように輝き、彼女の頭のまわりには神の栄光がおおいかぶさっていました、彼女は何も躊躇せずに応えました。

天国の音楽のように聞こえた甘い声で、彼女は「いいえ、絶対に受け入れません、十字架の上で血を流された神の素晴らしいひとり子、イエスに感謝します、私は永

遠に生きることができるからです。」

しばらくの間、群衆はその威厳さに打たれたようでしたが、それから、彼らはひとりの人の声のようにヘスターが誉れと栄光を返した神に対して神をけがし始めた、そして、その後命令が下された。

メリーは独房の窓のそばに息をつまらせ、拳（こぶし）を握り締めて立っていた、そして火がつけられました、それから黄色い炎はヘスターの体を包みはじめました、彼女は柱に鎖でつながれていましたが、その両手は聖書を抱きしめ、唇は祈っているかのように動き、天を見上げていました、燃える炎はどんどん高くなり、彼女は赤く燃える炎で包まれていきました、しかし、彼女は痛みを感じているようには見えませんでした。

彼女が死ぬ直前に、彼女の声は神の力とともに響き渡りました、「何と彼を信じることは素晴らしいことでしょう！」それから最後の叫びがありました、「神に感謝します、勝利が来ました。」

「どうして彼女は死に至るまでも大胆に幸せになりえたのだろうか！」とメリーは驚きました、その瞬間、彼女は燃える炎の中にふたりの輝いている天使を見ました、その天使たちは燃える炎よりももっと明るい衣を着てヘスターの両側に立って彼女を励まし支えていました、神は彼女が死に至るまでも勝利を得るために、この天使たちを仕える霊としてヘスターに送られていたのです。

メリーは独房の床の上にくずれるようにして倒れ、彼女の体は震えていました、「私の神！」彼女は悲しそうに泣き、「なぜ私はラブチャーを信じなかったのだろうか！私はそれを小さい時から聞かされていたのに、私は何と愚かな人間だったのだろうか！」

彼女がそのようにして、そこで泣き崩れていた時、独房の鉄の扉をガードマンが無表情に開けて、「そこで愚かになっていないで、そこから立ち上がりなさい、私はあなたのために来ました、あなたの死ぬ時が来たからです。」

メリーは驚いて立ちすくみました、彼らは彼女を処刑にする準備ができたのです、しかし彼女はいまだに主の救いを見いだしていません、次の瞬間彼女は、その冷たい独房の中を見渡しました、そこには小さな汚れたベッドがあるだけでした、神の救いなしに死ぬことは耐えられません。

「どうかお願いします！」と彼女は嘆願するように、「私にもう少し時間をください！」と言った。

「お前には充分にその時間があつたのだ！」と彼は答えた、「来なさい！」と彼は命令して乱暴に彼女の手を取り、扉に引き寄せた。

彼女は独房を出て廊下をふるえながら歩いていた、ガードマンは彼女を連れ出した時、彼女が必死に握りしめていた小さな新約聖書の本を見逃していた、彼女は狂ったように祈り始めていた、「おお神様！どうか助けてください、私は今、殺されようとしています、おお神様！」彼女の声は詰まりました、「私はあなたの救いなしに死ぬことはできません。」

彼女がそのようにして何度も何度も泣いて祈ったにもかかわらず、神はそれに答えてくださらない様子でした、メリーの顔はやつれてゆがみ、彼女の目は悲しみと苦しみを現わしていました、そして彼女は彼女の行く道に処刑台を目にしました、

処刑人は手に鋭い剣を持って彼女の命を取るために立っていました、彼女のひざはとて弱くなり、彼女は歩き続けることができるかどうか不安になったほどでした、彼女の目はその途中にジムを見ました、ジムは彼女にぞっとする醜い笑いを返しました、それは思わず彼女の足を止めるほどでした。

最後に彼女は処刑台の前に立ちました、「神様！どうか私を助けてください、」と彼女は祈った、「助けてください、神様！」しかし、それでも答えはありませんでした。

メリーは厚かましい態度のキャプテンに、「あなたはしるしのマークを受け入れますか？」とたずねられた、そこで彼女の心臓の鼓動は激しく打ち始めました、彼女が長い間、恐れていた時がついに来たのです、彼女は神の救いを受け入れていないにしても、しるしのマークを受け入れることはできません。

「いいえ！」と彼女は叫んだ、彼女は頭を風にゆれる葉のように横にふった、私はしるしのマークを受けることはできない、神はまだ私を救われていないから、なぜか！彼女は神にさわることをできないように思えた、しかし、彼女は心に思った、私はイエスキリストが私のために死なれたことを知っています。

その瞬間、はじめて彼女にとってかすかな光のように見えた真実の信仰が出てきた、彼女はみことばをその小さな光の希望の中で繰り返した、暗やみと不信仰が神の聖霊によって横に動いたようだった、彼女はイエスの十字架の苦しみと痛みを少しずつ感じるようになってきた、十字架にすべての力があり、そこに栄光が見えた、彼女は神のひとり子が十字架の上にかけて、彼の両手から血が流れ落ちる姿を見た、そして彼女は彼を見上げた、そのとき彼は彼女に対してこう言った、「私はあなたのために死んだ、私の血は今に至るまでもあなたの罪を洗い清める力がある、もしあなたが信じるならば、」

彼女の顔は神の栄光によって明るくなり、彼女の眼はふたつの星のように光り輝きだした、そして彼女は勝利を得た者のように叫んだ、「私は信じます、私は信じます、私は神を見出した、私はキリストの神を見い出した。」そして彼女は歌を歌い始めた。

“罪を洗うは、イエスの血潮のみ”

“また清めるも、イエスの血潮のみ”

W h a t c a n w a s h a w a y m y s i n ?

N o t h i n g b u t t h e b l o o d o f J e s u s

W h a t c a n m a k e m e w h o l e a g a i n ?

N o t h i n g b u t t h e b l o o d o f J e s u s

彼女はそのすばらしい神の栄光の中の幸せによって彼女の処刑を見るために集まってきた人々のことを忘れてしまうほどでした、ガードマンは彼女を静かにさせるために怒鳴った、しかし彼女はそのすばらしい喜びのために歌い続けた、まわりにいた人々に不思議な恐れがおそった。

「彼女を急いで処刑にせよ！彼女の頭がおかしくなってしまった、」キャプテンは唇をふるえさせて叫んだ。

彼らは彼女を処刑台の上に乗せた、だが彼女は彼らの乱暴な扱いを感じなくなっていた、彼女は歌い続けた、彼女の歌はとても美しく、天の天使さえハープをわきに置き、聞くために皆を静かにさせました、その時、処刑人は剣を勢いよく振り上げてすさまじい力で振り下ろした、しかし、メリーは痛みを感じなかった、このすばらしい神の力によって彼女は目を上げました、そしてひとりの天使が彼女に光る白い衣をおおいかぶせました、彼女はしゅろの枝を持って神の御座の前に立っていました、そして神を賛美して叫びます、「聖なる、聖なる、全能の神！」

メリーはヨハネが黙示録の中の7章で語っている誰にも数えきれぬほどの大ぜいの群衆の中のひとりでした。

“その後、私は見たあらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、だれにも数えきれぬほどの大ぜいの群衆が白い衣を着、しゅろの枝を手に持って御座と小羊との前に立っていた。

彼らは大声で叫んで言った。「救いは御座にある、私たちの神にあり、小羊にある。」

御使いたちはみな、御座と長老たちと四つの生き物との回りに立っていたが、彼らも御座の前にひれ伏し、神を拝して言った。

「アーメン、賛美と栄光と知恵と感謝と力と勢いが、永遠に私たちの神にあるように、アーメン。」

長老のひとりが私に話しかけて、「白い衣を着ているこの人たちは、いったい誰ですか、どこから来たのですか、」と言った。

そこで私は「主よ、あなたこそご存じです、」と言った、すると彼は私にこう言った、「彼らは大きな患難から抜け出て来た者たちで、その衣を小羊の血で洗って白くしたのです。

だから彼らは神の御座の前において、聖所で昼も夜も神に仕えているのです、そして御座に着いておられる方も彼らの上に幕屋を張られるのです。

彼らはもはや、飢えることもなく、渴くこともなく、太陽もどんな炎熱も彼らを打つことはありません。

なぜなら、御座の正面におられる小羊が、彼らの牧者となり、いのちの木の泉に導いて下さるからです、また、神は彼らの目の涙をすっかりぬぐい取って下さるのです。（黙示録、7章9－17）

ジムはメリーが死ぬのを見て立っていました、彼は彼女の姿を忌み嫌いました、実に彼は彼女が殺されるのを見てうれしかったのです、彼女の頭は切断され溝へ落とされました、ジムは彼女の頭を髪の毛をつかんで拾い上げました、そして狂人のようにそれを振り回して、獣（BEAST）に名誉と栄光を返し叫びました。

ちょうどジムが血だらけの頭を地に投げ捨てた時、興奮したメッセンジャーが彼に「世界中のあらゆるところで恐ろしい嵐が起きています。」と伝えた、天から45キロ以上ある雹（ひょう）が落ちてきています、それによってほとんどの道路が通行止めになりました。

その瞬間、地球自体が大きな力で揺れ始めました、太陽は光をなくし、真っ黒になり、月は血のように真っ赤に染まりました、それから天にある数々の星が何と！

落ち始めたのです、それはちょうどいちじくの木が強い風で揺さぶられ、いちじくがそこらじゅうに落ちていく感じでした、そして、すべての山や島がその場所から動き始めたのです。

星は天から落ち、太陽は輝くことを拒絶し、月は血の色のようになり山々や島はその場所から崩れ落ちるように移動し始めたのです、これらのことは神がこの罪深い人間の世界にさばきを始めて以来、今までかつてなかったものでした。

ジムおよびすべての人々は天が開くのを見て、大変な恐れが彼らを襲った、そして彼らは神の子が白い馬に乗って現れるのを見た、彼の眼は燃える炎のようであり、彼の頭の上には多くの王冠があって、ご自身のほか誰も知らない名が書かれていた、彼は血に染まった服を着ていて、彼の名前は神のことばと呼ばれました、天の軍勢は真っ白なきよい麻布を着て、白い馬に乗った彼につき従った。

ジムは大変な恐怖の中でそれらを見上げ、彼は鋭い剣が彼の口から猛烈に出てくるのを見た、その着物にも、ももにも「王の王、主の主。」という名が書かれていた、彼はほえるライオンとして、しるしのマークを受けた人々に復讐をするためにこの世に来られました。

しるしのマークを受け入れていた人々は岩や山に隠れようとして狂ったように逃げまわりました、ジムのあの大胆さと傲慢さはなくなり、岩や山々の中に隠れようとして岩や山々に自分をかくまってくれるように頼んだ。

「私の上に降りかかってくれ！」ジムは半狂乱で叫びました、「私は彼の顔をまっすぐに見ることはできない、岩よ、山よ、私を埋めてくれ、私を深く埋めてくれ、私が二度と彼の顔を見ることがないように！私を埋めてくれ、私はマークを受け取りました、私は私の魂を悪魔に売りました、もはや私には罪の赦しはありません、私は天国をこぼみしました。」と彼はうめいて言いました、「彼は私のために死んでくださったのに、私はそれを、その愛に感謝しなかった、私は彼の血を自分の足で踏みにじった、私にはもはやあわれみは残されていない、私はあの十字架の血に染まった手を拒んだ、私は神の白い御座のさばきの前に立つでしょう、そして裁判官は私に言うでしょう、呪われた者たち、私から離れてゆけ、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火にはいれ。」

「岩よ、山よ、私に降りかかってくれ、神の怒りの日が来た、私は悔い改める、しかし、その悔い改めは受け入れられない、私は迷い、失われた、私は永遠に失われた。」彼は泣き叫んだ、その声は地獄の底から聞こえてくる一つの声のようだった、その声は、まさしく地獄の底から聞こえてくる魂の叫びのようであった。

完